

犠
牲



ネグロスの惨劇

里見 さとみ
高義 たかよし
須崎市・SS



犠
牲

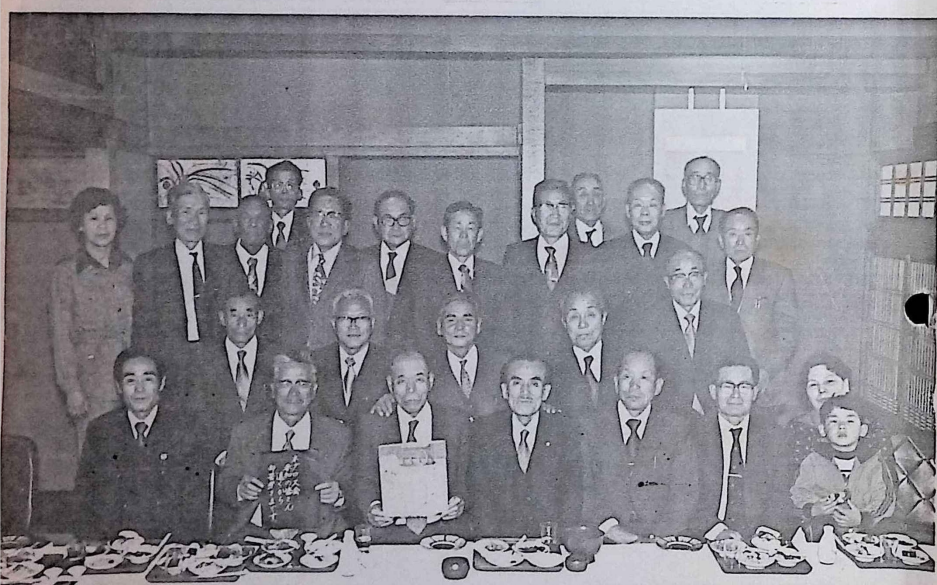
激しく苦悩の闘いの日々であった
この戦記も戦友の霊に捧ぐ

里見高義
(旧姓 藤松)

(昭和二十一年三月脱稿)

Philippine Negros 1/2
56. 4. 4

井上之男 奥さん 三木邦夫
金周辰己 車系保 河野君雄
太田照夫 上望重郎 勝原正
井上之男 新地等 藤原孝夫
赤瀬芳 里見高義 樋口利光
田田方重 藤田重男
近藤勇 鈴木巧 野中盛幸
安井賢 黒田悦 味代木勲一
孫さん 黒田悦さん



ネグロス会 昭和56年4月4日 於 高知得月楼

目次	巻頭言	日記抄	11	地図	(10)	中隊編成表	(14)
一	闘	い	18	野戦病院の夢	122	頁	
二	正	月	25	部隊長の死	139	頁	
三	勤	務	31	身代わり	152	頁	
四	決	心	38	患者輸送隊	164	頁	
五	赤い	花	46	孤	172	頁	
六	善	悪	55	脱	182	頁	
七	乱れる	心	62	悪	195	頁	
八	戦友たち		77	桜	212	頁	
九	地方色		87	盆	216	頁	
一〇	愛する心	愛さる心	92	カ	224	頁	
一一	残	留	100	分	228	頁	
一二	連合軍	上陸	105	散	239	頁	
一三	訣	別	109	アル	245	頁	
一四	機	縁	114	フ			



初任当時の姿 (藤松)
(昭19.2.10)
高知陸病予術室前にて
池 孟 (今橋 孟) 上等兵 撮す



死にありて乱る者あり (地獄谷)

巻頭言

わたしの軍隊生活、ことに一年八か月に亘る比島戦線での体験は、真に導く、意義あるものであった。
わたしは、辛うじて持ち帰った走り書きの日記と、ありし日々の生々しい記憶を綴り合わせて偽りない一書を得、やがて将来襲ってくるであろう苦難に処するわたし自身の、こころの糧に充てようと思う。
いまでもなお、そのままに浮かんでくる戦友諸氏の御交誼を謝しあわせて今は、とき友らの、瞑福を切に祈る。

昭和二十一年 五月三日

藤松 高義

別離傷心

ネグロス島プロパンダにて 二〇九七

夕陽はビサヤ海の彼方に落ち、なんとし
いままさに美しい、夕焼けが
カンラオンの山脈に映えている。
しかし、おんみらが

いかに美しい風彩を粧うとも
 わたしは決して魅惑をおもふことはできない。
 双葉の台地よ。脇天神 東、西太郎の山々
 としてカマリスクの草原よ
 もし おんみらが奪い去った戦友を
 わたしの手にもどしてくれさへするなら
 わたしは自然詩人にかえって
 声を限りに おんみらを賛美しようものを。

昭一九・五・一一

〇時四八分 善通寺駅出発。初陣なり。

一九・五・一三

門司出港。 予防接種準備。 中隊編成表作戦など多快

一九・五・一五

高知陸軍病院へ残してきた班員たちを憶うと、なぜか寂寥を感じ
 いる。あかうすり丸は、台湾の南端を離れ、いよいよバリ
 海峡に入った。このあたりはただ暖流と潮流の関係から異様な波

濤が逆巻くだけでなく、すでに連合軍水雷艇の出没のためもあり、か
 なり緊張した無気味さを感じる。 実に暑苦しい。 船内の生活は大
 分馴れはしたものの兵隊たちは、隊毎にする対空、対船監視や対
 敵行動の訓練に忙しい。 検便名簿調整のためキヤビンにゆくと、
 扇風機は勢いよく巡回しているが汗はひっきりなしに出てくる。

一九・五・一七

正午近く、金を覆えず勢いでスコルが襲来したが、たまたま雷雨が
 上かつて快晴となる。 終日ルソン島の西岸を航行するが、明日も夕
 刻まで続くとか。

一九・五・一八

船団はいよいよマニラへ入港するのだ。湾口を扼するコレヒドールは
 白い敵の兵舎が生々しい爆雷の跡を止めて、先年の激戦を偲ばせる。
 十七時、マニラ沖に入る。甲板からの街の灯が美しい。夕食後ほと
 んど全員が甲板へ上っている。わたしは中隊保大地の三人で船尾に
 陣取り、落ちていくマニラ湾の夕陽をいつまでも眺めていた。
 船員の弾くギターの調べが胸づまる感傷をもって迫ってくる。

「うすい丸」は七号岸壁に着く、こいつは実に大規模なもので長さ一〇三二呎、幅二二〇呎の二階造りで一万噸級の船舶が同時に四隻繋留出来るそうだが、上陸すれば一先ずマニラ兵站宿舎に泊るといふことになるだろう。

島本中隊は出港してマニラ島へ移動する。というのに、船内で赤痢を発病した患者を入院させねばならない。徳久見習士官に同道願い、馬車に揺られて、マニラ兵站病院ゆく。これは乙なものだ、どこかの街角で貿易商の来栖氏に会えそうな気がする。豪華な病院の、美しい南国の花に一瞥する。

ここは、かの探険家フルビナンダマゼラン憤死の地、マニラ島、土民の酋長ラブラによつて殺さる。土地の言葉で「米を意味する」「ホマエホマエ」に設営して今日で四日目、遠い故郷の村が無精に恋しい。セブへ渡って、旅団の軍医部を訪ねたが暑いと果敢に。バンカに乗りオボンへ渡り、バライへ帰った夕昏れ。椰子の葉末に

輝く南十字星を眺めると、土民のカンタが聞えてくる。九中隊が中西伍長が「部屋の中は蒸し暑く、蚊がいてやり切れない」といつて遊

びに来た。全くさうだ。戸外へ出ようか。と二人は外に出た。草に腰をおろして、

十字星や、オリオン星座などの話をしているうち、あの府高い土民たちの歌はなおも続いている。同じ文句を幾度も幾度も繰り返しているようなあの島民歌。また手を叩いたり、新しいの調子をとったりしている音が、餅を搗いているかのようにも聞こえる。周囲七里という小さい島の海辺の一角に彼等だけかかたまっている土民たちが今夜もまた踊っているらしい。

「や」ともな、中西の妻に、「こんないい月だもの、始まるすにはいいよ」と、あたしは應える。おそくなつてから、明日の患者診断と薬物の協定をして二人は別れた。もう夜も更けた。何処かで蜚脚が「カツコーカツコー」と啼いている。

ギラギラと眼を射る珊瑚礁のホマエホマエを離れて二日目、中隊は、セブ、ネグロス島の北部海面を進行している。海上でも毎日のように

スコールがやってくる。それはすぐ熄んで、その後、涼しい風が甲板を吹き抜け、全くササ生（せいせい）の思ひがする。東の方に、漆黒の雲が漂っている。西のバネイ島あたりの上空には、美しい虹がかかっている。船近くに、うわうわが群れとび、海豚の大群が、巨体を空中に跳び出しては、競泳をし、そして潜水を始める。

南風は、しきりにそよいで、名知れぬ柳子の繁る小さい島々は踊るようになり、遠ざかっていく。そして、夜を迎える。わたしは兵士たちの中へ割り込んでいった。

「おまえたちは南十字星を知っているか。」「いいえ。」「駄目だよ、気を付けて見ないと……」。あれだ。あたしが指さす方を兵士が見入る。

「ほら、あそこにはよく光る星が四つあるだろう。あの菱形の頂点を上下左右に対角線で結んでみろ。沖縄から南でないと見えないんだよ。南のサザン・クロス（南十字星）の十字架のクロス（しるし）でサザンクロスと呼ばれる星座だ。」「ほほう、あれが……」。月はないが、空は一面銀砂を撒いたかのように輝いて美しい。

「随分 日本を離れたな。わたしは 独り……そして 船室に戻った。」

一九、七、二三 ゼブにて

旅団軍医部付として勤務していた私と白石伍長（浜本隊衛生下士官）は、夕べ振りに外出。世間ははかりの俵詰、四十七円也を飲みつくすべく、バー（ロジス）に入る。シラス（ライオン）のウイスキーは格別の味。帰途、先日偶然に知合った元マニラ大学哲学教授のC氏の家に立ち寄り、

いよいよギンバラオンへの進退を明日に控えて、下士官以上の宴が、棧橋の陸軍但馬部で行なわれた。

七十料のスピードでサラビア軍へ赴く。運転は森岡英則、二十時上、嗚呼、雷鳴、豪雨のため、寝つられず、そのまま一夜を明かす。連合軍はレイテ島、タクロバンへ上陸した由。

一時一五分起床。サラビア空港に赴く。昨夜着陸した友軍四式機全機離陸。レイテへ赴きたりと、合衆軍。

山口部隊へ配属されていた中島義理衛上等兵以下五名が中隊に帰

As the fish that lives
Deep in the muddy water's,
Be my secret thoughts so hidden,
Never known to others.

濁り江の底に深く棲む魚の
かくれおこし 他人に知らぬ

憑心君莫話封侯事

生民何計樂樵漁

得江山入戰國

曹歲
松作

昭和三十年四月十日 野戦病院へ
乾き傷の途上で拾ったリフレットに
「カ文章力があった。多分日京
二世の宗子であろう。」

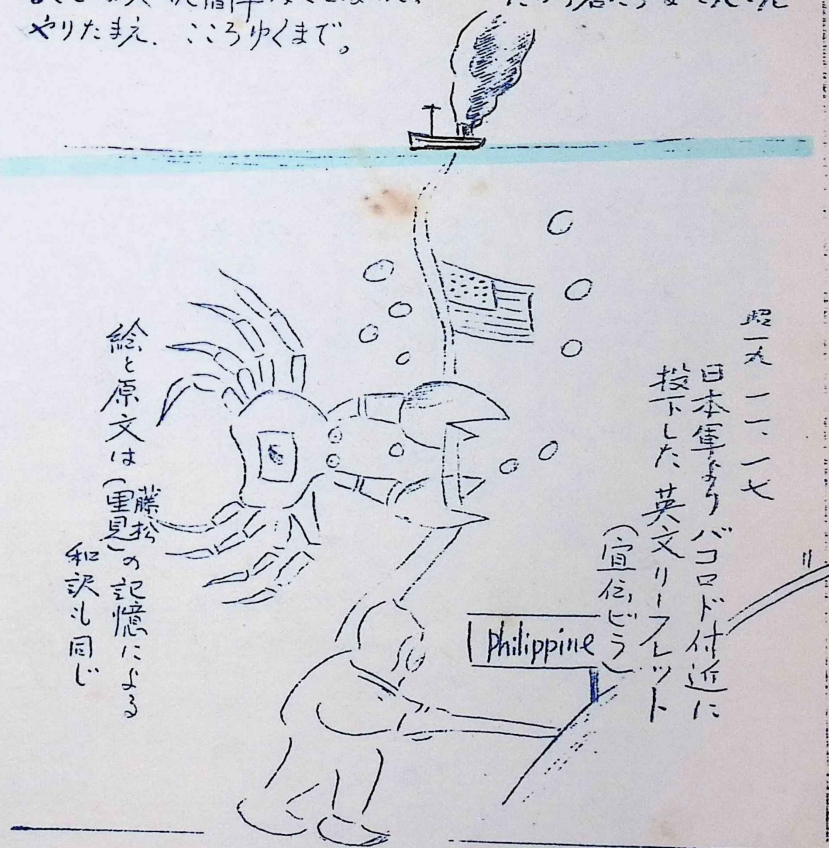
る。皆元氣で嬉しい。早速心隔てぬ友、中島に「任務室の番を頼み
業務連隊のためサラビアに向かう。後援兵、兵長は例の胃病の予
後か、んはしからぬとみえ、休務中であるとか。」
一九二一、五
一一時 コンソリーニッド B 二九、三六機編隊かくま。ナが付近と
ハコロド空襲の被害甚大なるべし。
一九二一、四
この日、あか誕生日なり。三時起床。近辺に新たな機動部隊と空輸
部隊が出現したと伝えらる。ヨサツ（C 二九）の敗走（一）の行動最近に
悪化せり。翼特別攻隊四十八機、あかの翼の下に爆弾を抱き、
これの衝滅に赴く。柳子の葉末に仰ぐ友軍司偵機、胴の口をぬか
眼にしむほとに、一本六四也の煙草をくゆらせていると、またし、ロッキード数機の
襲撃に会う。安易な一日を欲する者あり。すむに、あか工兵隊は
疲勞の極みに達し、練兵休むかなり多し。休養をさうべし。
鈴なり、サラビア、柳子を採る老翁、影が夕映えの中で美しい。

筆者軍歴 高知県世話課 証明内容。(但し筆者の申請に基づいて)

昭和年月日	事	項
17. 4. 10	兵隊4連隊補充隊	入隊
6. 25	衛生兵を命ず	高知陸軍病院に通修を命ず
10. 10	衛生一等兵	
11. 30	昭和19年度衛生下士官候補者教育のため広島陸軍病院に令置を命ず	
18. 4. 10	衛生上等兵	
10. 10	衛生兵	
11. 29	教育終了	
30	原隊復帰	
19. 1. 4	高知陸軍病院に転属	
2. 1	衛生伍長	
5. 10	独立混成第31旅団に転属	
	工兵第4連隊補充隊に着	
5. 13	門司港出帆	
18	比律賓マニラ港着	
	独立混成第31旅団司令部に転属	
26	マニラ上陸	
28	マニラ港出帆	
30	セブ島上陸	
	セブ島出帆	
	マクタン島上陸	
	ホエホエ飛行場着	
6. 15	マクタン島出帆	
16	ネグロス島バコド上陸	
7. 10	第102師団工兵隊に転属	
20. 3. 1	衛生軍曹	
8. 30	比律賓ネグロス島バコド收容所	
20. 9. 9	レテ島アボ收容所	
11. 18	タクロバン出港	
28	浦賀港上陸	
30	現役満期	
12. 1	予備役編入	
20. 12. 3	高知県窪川町帰郷	
23. 2. 14	三興津小学校奉職	
24. 10. 1	高知大学臨時教員養成科入学	
25. 9. 30	修了	単位32
25. 10. 25	須崎市浦内里見家へ縁組	
26. 4. 1	浦内小学校へ	
27. 4. 1	横浪小学校へ	
29. 4. 1	日本大学文学部入学	通信教育
30. 4. 1	浦内中学校へ	
33. 3. 31	日本大学卒業	単位65+3
33. 4. 1	横浪小学校へ	
35. 4. 1	浦内小学校 教師	
40. 4. 1	四万川東小学校へ	
42. 3. 3	県教委 特別表彰を授け	
42. 4. 1	四万川東小学校 校長に	
46. 4. 1	横浪小学校 校長に	
51. 4. 1	新荻小学校 校長に	
52. 3. 3	坂本教育文化賞を授け	
54. 4. 1	斗賀野小学校 校長に	
56. 4. 1	退職	
56. 4. 4	得月樓にてネグロス島	

You're a long way from home. Boys in hostile territory.
But don't worry boys. Your lives are not immediate danger.
Why? Because we'll not bother with you small fry.
It's much simpler isolate you by cutting your life line.
So fire away, boys to your heart content.

君たちはふるさとを遠く離れている。敵対する地域の若者たちだ。だが、君たちは心配なくていい。君らの生命は直接の危険にさらされている訳ではないのだから。君たちの生命線を断って孤立させることは大へん簡単なことなのだ。だから君たちはズンズンやりたまえ。こころゆくまで。



絵と原文は

藤松(重見)の記憶による
和訳も同じ

昭和一七
日本軍より
投下した英文リーフレット
(宣伝ビラ)

独立混成第三十一旅団第三工兵隊編成表

昭和十九年五月一日

中隊長	陸軍中尉	島本敏雄
第一小隊長	陸軍少尉	山上正雄
第二小隊長	陸軍少尉	塩谷又雄
第三小隊長	陸軍見習士官	徳久勇 (土兵)

指揮班			
曹和手文太郎	軍小西信一	安井賢	長田政晴
伍藤松高義	宮本島雄	兵中久保満男	徳弘忠美
兵上甲佐	東条保	福井正典	生田亘
上片岡孝徳	植田徳治	藤田重男	二森本晃
大地福一			

第一小隊

一班			
伍富田正直	兵山口辰次	上本田善太郎	小棕彰
一吉兼昌三郎	十川庄三郎	二法橋安喜弘	倉橋吉喜
木下義孝	松村勇	実好三郎	山口千代志
程野傑三			
二班			
兵船田登	兵小松茂	上山崎哲弘	川邊時一
一曾根六一	一井原茂	二金岡辰己	元岡樹
加藤清一	本田義一	小原栄次郎	植村豊樹
浦野勝秀			
三班			
兵東武男	兵上久夫	坂本太一郎	白川高義
一青野栄一	二藤田勝利	長岡好雄	小泉満好
徳田十郎	妹尾寛	大中豊	岡部光次
中国忠義			
四班			
兵下村直	兵高橋慶忠	上藤本金太郎	山中政夫
一柿本徳保	二梶原恭男	二金子金次	松岡正喜
杉村孫一	小松忠臣	堀内正嗣	高橋茂
森松信正			

第二小队

伍	谷中繁富	兵	藤井良信	兵	井上常助	伍	堀内直輝治
上	伊藤都築	上	永峯行雄	上	田川 勇	上	安藤竹正
一	堅田清作	上	永井栄吉	上	坂田 治	上	高山 太
勝	瀬 正	一	松友勇	一	藤川 音一	一	山田豊一
田	中萬治	一	森 貞一	上	安田則和	上	池田憲二
三	好貞一	二	池田昌稔	二	香西嘉太郎	二	高宮 登
渡	邊勝安	二	田中繁信	上	長倉年太郎	上	池本 和躬
吉	田 茂	上	中川一行	上	松崎良吉	上	木内 寛一
西	森庶治	上	新地 等	上	山口嘉次郎	上	味代木勲一
田	中敏春	上	大西 寿	上	丸山 義之	上	竹崎有一
赤	瀬芳敷	上	石原誠臣	上	欽野 馨	上	松下金七
森	忠治	上	都築 伸	上	安永 恵	上	黒田 悟

第三小队

田村善一	高田勝一	近藤勇	賀川周二郎	森本 嫡	植内理二	二 西川小太郎	小西清	一 山本助一	吉本正敏	上 塩崎兼吉	兵 松尾茂行	伍 東条貞男	一班
松浦義天	藤原富太郎	安岡進	三原順吉	藤田行雄	二 西尾住次郎	楠野福富	一 堀田八郎	中島茂理衛	合田政一	上 香川進	兵 井上久雄	伍 井手剛	二班
小野豊太郎	秋山富久	平井徳一	山下政雄	黒石光雄	二 藤本武久	二 篠原豊次郎	一 藤田秋吉	森岡英則	鈴木巧	上 杉本末喜	兵 上野重太郎	伍 富田房驥	三班
三木邦夫	篠原 亨	宮崎初行	坂本善子	太田照夫	二 河野君雄	二 樋口利光	一 目戸竹正	竹本龍松	新田唯一	上 新家富雄	兵 山口正八	伍 角田 恵	四班

一 歸 い

昭和十九年五月八日 我命令
 一 陸軍衛生伍長 藤松 高義
 獨立混成第三十一旅団第三工兵隊二戰属ヲ命令ス 依テ五月十日
 一三〇〇迄ニ西部第三十七部隊本部ニ 到着スベシ

行く方は幾千里にみくさの
 海に 雄々しく 船はいま残つ。

昭和十九年五月十三日 獨立混成第三十一旅団第三工兵隊を束せた
 「うすり丸」は、朝霧に深くとまき小門司港を出港した。堂々の
 船団は、とす黒く荒れ狂う悪魔の海峡バシの潮を蹴って一路南へ
 進下。五月十八日ヒリピンルソン島 マニラに入港した。折り返しく
 赤痢発生に伴う防疫のため、余儀なく一週間の上陸禁止を命令せら
 れた。五月二十六日マニラ上陸。翌二十七日マニラ出港。二十九日セブ
 島セブ上陸。セブ出港とはやくも中隊はあまたしい行程を経て

マクタン島に上陸。ホマエホマエ空港の設置に着手したのである。
 とにかく不潔な蠅の群がる地域である。マクタンといふばかり探險家
 ルイス・アンドマゼランがセブの酋長ラプラプによって殺害された恨みの
 地である。五隻の船と二七〇名の船員が一隻と一八名になつたが
 Macinicoや Manipina (太平洋やフィリピン)の名はマゼランの名付けた
 ものである。
 か六月十六日事態の急に依りて島本中隊は、この島オポンを離れ
 十八日ビサヤ地区と呼べるネグロス島西ネグロス州バコロドに上陸
 市の東南に位置する。一歩、いこも一跡に屯しバコロド飛行場の
 設置に努むことになった。
 十九年七月十日師団改編に伴い、中隊は第百三師団工兵隊(通
 稱威) (一〇六九七部隊)の島本隊に改められ小隊になった。
 この水と同時に私はセブ島セブ市の第百三師団本部へ単独で移
 らねばならなかつた。
 その頃、原因不明の熱発で苦しんでいる要請言兵長を見捨てて行くの
 は実に忍びないことではあったが命令を名を付く權威に勝れる筈
 はなかつた。
 転属していったセブでの師団司令部勤務は多忙で、私も白石伍長も共

共参つてしまった。
ある夜、喉に寝室へ戻つていった私は、ネグロス島の島本隊よりの電
文報告に接し、衝動の余り、再然となった。それには、赤松の川辺時
一、気転の利く岡田光次の死、却紫三等兵の受傷の旨を知らせた
のであった。

マダパンにて 昭二九七二一 右肩胛間部右乳房部貫通銃創 川辺時一
マダパンにて 一九七二一 左季肋部膈部貫通銃創 岡部光次

多分敗匪に散られたものと察せられるが、勇躍祖国を出発以来七十
日を経過したばかりのいま、早くも戦死しようとは、(合掌)

中隊衛生部員の車条や三木たちも随分困惑しているであろう。後
兵長の経過や転期は？と聞く思は、悪い憶測に傾きさらに具体
化した想像となり仲々寝つられないばかりか、バコロドの中隊が恋しくな
え思われやらない。

この夜、柳子の樹上で、互に相手を求め、一対の蜥蜴を窓越し
に確認した。以前はカッコ島かと思つてたが、まあ小もなくグロテスク
な蜥蜴の雄叫びだったのだ。
数日後、例によって軍医部へ出務した私は重大な情報を目にした。

当時一〇二師団管下の工兵隊十個中隊は、セブ、パナイ、ミンダナオ等の
島々に分散して、それぞれ激しい労務に服していた。なにしろ、酷暑、瘴
癘の地であるだけに、各隊から原因不明の発病者が続出している状況であ
った。だが衛生下士官を管下の中隊から吸い上げってしまった師団本部は
軍医部と共に対策を講じないわけにはいけなかった。
佐極各隊から召集した衛生下士官を、原隊へ復帰させ、隊付勤務を
とらせることに決定したようだった。

待望のその日が遂に訪れた。中隊中四、大中隊白石、十中隊の私
の三人は、機帆船に便乗し、私はバコロドに戻ってきた。

バコロドの街々は外見は相変わらず平和な賑わいの中に明け暮らして
いるようであったが、八月十五日はやくも陣地構築の秘命を受けた中隊主
力は、八里離れたギンバラオン地区へ進出しなければならなかった。

丁度その頃、徳少尉の率いる一三隊はバコロドで飛行場滑走路補修
用の薬石採取のためマダパンで作業を行っていた。

健康の整理と薬物調査の目的をもってマダパンへ赴いたことがある。多
サイ東方の七キロメートル。緑野を走るココモーション(機関車)に身を乗
せて行ったマダパンのあの一日は、いまして、思えば全く悲しい思い出になつてしま
った。

その日の夕方、用務を了した私は、先ず谷中伍長を訪ねた。バコドの休養室で長い間、全く長期肉、私を手をすうせた。後は病癒えてもう炊事勤務などか出来るようになっていた。年若く、異様なアクセントを持ち、眼の底に冷徹な光をくしなから、そのくせ親しみをも見せる中西は、私と同じ現役下士であり、後や三好の分隊長でもあった関係で、門司出港以来の縁の繋がりか、切れたなかった。

その夜（八月十三日）私は谷中分隊に一通をい、衛兵下宿の田中の好意に甘えて床についた。狭き、バライの一隅で一枚の毛布にくるまり、眠れぬままに、あまの環境や性格、そして彼が今日初め受け取ったという内地からの便りや子息の字真のことなどについて、おそくまで語り合ったことだった。私が彼を知り、彼が私を識ったのは、私がきつかけであった。語り合ったことだった。と呼び、萬治と呼び交い、単なる階級や職能の不調和を超越して二人は、感応的な了解の中に結ばれていくことになるが、不思議な機縁と云わねばならないであろう。

昭和十九年九月十三日、米空軍の行ったバコド空港急襲以来、工兵隊は死物狂いの復旧作業に余念なく、私は中隊患者の処置、薬物収集書類調整に忙殺される傍、中隊の作業現場を巡回すべき任務を持っていた。

大君の邊に、死なぬ大丈夫の誇りよ、幸よ極まりなけれ

當時は曜日はおろか、日時の確認も困難なほどに、連日連夜の作業が続行された。爆速による滑走路の弾痕は、赤茶けた醜体を天空に曝し、埋めても埋めても新たな空洞が、えぐら小してしまうばかりだった。

バコド郊外の夜更け、広大な柳子林に隣接する飛行基地で、兵士たちは、小休をしながら、信念を胸に、ただ黙々と、是を使い土を盛る、ふるさとを遠く離れて異国の島に闘うこと半年、雨が祖國の山河に相まみえることを得るも得ざるも、の一戦なのだ。

その夜は十六夜。明るく、月が、恍々と滑走路やエプロン帯の廢墟に、光を返している。バコド飛行場。

「小休止」の伝達を耳にするや、否や、所かまわず、いこうと、寝転ぶ兵士の疲勞は、何を以てしても表現することは不可能なはずである。

残り少ない煙草、紙を分け合い、喫い合ひながら、疲勞を示すだみ声で話し合っているのは、親しみ、子のこと、妻のことであった。

「南の磯に、今宵は、柳子葉、敷き、

月の光に、染みて眠らん」と詠む私の声へ。

「ああ、思いっきり眠ってみたいのう」と吐息づく兵士等の胸中は偽らぬ告白であるのだ。突然、対空監視所から「西方向、爆音」と大音が伝わる。竹本龍松兵長の怒声である。敵機の来襲である。辺りのざわめきはたとえ止む、縛るで地獄の黙示である。その息詰まる沈黙の中に聴こえてくるか細い蟬野の集まるその虫のすだきに連って何か不気味な念りが天下ってくるようだった。全身の緊張を空間の一点に凝集して、探ると、月光にぼやける星雲の中に、獲り鳥の一群らしいものが通過して行く。視神経と聴神経が絡みつく天空の肩部に運々とその姿体を拡大しながら、真正面に突っ込んでくる敵機の群れ。胴体かくつきりと月光を反射している。「あ、重爆だ。全員退避。」一際、飛高、伝令の叫びに先を争って分散する作業隊。巨大なマンゴ樹の影にしやがんで聞く上空の音波。それは、ウーンウウンウウンと、肌寒い深夜の上空の流えを切つて、あたかも故郷の晩秋によく耳にした脱穀機の騒音を連想させるかのその音波は、その音波の根源は全員が注視の的となったが、突如としてその機首をキラリと照みつけるかの、とく光らせた。「おい、大張りコンソリだろう。右横にいる中島茂理衛上等兵に私かまきやい

た時、はじめて不気味を感じた。

と、車輪然たる音響を放つて炸裂する。投下爆弾。「ヒューン、バラバラッ」と、土塊や石らしきものが散乱する。全く凄まじい速度だ。しかし、この夜は、誰一人の死傷者がなかった。一つの奇跡でもある。私達は翌日もまたその翌日も、同じ作業場を同じ場所で行き交わらなかつた。こうした生命をなげうつとする滅私奉公の昭和十九年の夜と昼を、私達はいつにか生き抜いて来たのであった。

二月 正月

そして、茲に輝かしい元旦を迎えた。八時から厳肅な皇居遙拝の式典が行なわれた。満ちる水を湛える藻に佇む松の羽翠。遙かに打む祖国の宣城は、崇高なものであった。さやかな朝の冷気をつんざいて、聖寿の万才三唱が叫ばれ、すてきな戦友の壺を悼み、続いて銃剣術の基本動作、そして新卒の宴が張られるはずである。指揮班の私達は中隊長の相伴（しょうはん）であったが、雑煮は何の月も前から期待していたほどの味がなく残念であった。常夏の気象条件もあるが、比律賓産の米（カライ）では正月気分も、別に重くない訳だ。

がら引く引くつくるの様にふるふる肩の動きが痛ましかった。
佐令は、徳田十郎だった。彼はミライの患者療養所で、大腿骨を折れか療中
の青野棠一患者の付き添いも勤めてゐるはずだった。

「あつたあつた、大変由苦勞だった。本當に有難う、中国の危篤を以てに傳へて
微塵の動揺もない私も、徳田はいふかしく思ったかし知れない。」

中国忠義の危篤も中隊長に届け、和手曹長、角田、富永、谷中の四名と
共に私は空襲下の国道一子線を一踏ミライへと車を駆けつけた。
谷中隊長が、対空監視を勤めた。

昭和十九年十二月四日、当時中隊長主力はサラビア飛行場の補修作業にあた
っていた。多岐で弾丸の中での要領であった。

中国は左肩胛下部より右脇腹に至る意通銃創で私の危急の処置を行ない、
直ちにバコロに患者療養所に搬送された。我々英則が運轉し私が付き添った。

途中車上で幾度も後頭（のど）の乾きを訴え私を困らせた。これによって脾臓
損傷による内出血を思わせるのだった。

果たせるかな、私の予測通り脾臓損傷が確認された。慢性脚気の病歴をもつ彼で
あったが、事此処に至つては、脾臓（脾臓）の摘出も受け得ず、軍医の申し出に對して
止むなく私が同意した。

空襲への灯火管制下のことオレーシン（手術）は翌十二月五日朝に持て越された。
オレーは成功し、その予後も当初は信じられない程に好調な経過を辿つていたが

入院後二週間で発熱する破目になつてしまった。これは付添い看護婦人の任務怠慢が
一つの原因と成つてゐる。

夜間爆撃機の不気味な低空飛行に怖れをなした看護婦人（特に名を伏す）が、
患者をベッドに残し、防空壕内に逃れたまゝ、夜を明かした事実があるからである。

南の国フライピンは昼夜の気温の差が大きい。この夜中国は風邪をひく引きか
たらしい。看護婦人は私のため嘆き、この病状の不減衰を語られたが、これは機械
に患者、中国に賦与された身体自然の良能は急激に蝕ばれてゐた。

のである。風邪は高熱を伴い、創部は化膿し、持続する高熱は更に胸膜、腹膜へ
炎症をきたし、遂に創口から汚物も見える重篤な状態に達してしまつた。

新たな文代派遣されて、黒田悋が中国の看病に付き添った。愛媛の同郷人の
氣易さもあり、中国はクロ、クロと名指しして黒田に散髪も頼んだり、所持品の
整理をさせたりしたやうで、良かったと思つてゐる。

わたしは中国の経過が、日本の軍医の宿命としか考えられなくなつてゐた。
ある日、いづれに硬直した面持ちで、軍医と私は、中国の食餌に關して意見を交
わしてゐた。了解を得るまでに数十分を要した。

分が解る、教会のあたりだろ、空襲警報のサイレンが鳴つてゐる。久し振りに私は氣
分が解れてゐた。九才病棟廊下の階下を駆け下るとき、精神病患者の奇声を
背に聞いた。

云々聞かされた。中庭を抜け、衛兵司令へ確定な拳銃の礼を返して、国道一号

線に出た。そして振りに見る友軍の司儀機が一機、カニオン山の方角として飛んでいった。心なしか、南翼の目玉が眼に映るほどに赫かった。

中国に擧げる餅と味噌はすでに看護人、黒田の手元まで届いているはずであつた。平素死んでいらいから甘い味噌汁の雑煮餅を腹一杯食つてみたいと口ぐせよくに言つていた彼なのである。

療養所で中国は、黒田の調理した雑煮餅を、うまい、うまいと舌鼓を打つる食つたところである。N軍医と私の二人で考へ抜いた手筈の料理であるうことは中国本人も黒田も、察知するはずになつた。(合掌)

正午過ぎ、中国の小室目指して私が真つ先に駈けて行った。入り口の扉を押すと、付き添ひの黒田一等兵が、「班長殿、少く違つたです」と首垂れた。「どうか残念だが止むを得まい。済まなかつた。」私は黒田に謝つたが、少くは、日頃の中国の人格に對する敬意を卒直に、黒田に残つたものに外ならなかつた。私達の到着は七、八分遅かつたらしい。余命が幾何になつた。なぐ雑煮を頼んだ。中国は何か言つていたか……いと黒田を振り返つた。私は黒田の眼のあたりが赤く腫れ上つてゐるのに気付いて、視線を外して中国の方を見た。いと心安らかな顔であつた。

私達は中国の靈に擧げて深い祈りを捧げた。

「中国は自分死ぬことを予期してゐたようだが、中隊が皆さんによりしくとつてした。」黒田は悲しみにくく、うろたへた。

中国の両の掌と組みあわせてやると、耐え難い孤独と絶望感か、私の腕裡を掠めた。氣の毒なことだ。家内や子供をもつ男がよく死ぬ。中国は本當にいい男だつた。老にならぬ老をやつと綴り合あせながら不平をこぼすにはいふ男だつた。和手曹長以下下士官たちも悲嘆にくれて、いまは英靈と化した中国の枕頭に押した。

空しいおしだった。遺留品の整理を終えたら中隊へ戻つてくる様にと黒田に念を押して帰途についた。

「中国は今月十月には、この戦争は終ると断言したようだが、今月はきつと忙しくて嫌な年です。」和手曹長にさう言つたが、バコド兵舎へ帰つて、たのは又焼けかき、腹立たし二十時過ぎであつた。

三 勤務

明け十一月二日、中国の病歴書調整と死亡調書の件で、ミライの療養所へ分室を訪ねた。私は、この日も夕方近くまで帰つて来た。日没になつても気温は下からず、夜に入ると、氣になつていた小雨がぱらつて来た。私の車か、第一ハイウェイを左へ急カーブすると、中国を禁煙にさす炎が、高く

天に沖して美しかった。その向う遙か彼方で、事に動じないカニラオン(山)の輪郭
 うす墨の夜空を截っていた。
 わたしの命令によつて火葬を済ませた本内が、運務室に戻つて来たとき、私は自分の
 疲労もあつた。安全に伸かいた。ベッドに俯つ伏せになつていた。
 ひたひたに絶望的な不安が、本内の膝裡を掠めた。私はふち息ついている。確正を
 掴んだら、
 朝霧は雨をもちぬカニラオン

朝霧は雨をもちぬカニラオン
 ふもと 静かに 人焼くけむり

わたしは手向ける中隊へう援歌であつた。本内寛一は、はじめ淀みなく板書の
 文字を音読してゐたが、声か詰まり、後の句が結ばなかつた。嗚咽を嚙みこみながら
 物入れ(ホケットのマツチを棚にのせ、遂に、み上げてくる情念に堪えられず、いき
 なり駆け寄り、私の背にしがみついて慟哭した。

中隊の骨格が終つて数日経過した頃、島本中隊は、空襲の危険を避けて
 バゴロド市内の奥まった東地へ移転するはめになつた。

一月も中旬に入ると、中隊主力は偵察と第三期(コサツ)の準備(敗逃)素正討伐
 を兼ねてギンバラオン地区への出動を迫られた。
 当時中隊の一部は予想される連合軍の上陸に備へ、橋梁破壊の任務
 を以てバゴへ派遣され、一部は石炭工場で工具の製作にあつてゐた。

こつした分散し勝ちの中隊全般に亘る 衛生管理は 諸々の 障壁 を伴ふことが
 多く私の悩みの種であつた。移動準備に追ひまわされ、あまただしい数日か矢の
 ように過ぎ、いよいよ出発を明日に控えた一月十三日、蒸せかえる熱気の煩ら
 しいに耐えかね、床に転がった。

椰子の葉末に、埃々たる 紺碧の空を仰ぎながら、やがて来るであろうその
 時に処する心構えを思ひたりしていると、階下の黒板に書きこんでゐた河野
 君雄の落書、すなわち

人生は仮の宿なり、生を希まず死を望まず、時然に順い、人の道を尽くす
 のみ、の句を想ひ起した。哲學的な仏教思想によるものらしいが、
 河野は一体何をしていた人間なのか、そしてあの句の表現によつて彼は何を
 思ひ詰めてゐるのか、などと思ひを巡らせてみた。

眺めやる空の彼方にほよい大きな 白雲が悠然と流し、階級社会の規矩や
 義理人情にしばらく小なから回転させられていく人間、そして自らに嫌な幻滅を
 思ひたりするのだつた。それは、自分自身にもしいるか、微細な存在とにめぐるに
 過ぬぬ人間と云ふで、遅くして巧まざる神秘を包蔵する宇宙とを対
 比しもあるのだ。

翌日、中隊主力と共にギンバラオンに移つてゐた私は、保健調査の件でシライ駐留
 の三三入自動車隊の衛生下士、浜田勝俊伍長を訪ねてゐた。豊かた人間性と派え

た頭悩の持ち主として高知陸病時代から一目おいてる彼であった。死傷者名簿、患者報告等の書類のつき合おせも完了して、我々三人は今後の戦いの予想や近き開設される可能性のある野戦病院の機構や編成等について語り合ひ、野戦病院勤務者等の下馬評におよび、俺達の前たのめであった。面会を約しなから別れることになった。椰子の葉かげの舗道で互にカチツと編上靴の踵を合わせ、無事を祈り合う心情を、めて拳平の礼を交わした。この帰りに自動車故障があり、かなり遅い時刻になつてギンバラオンへ帰つて、私の帰りを待ち設けていた東条保兵衛長に、この日一日の中隊患者、特に新患の報告を受けたか、とこに小泉満好の問題が発生していた。

小泉は急激な下痢を伴う腹痛の症状があり、下痢回数、数か余りにも多いに不害を抱き、思ひ余つた東条が彼を伴ひ、隣接部隊のA軍医に診断を求めたところ、赤痢の病名を付し、早急の入院を指示したという。連絡車もなく私の不在であり、東条はかたぎり当惑したようだが、当の小泉は絶対に入院はしたくないと言つて頑張つてゐる。病理試験は行つた形跡はないらしい。奇妙な話だと私は思った。よし、分かつた。と私は言つたものの、こいつは、ややくしくなるかもしれないと予感を感じた。こいつは大変苦労したと、東条を慰めて、自室へ帰り、私は将校宿舎に中隊長を訪ね、業務報告を終え、和手曹長を訪ねた。そして三ツの浜より耳

にした、代用衛生兵の件を持ち出すと、和手曹長は「はや、明日か始業式か」とあわてふためいて中隊長のとうへ行つた。

多岐な中隊の業務と司るのは大変である。一見して和手曹長の頼み姿に、連日の過労を窺ひ、知ることか出来た。

戦況の予想からして各中隊から一名か二名、衛生部員の増員が要請されて、各中隊へいゝ人選決定と教育実施に肉する通達が届けられていた。

結局、中隊長、和手曹長（人事係）として、衛生下士官の私の三人が相談し、新選一等兵を選定したのである。年若く健康で中学出身であること、人柄等も考慮して、選抜は短時間で決定された。

新選一等兵

と呼ば寄せ、左の事情を説明し、こゝで快諾も得ることか出来た。特殊な学問内容や技術が身につくし、彼が将来、或は中隊の長

に、いふ事だと考える私であった。明朝出発の時刻なを打ち合はせをして、いゝうちに、夜も十時を過ぎた。

兵舎へ

入つてみると、早くも眠りにつた兵隊たちの寝息が聞こえる。

さて、小泉は、私を案内して行つた兵隊に、笑いかけるほどに、余裕をもつて会釈した。病理試験の結果は、真性赤痢とは認められず、私は単なる急性腸炎として診ていた。

「小泉、こゝうだ気分は？」私の出現に、緊張して、「はい、だる、のはたる、いすか」と手探みか仕草。入院する前は、嫌だと云つてたな。

少し私の姿勢が強かったせい、小泉はこゝろ問ひにやつと血の氣を失いたことも悟つてか、「はあ、出来ることなら……」と言葉を詰まらせた。

病室は今、所詰まらしてあり、給水も悪く、全体として療養所に満足な状況でないこと、誰かに聞かされてゐるかも知れない。しかし、小泉が入院を極度に拒否してゐる本質的なものは他にある。苦である。

すて、バラワンやマキンの島々は王座としてあり、レイテ島、タラバ、近辺も奪取されてゐた。米英海軍はなほ近隣の島嶼を抑え、このネグロス島に於ける連日連夜の空襲もやめて近頃の大陸企図を憶おせるのであった。

彼、小泉とて人の子、人である。同じ、眼土に赴くなら矢張り平生心の通う、氣心の知れた戦友たちと行動を共にしたかつたのである。

「そうか、解っている。俺は明日新地を連れて、バゴドの患者療養所へ行く。十中八九大丈夫だとは考へるが、朝（明朝）診て経過が悪ければ入院だぞ。その代わり今夜俺が薬を調合しておくから、服薬の回数と時刻は厳守してくれ。便もしう一度検べてみよう。」

明日の行動に備えて車を頼んであったが、心から車庫前に掘えられてゐるのを確認したが、何故か不吉を思つた。私の予感によく適中するのだ。始末が悪い。指揮班前の青木まがいの大樹は無慮数十、数百万の強の大群がいて怪しい。

また、ギラギラと光を放ち、空を照らす。五合にも満たぬ小さな品物は、濁り江の草の蔭に一つの生命をひそめ、受けてゐる。正しく強く生きた、抜いていきたい。人合を預かり、その生死を何れの方角にも助長せらる。職能権限を今入らしてゐる。私、その私に迫る内外の悪鬼との、跋扈に針対すべき任務の重大さが、私自身を形成する。知情意の隙を縫つて、ネオンサインの五色の光とくに交錯してゐる。確認した小泉の経過が快方に向かつてゐる。喜びと均等を保つてゐる。私であったが、翌朝、始業式開始にやや間のある九時半、こう患者療養所の庭園で新地に居た。

「今日は晴れ、小泉が出た。衛生部員の仕事は俺や東条、勝瀬、三木たちの仕事を見て知つてゐる。だろ、うが、読んでその文字の如し、つまり人の生命を衛つる活動だ。その意味はたとへず、誠心誠意、務めさせよう。小泉は人を救ふか、と云へば、やうでしない。技術の面から介入してゐるんだ。と云へば、後の教育は、明日から軌道に乗る。さう、その期間に短く、しっかり肚に入、実地実物、即ち衛生部員になるように、修業する。自主的に学習して、自信ある信頼される。は立ち寄るが、連絡事項はバゴドに残望の生田上等兵に頼むようにしてくれ。生田にも言っておくから、いや、頼張れよ。」

療養所から徒歩で約十人の、ひとまず残留所の居所で涼をとった私は水野隊の軍医を訪ね、現地の薬草について多くの有益な話を聞き、昏れ近くギンバラオシへ帰っていった。ナガ飛行場入口で空高くそびえる椰子樹に魅了し登っていく老翁の姿が、ヒサヤ海から映えてくる夕焼けの熱帯に染まると見える時刻であった。

四一 決心

ギンバラオシへ戻ると、中隊内部が騒然と乱れていた。昨日の軍医が小泉を、見た来たらしい。格別診察にきた訳ではないが、小泉がどのような位置に置かれていたかを確認に足えたようである。そして、この軍医が甚だしく職権を乱用したのである。つまり、小泉をまだ入院させていないという。かどにより、中隊長や指揮班の下士官たちに甚だしく罵詈雑言を吐き捨てて帰っていったというのである。「鬼軍医です」といいます。「貴族の、その下士官をとってやめなさい。すぐよこせ」とか言っていました。中隊に平和をもちたがす為には、私が主張を曲げ、軍医のやり押しを命令に服従するか、私の意地を通して軍医の主張を繰り入れさせるか、思案はいすべし。拡大していく、しかし、左へ入らずには皮肉を得ず。それもし急ぐにはない。二日を結ぶ。最短の距離はただ一本の直線があり得ないものである。私は一つの決意をもち、地を高級軍医を訪ねていった。島本隊の衛生部員ですが、小泉患者の件で伺いました。

「ふん、入院せうだったか」

なぜ入院させないのか、と説明を迫ってくる。無闇に発言して、この高級軍医を逆上させれば、必しも残すことになりそうだった。一対一では正々堂々上下関係の保たぬ事例の多い軍隊社会である。

「入院は命令だ。小泉を診察する口実があるのか。最後のな止めのつもりでいるのか、知らない。命令命令と威文高になつて、黒い手は自らの手で腰の拳銃に火を吐かせ、小泉の美事なりリリウム、拭きのフロアー（床）に、威厳偽装（イミテーション）の熊を敷くように巨大な体をぶつけねばならぬ破目になるぞ、と知れないうちに、窮乏猫を噛むという用語もあるが、私には信念がない。決めたなかつた。」

口実と云えば、適切でないで、その言世は用いませんが事情でしたらあるにはあります。先ず現在の戦局ですが、連合軍の攻勢に對して、友軍は無力であります。マックアサは中部に待機し、攻め立てています。アメリカ第三艦隊は現在南西諸島を占領し、ルソンを連発攻撃し、アメリカ第六陸軍がルソンへ進行している。

この現地医師の破綻な情報も得ています。昨午九月十三日以来、この島各地に、この空襲の意図が奈辺にあるかは、誰しと知らぬ人はないはずで、現住民の話では、昨夜も、米軍のミサイルが、消滅艇が、この沖合に出没しているといふと、います。過日玉砕したサイパンは、ボレーン、三九が、東京へまで空襲に出向いて、援護士の三六、ハバセントを加えたところで、何になりましよう。勝てば官軍、敗れば賊軍です。軍令も、憲兵司令部も、将校も一兵卒も人間になります。

完談紛れに二城通の山隊長さんに私が言いました。私達の申分はアホ・サンファン
經由で太郎山へ墓穴を掘りに行くのです。

現在の療養所はまるで、姥捨山です。人間には創病を癒やす自然の底能を

持っていますか。症歴のフセス（進行過程）と精神的創痍の治療の間隙への

程度、軍医殿の誠意が介入したか、お考えになったことがあるでしょうか。

私は直接あなたに、蘭語があるとは申し上げませんが、こころの正義は当然

なことで正義である筈です。階級はともあれ、今の私達の社会では一秒後の

命の保証が出来得ぬ状況に迫られています。こんな場合にこそ、友愛や信義

の遵守が、要請されるべきではないでしょうか。私とて内地地出立以来、

親しい戦友たちと死生苦楽を共にしたいと、希い続けている人間一人なんです。

「それはどうだろう。彼ははいめて口を開いた。はずみと言おうか、よく私か

んなに長々と喋ったものである。」

「現在の症状と病理試験の結果はどうだか」

昨夜投薬し、四時間置きに服薬するが指示し、不寝番にも伝達するように

申し付けがありました。昨夜軍医殿にお伝えす小はよかったのです。が代用衛生

兵選定の件もあって失礼しました。今朝は小泉以下病は止まり、フルスはハナ四型、口腔粘膜はやや充血、扁桃腺

は若干肥大しています。熱は七度三分でした。試験の結果はマイナスに相違ありません。

ん。自分は急性腸炎と診ておりますが、作業の疲れと寝冷えによる風邪気味も

入っていると考えております。決して格別な他意がある訳ではありません。うい

解くたさいませんように。私は小泉について、この様に報告した。が軍医の腹の

中にやや強引だなという思いがあることも見てとったように感じた。

入院拒否は患者自身の意思で、中隊長や下士官たちの意図が入っている訳

ではないんだ。と念を押す。

勿論です。お人の意思を尊重し、目下の状況から考えて、お人のためへの私の協同

意も十分に入っているだけですよ。この点はお許しください。

小泉の胸がつかえ、雷小たし、軍医も真相が理解出来たようである。

軍医は、イギリス製の煙草に火を点け、一本を口に突いた。

「メイドインイギリスですわねサンクス。思はず、英語が出て、心中、苦笑した。

「君は英語出来るのか。」「そう、さうなら、話せます。急に、空気が異なる場所

に来て、封鎖のない軍医殿とお会いしました。失礼しました。」と云った

ものの、冷たい三斗の思いだった。

少し振りに、喫煙パイプの煙草の味は、スイートアンドマイルド

えた。二人の吐く煙が互に、揉み合ひ、絡み合ひしているうち、一つの脇をなして

窓外へ逃げていった。軍医も、私も見ていた。この談判は成功したと思った。

藤村軍曹と云った。はい、正しく、重箱読みです。変った姓だ。

外国人には、ウエスティア・パインツリーと説明してやります。

君の出身は、西部三十四部隊、高知県の出身で、西部軍衛生下士官教育隊を経て、高知陸病で外科室付、内務班長、教育助教などしてました。現在の所屬はセブ島にある第百三師団軍医部で、不登島の島本工兵隊で勤務をいたしてあります。

防蚊ネットの窓越しに緑の草原が拡がり、ドリヤンの大樹の下で白鷺を背ににいた水牛が草を喰んでいた。エジプトナイルの流域に棲むワニ鳥の話をして聞くと埋めようかと、思ったらしいと、先方より話があり、少く、金しすきで済まんこともあった。君も気苦労しただろう、か君も衛生下士官だ。昨日の経緯もあるんだが、急性腸炎の破説の出来たことは、君へにも君のためにも良いことだったとしても、患者をひとまずこの地区から下げずには置けない。彼は私に視線を凝らして言った。

彼は飛行師団の軍医であると共に、この地区に於ける最高級軍医でもある。一つの格式とプライドもある。その軍医が一度、病名と決定し入院を命じた以上、後へ退けぬ立場にあることとよく分る。

それは、入室という形式で、私の方で掃子をみます。大変お手数をかけました。小泉もきつと喜ぶことと思います。私は軍医に一礼し部屋を出た。

中隊へ帰ると、同県出身の安井軍曹が心配してくれていたよう、どうやらあったせよう、と聞てくれた。

「結構は双方の譲歩で事態は円満解決ということになりました。」

「そうか、それは良かった。仲間内にいさかいがないように、つまみこむところ、うかつと思ひよったわ。」

わがわが結果を聞きにきてくれた安井班長は私の説明に安堵の様子で部屋の方へ引き揚げていった。

一夜が明けると、空鼓が始まるぬうちにと、早朝からバコロドへ向かう手筈を整えた。森岡英則に車の運転を依頼し、小泉と私、それから私の番兵として従って、木内寛一の三人が車上の人となった。

動揺する車内で小泉は、雑裏な私物の点検などしている。対空監視役の木内は、ときおり上空へ眼をやっているが、例によっていつかの冗談をやらしている。

「小泉、入院して、もしアムさんか上陸して来て、掴まったりをしない、木内は相変らず口軽で愉快者だ。」

僕はこうする。いつ、どこで、手に入れたのである。小泉の右手にはギンギラ光る短刀が握られており、その下で腹を左から右へかき切る所作をして見せるのだった。私は何の連想もなく、その様子を傍見した。所詮、よく見せ車は砂埃を捲き上げながら南下する。道中、何の敵物もなく、常に敵機が目標になっていく。すかの空港にさしかかった。が、何のトラブルもなく、先ず一安心というところである。

「我周対空、異状なしだ。少しシライの連隊本部へ寄つてくいな。い
運転台へ車を掛けると、濃い霧の下で、いつも精悍そうな眼をたきらせ
ている我周は、顔の下半分も黒い霧におおわれている。その霧をこすうに白け
うなずいた。
我周と本内をマーケットに導く。市場へ入り、私は小氣を伴つて、すかさず本部へ
入つていった。恒川軍医に小氣を診せるためである。恒川軍医は、その標な
細くデリケートな指先で手際よく打診し、聴心器で入念に診察してくれたが、
矢張り急性腸炎であろうとのことだった。
複雑に曲がりくねった石の階段を下つて右へ折れると、そこは頗る殺風景な
マーケットが開かれており、バラックが並んでいた。とても賑わだ。
すむ

- | | | |
|------|----------|------|
| 教 | → Isa | イサ |
| た | → Dawala | ダワラ |
| 3 | → Tatlo | タットロ |
| 4 | → Apat | アパット |
| 5 | → Lima | リマ |
| 6 | → Anim | アニム |
| 7 | → Pito | ピト |
| 8 | → Walo | ワロ |
| 9 | → Siyam | シヤム |
| 10 | → Sampu | サンポ |
| 私 | → Ako | アコ |
| あなた | → Ikao | イカオ |
| 彼、彼女 | → Siya | シヤ |
| これ | → Ito | イト |
| いえ | → Hindi | ヒンディ |
| はい | → Oo | オー |
| 良 | → Mabuti | マブチ |
| 悪 | → Masama | マサマ |
| 右 | → Kanan | カナン |
| 左 | → Kaliwa | カリワ |
| い | → Ilan | イラン |
| と | → Alin | アリン |
| と | → Saan | サアン |
| 誰 | → Sino | シノ |
| さうな | → Paalam | パラム |
| あした | → Bukas | ブカス |

行く手、筆へイサ、ツラ、タットロなどと教えながら、椰子油の揚げ物を手掴みで
投げ入れ、この図は余り衛生的とは言えない。しかし不潔で不安な生活を強いるの
はアメリカであり日本であるのだ。

マリサイと通過し、海辺の椰子林をすぐ右に見る位置で、突如東葛したグラ
マニ機のため、惨々追いまわされ、方近くなつてバコロド兵舎に着くこととなった。
小泉には二階の一室を与え、薬物、食餌、区分を指示しておいた。もうあたりは
すっかり夜のときばりに包まれてしまった。

遅い夕食をすませ、床につくと、この数日の疲れが、うすうす
と覚えた。とすぐ横に寝ている体内の虫が出た。
「昇る朝日の恵みを受けて、笑ひ初めたる梅のサ代。相変らずの名調子だ。
年配のしつこ味ある老である。

「一夜目の朝豆が一つはしれは皆はしる。私の相の手が入って、ほんのしほし
の間の二人の団練の世界である。酒もなく肴もなく、しみじみした安らぎ
を思ふ一夜であった。

二階の屋根へ、ゆかんばかりに伸びた椰子の葉末も、次々く心びよる涼風
に身を委ねて、なされるまま満ち足りたかのようにある。

「明日は水野隊の軍医に会い、その日からフラサのドラッグストア(薬局)で
スルファミンと塩酸キニーネが、硫酸キニーネを見て、時間があれば、例の所へ行
つてみようかな。

私は木内に明日の予定を明示しておいた。私の言う例の所とは、今、新南地の角で食堂を経営しているマラタ氏の本店のことである。私も家族同様に引き入れてくれるマラタ家の人たちに私は好意を持っていたのだ。

と云うかなり、夜も更けたらしい。遠くの方で「カッコーカッコー」と、文尾期の蜘蛛が五に呼ぶ合っていた。木内と私は二匹の音に迷惑をこうあったが、やがて深い眠りに入ってしまった。

私達かしている憩いの間に彼等は五に奇声を発して接近し、柳子の母を揺るがして激しい情を交したにすぎない。こうした一夜は、カニラオンの彼方へまで明け渡っていったが、私の生涯を通してこれられぬ悲劇が掌を交して待ち設けて、いよいよとは神ならぬ身の誰れか知るよしもなかった。

— 五 — 赤い花 —

昭和三十年一月二十日 早朝起床。紺碧の空へ軽やかな小雲が浮かんで、巻脚絆を巻き込んでいるとB29が一機南方向へして通過していった。水野隊に寄って所用を済ませ、フラサ薬局でスルファミン、硫酸キニーネ、目薬サルバル酸ナミラ等を買って仕入れ、兵舎に戻った。十時十五分であった。兵団本

部と設定隊へ中隊月間患者報告を作製していると、またも爆音が聞こえてくる。重爆機らしい。連日定期的にやってくるので私たちが呼んでいる定期便だ。しかし、この慢性気味になっているのでそれには何の対処もしないのである。階下から、定期便ハ機、うすハ機は南方へ飛行中、残余三機は上空旋回中の不声。木内の声だ。叫べば異様に透るいい声をしている。

「今日は忙しんだ。任務遂行中に全身爆創で散ったっていいんだ。私がこう怒鳴ったとき、北側に至近弾の炸裂があった。大音があり、カラスが碎け、天井の流喰が崩れ落ちてくる。今日はかなり物騒だなとは思った。尚、鉄筆を走らせていると、班長、食事す、と木内が昼食を準備して来た。箸を取ってみたが、いっしょ木内が笑うように、雀が啄むほかにしか食は進まなかった。

雨が来襲するB29に加え、超低空のノースアメリカとんど柳子の母を揺るがすほどに突っ込んでくる。角度を更に下げて窓を激しく揺ったかと思うと、喰りを生じてはいま、機銃掃射。カチンカチンカチカチ」と騒がしく落下してくる。葉が、完成した書

類の真模にかかっている。ザザーツと俄雨のような音響。時折り白い
 鮮明な星のマークを散らして軽爆機が上空へ舞い上がり、一時ほっとした
 安堵の瞬間がある。その後、その爆弾投下と、その炸裂があるのだ。
 またも耳にくるスコールの音。あつ、至近弾だ。絶体絶命……と、この危
 機を直感したとき、万雷の本魂する音響が私の頭の中を攪拌し、
 耳鼓の鼓膜の中耳の奥底が細く震える。生ぬるい風が、よつなもの
 を全身に思いながら私は、何が堅いものの上に打ちのめされたように、
 その場でつんのめつてしまった。
 華やかな五つ色彩のたかひに溶け合つて十色を作り、さらにその
 倍数と無慮幾万の色彩の系列が渦巻く、灰白の煙霧の中に
 はつはつと抗つていく。希り太鼓の雑子に合せて打ち上げられる
 花火の描く弧は、行き交う人々の視線を聚めて、頭上の空を美しく
 彩っていくのだ。社のほとりには、一層飾つた善男善女、群衆が
 絶えず父も母も幼な馴染みの友の顔、顔が次々に現われてくる。
 森の上空から、這下つて来た霧が、霧水の上と、愛らしい小鳥の声、
 真紅の太陽が木々の梢に疲つてどこからか暖い風が吹き入ってくる。

と、急に耳をつんかく雷鳴。
 振盪を起して、たらしい。戸板などを押しのけ地獄から脱出して、南の窓から
 炊事場の辺りを視た。そこに植わっていた椰子の木が、数本折られ、その
 先端が炎上している。煙は炊事場付近にも立ち上っている。
 とにかく、階下に降りてみねはならない。さて、襦袢は、上半身裸で執務
 していた私だが、戸外へは裸体も具合が悪い。あわてて手にしたシャツを見る
 と二つ星の階級章がついたものだ。木内が食器洗滌に行くとき、私のものと
 取り違入ったのだ。そこから始まる火災が渦巻いている。木内が危い。
 周章まいと心に三回聞かせて、裸のまま、戸外に出た。見ると兵隊が二人
 いさうへ駈けてくる。誰であろう。どちらか一人が泣きわめいている。どうしたのか。
 私と彼等目かけを走った。二人は炊事勤務の山口嘉次郎、木下義孝であ
 った。右手と顔面に、水が小一箇所ずつ受傷している。しかし軽傷だ。
 「ほかに誰かやうなやつなかつたか。」「はい、炊事場の前で一人倒れていました。
 「なに、生きていたのか、死んでいたのか。」「よく見なかつたであります。
 「よし、俺が行って見る。」「私か、うう言った時、徳久少隊長、番の井上兵長が
 すっかり青ざめて駈けて来た。

ああ、癒えて、鈴なりの空を仰ぎ見るはずのサラビアの椰子林に彼は見えな
 い。私、時折作るアルコル(エール)入りのオレシ水も飲めない。淡いノスルジヤーを思わ
 せるギンバラオンの夕方の風物し……死という厳肅な事実によって一切を清算した
 のである。小泉の体温はもう高まっては来なかった。彼の左季肋部に細かな
 貫破片創を突いたが、その創は浅く、第五肋間に喰ひ込まほとのものでし
 なかった。多分、爆風と同時に、小泉以後に受傷したもので、創のその痛みは
 感じなかったであろう。小泉の蘇生、復活の奇蹟は期待してし叶わぬ事であった。
 死者の傍を離れるに忍びない私にはあるが、敢然と一線を画さねばならない。
 とにかく徳田十郎を入院させねばならない。
 小泉の屍室のしつらえは木内に依頼した。呪うべき爆音か、また近づいてくる。その
 音波の中で、「生虫、毒虫」と絶叫すると、顔色のない生虫が動いてくる。続いて木内が
 やってきた。

「おい、生虫、徳田が重傷だ。兵隊三名と戸板を準備してくれ。それから木内に
 療養所まで運転を頼む。早くに依頼して、私の足は徳田の部屋に近づいた。
 徳田はまだ意識を失ってはいなかったが、悟りきった聖者の面持であった。
 ほとんど担架隊として七名の兵隊が来てくれた。彼等一人々が緊張がきりと
 結ばれた唇の二線に表明されていた。
 「やあ、みんな御苦労。生虫、早速だが誰か三名を指揮して徳田を車へ乗せてくれ。
 井上兵長は徳田を入院させる旨を徳少尉に伝え、残余の人員で以て炊事場前の小

泉を運び、木内が準備している俺の部屋の下下の事務室へ寝かしつけて、俺は療養
 所で時間をとる。少し知らないが、体をきいに拭いて毛布を掛け、赤い花を
 飾ってやってくれ。……まで、指示をしたとき、ノースアメリカが三機通過して
 行った。車庫前で空を仰ぐと、馬鹿に突え寝ており、一丁の雲々を止め
 いなかった。
 腹立たしい、空襲の日である。

担架で運ばれて来た徳田が、そのままの姿勢でトラックに積み込まれた。
 その時、今度はシライの方角(北)から爆音が車響いてきた。ノースアメリカ
 だと直感して、「全員待避」の巻を私が放った。……へ
 「忙しいのう」と徳少尉の姿が見えた。

「ええ、もう精神攪乱です」と苦笑しながら相槌を打つと、

「患者はそのまま置け、壕へ入れんちがまんか」と徳少尉の心配そう
 である。「残念です、か徳田はもう駄目です。今夜は越せない状態です。
 動かすと痛いの、このまま置きましょう。自分もここに残ります。もう
 死ぬ方が簡単でいいように思い出しました。私は正直に白状した。
 「どうか、ほたる俺もここに残ろうか」と言い、徳少尉の顔をぼん
 残った。その様な思いやりがすぐ嬉しく思いながら、徳田の顔を見つめて
 いると上空でノースアメリカの機銃掃射が始まった。目標は空を巻らしく
 機首はこすりに向いて来な

「ようし、みんな出てまい、もう安全だ。私の銅羅声で一同壕から出て来た。木岡今のうちに出かけよう。」
車が出るも動揺のため車上の患者が気にかかる。十分ばかり後に療養所へ到着。早速手術にとりかかった。大腿切斷である。
蒸せかえる暑さの手術室で見学してゐた兵隊もさすがに見かねたらしく室外に逃水。表情を暗くして廊下にもうすぐまうてしまった。
徳田は全く無表情で手術は完了した。リンゲル食塩水二五〇cc、そして輸血も終つた。病室に移された徳田は言葉もなくひそひそと蒼白に見えた。握つてみる二肘時のブルス（脈搏）は、か細く杜絶えようであつた。付き添ひに木内に頼みこまうと注意を今えたので、私は兵舎へ足を向けた。道中、白装束のいゝ人を思い胸が疼くのであつた。
通りつた事務室はすでに死室にしろえら小ており、ほの暗い部屋に灯を小たあかりに小泉の顔が、静かに見えた。
小泉の傍に坐つてゐる私のところへ徳田の計報が伝えられた。今夜中に息を引きとり、そして鬼籍の人となることは予想してゐた。そしてその時、決して報告を受けずと心の中は、穏かではなかつた。
徳田少尉も仲立ちに徳田の入役をキャンセル（取消）して貰つた。夜もかな

更けてから屍体受領を行なつて今日一日の行事が終わったのである。
悲しくも小泉同様、徳田少尉の霊は名も知れぬ異国の土の紅に包まれ、永劫の眠りについてしまった。臆くも死んでゐた三人の靈に徒白うがいを重ねたとき、柳子樹の上で一しきり騒いでいたとかけがえのない声。
を替めた。といふ泉の枕辺にさしてあつたササ。びうかきさしく三つ、白いシルの床へ、閉き着するのを目撃したのである。
階上の居間に戻ると、部屋の中には木内が上りてくた。柳子油の灯火が明るく黄金の光を放つてゐた。室外にまだ暗黒のピサヤ海が跳望され、静穏な夜の光をときである。

六 善悪

食事は抜くと木内に断つてゐたので二階の窓に倚つてそのまま外を眺めていた。昼間の喧騒と比べて、何と静かなことである。
十南園の夜は、堂の光からはじまる。柳子の梢に明滅する螢の群れを見ていると、風流な土民の奏でるギターが流れてくる。そのクンパルシエの哀調が風に重なり、郷愁をささる。故郷の友人たち、志崎鍾太郎、義清など、この調へを聞いたことだつた。彼等もささく、異郷の果てに郷愁を感じ

「は、この目も中隊の同僚を殺してしまつたのだ。徳田は宿命として詮なきこととして、小泉の場合には宿命として処理できぬしこりを思ふうりである。勿論、真性赤痢ではなかつた、病理試験によつて私が確認し、恒川軍医も認め、小泉は入院を極度に不逞し拒んだ。しかしギンバラオンの指示へ私の意志が介入しなくてはならぬ。療養所へ送り込んでいけば現時上までの小泉の生命は保たれてゐた筈である。軍医にアンチ（抵抗）し、最大限の努力を果してしまつたらさしたのか、この事態なのだ。私の心中には何か據り失つた苦惱が打ちまわつてゐた。付近のシベリアン（住民）たちは寝静まつたらしい。家々の灯は消えたやうだった。暗闇の中でひた押しに迫つてくる孤独に包まれ私は泣き喚きたい衝動にかられた。

「木内、上へ上かつて来なさい。呼吸掛けには何の反応もなかつた。云々、か世界に自分一人がとり残されてゐるやうに思へる。その昔、グレンマールの荒涼たる沼沢地の枯草の影に身を伏せて半人半鬼の怪物がそこを待ちかまえてゐる。ベオウルフの物語りを想ひ起こしたりしてみな。

「木内、いなか、いなか、一度呼ばると、はい、あります」と階下から返事がかつてくる。用心深い彼は暗い階段を一つ二つと数えながら上かつてくる。

しい。暗くて、さういふのは見極め難い。が、やがて「木内参りました。飯は喰つたか。はい、いただきました。何だか無味乾燥な言葉、文流である。」

「おい、木内、どうしたんだ。いかに角張るじやないか。今夜に限つて彼が殊更に私を敬遠しようものなら、私は取り付く島もないのである。木内は、そのあたりが空しきついでに、さうした。そして、今夜は林のいなち。昨夜は此所で安木郎を歌ったかに」と話題を変へる。端緒をさう考へてゐる。

「木内、林のいなち。俺も滅入りやうだ」と告げた。今まで悩んで来た、小泉に肉連して私とつた処置を木内に説明し、事のは非論にまで及んだ。しかし木内が私を非難攻撃する筈はない。だがギンバラオンへ帰小泉隊長から相談の差があるかは決定的で覚悟は決めておくべきである。

「木内、さうおそくなつた。休もう。明日は土葬と火葬だ。私は木内も火葬をす。小泉と油を使つて、七八時間を要する。死者の腕を切斷して、その火葬に付し、体は土葬にする方法を考へたりしたか。大張りなお割り切れないのか。胸中を去来して仲々眠れなうにない。

木内も眠れないやうで時々脚を曲げたり伸ばしたりしてゐる。寝つきが悪い時に、急に大声を發して、「わし、今日死ななんだ。は、班長のおかげやで」と前置

きして、昼間の出来事も次の様に話すのであった。

昼食を済ませた本内は、食器を洗滌する目的で炊事場へ向かった。平生中隊の粗末な食事も喜ばない、班長（私）の食器をとりまき美しく磨いてやろうと考え、炊事場へ磨き石を貰いに行つたりし、すると奥の方に誰か上級者がいる。裸で敬礼すると失礼に当たると思い、シャツ（襦袢）を脱ぎ、長きシャツを取りかかえて来た早速取り換えてこなくてはと、急いで事務室（北側）の方へ駆け出した。その時例のコンソリーテッドB二八が爆走を始め、後へすぐ超低空のノースアメリカがやって来た。本内は周章狼狽してそのまま進行方向（北）へ真っすぐに逃走したのである。

しかし、もしある場合、看ようとした襦袢が本内自らの物であれば彼は水を身に着け、要領よく上級者に敬礼の礼を行ない、炊事場のかまどの下から木灰を掻き出し、流し場へ持ち込み、まず班長の食器からと、食器磨きには余念のないという場面の中で、投下爆弾を至近距離に受け、まもなくは居室に安置されてはすたろうというのである。

人間の運命はソノ一刻々々が常に奇なり、不幸の岐路にまたされていくようなもので、小泉の様に突如として死に至る場合だってあるのだ。

本内の命拾ひの長い説明を聞き、そのことを祝福していると、「ニアオ」と猫の声。たしか二階の窓際で聞いたと思つた。最初の最後ただの一声であつた、いんなに夜更けてしまひ、通夜の晩だけに猫の音は妙に心に引つかつてくる。

と、本内が突然、班長、應除けをしとった人かいなと訊くのである。應除けは死者の霊が、應物に託されるのを防衛する方法である。家の門口や神棚へ神符や守り札を掲げておいたり、即ち夜の終葉と、獅子の頭を門口に刺す風習などあるが、本内の應除けはより具體的である。

人間の屍体にはかならず何か鋭利な刃物を接觸させて添えておかねばならぬ、狸狐嵐猫などいふたぐい、つまり英語でいうビッチ（子猫）なる小動物だ。うゝが現われ、死者の膚に直接接觸するといわゆる魔が刺すといつて、死者の霊魂にかかわるさまじまな奇怪な現象が出現するといふ。私は人生体験も浅く、理論としては知っていたが、具體的に聞かされたことがなかつたが、いかにプリミティブ（原始的）で、非科学的であつても、いまは鬼籍の人、小泉や徳田の御里でも、一般的に社会通念として受け入れておられ、また彼等が、自分自身の死を、その水に（？）魔除けの手段を、何の機会にふつと願つていたとしたら、このことを、一矢に

休すことは出来ない。
 事は良心的に処理するに如くはない。私は、小刀と木内の劍身を手にし
 階下に下りようとした。不吉な予感が数回うつった。真つ暗い階段を
 一つ一つ踏みながら屍室へ近づいていく。
 ああ、よかった。屍室には白布に覆われた三人、二体の外には何者か忍び込んで
 はいなかった。椰子油は残り少なくなっていたが、白塗りの天井には
 灯火自体の影が大きく写し出さ小っていた。もう、寝息が減りて来ない、その
 室内は何の不自然もなく静寂さを保ち続け、いつのだった。彼等にとっ
 て何の意味もしてない明日をじっと待つて、いつのたろうか。
 徳田には硬直が、小泉には寛解がきていた。私はこの夜、椰子林に向かい、
 二人のために、李太白の「子夜呉歌」を朗吟した。
 「長安一帯の月、萬戸衣を拂つ声。秋風吹き尽さず、総べて是
 玉關の情。何の日は胡虜を平げて、良人は遠征を罷めぬ。」
 一夜が明けると、ロッキード（Lockheed）が、良人は遠征を罷めぬ。
 この様な空襲下では七八時間を要する正式な火葬は到底出来ない。
 か、日本の家族にしてみれば、せめて一個の月片であるうとし、正真正銘の
 当人、そのを腐けてやりたい。そのためには死者の体の一部を切断し、それを
 メーシオン（茶毘）に付すし、術がない。

小泉、徳田の右上膊の切断には、椰子鋸を使用した。はい、めつて試みであったが、
 切断は容易だった。木内は私の些番兵としてよく助手を勤めてくれた。
 切断の際、彼は「前膊部を抑え固定する役を」任せてもらったが、私
 淡々と作業するのと反対に「手元が震え顔面は蒼白であった。後で想
 うに木内と、初体験申し訳ない」と思う。
 両名の本体は徳田少尉に依頼し、土葬にしてもらった。その頭は祖国日本
 の方角に向ける小たこである。
 一方、私と木内は「市郊外」墓。地近くへガソリンを運び、ほろか祖国の方角
 へ合掌し、茶毘に付した。
 その日の午後、ギンバラオンへ引き揚げていった。覚悟はしていたものの、中隊長
 から必要以上の叱責を受けねばならなかった。彼の言に「反論できる事
 柄は多くあったが、この場合、権利や義務の相関性や、正當性を文句
 したところで何になろう。少なくとも、小泉と木内だけは、私に正當性
 を認めてくれるであろう。私は、それだけでいいのだ。
 服従とか犠牲とか抽象的な、概念によって固めら小ている。見せかけの
 階級社会。その内部は事ある毎にその真相が露か小ていく筈である。
 衛生部員として多くの経験をし、いろいろな事例を体験して来たが、患者
 が「死す小は、それより、万一死し、転帰に至小は、その責めは、必然的に、

すへて戻ってくる。お前が殺した人だとばかりの責めをアゲうべきとされる。また診断し治療し救済しる者には手ねらいがなかった。そして、たとえ入動機やプロセス（過程）が善であったとしても結果が凶悪な形で出ればその行為一切は悪と見なされる。彼等のする道徳的判斷は常に結果説だった。美しい月光を求めてアボラ高原に立っている私、其月後へ広大な草原を吹き渡る無情の風が冷たく襲ってくるのだった。

七―乱れる心

二十一年一月二十六日（アボラ）まで進展していった中隊の主力は残虐なノース・アメリカの機銃掃射を逃れてひとまずギンバラオンへまで引き返していった。かなり遅い時刻で冷ややかな美しさを見せて上弦の月が輝いていた。疲労困憊の限度に達している私達はここで露営を結ぶのである。中隊毎に適當な場所を求めて一際、騒々しさがおさまると後は水を打ったような静けさである。軽度の胸膜炎の後遺症と萎縮腎の持病のある木内は、智齒難生症に悩まされている安井軍曹と共に残留者としてこのギンバラオンに留

まっていたが、わざわざ私の元にきて何かと世話をやいてくれるのであった。サカサガから襲ってくる蚊の大群のため美しく豊熟した月を観る余裕すら無く毛布のへりを内側へ巻き込んで懐の子の様に丸まって寝るのである。当番と一下士官である木内寛一と私とが人間関係がこれから先々どの様な経過をたどっていくとたろうかと思つて、自然な平和と毛布を求る私の心は祈りに似た願ひとなって漸次夢の中へ連なっていくのだった。翌一月三十七日、またもアボラまで行軍し更にサンファンまで歩を伸ばした。付近の高原一帯はいすれので飛行場をへたり、時折より通過していく艦載機グラマンが小さな機影をひらめかせて見入るほか銃爆連発はなかつた。夜の夜、私達はサンファンの上質屋に一泊したが、中隊としては緊急な道路偵察の任務をもちており、しばしの仮眠に一夜を明けせば、またも任務の続行なのだ。まずエスメラルダ・オノを経由してコンセプション、更にグラナダ・アッセシグ付近を偵察し、いよいよバコロドに至るコースであった。この経路を遂に辿ればバコロドから現在地からエスメラルダへ出るまではサンファンの原始林が従軍して深い草原を踏破しなければならなかった。



雲に
題す

郊外に素

詩人よ雲に詩索を感じたか

雪は黙して動かないが
焦げつくような陽光に

生きた自然を雄大さよ。

山獄
が
二二
が
大洋
が

狂気のやうにのたうちまわっている

座は黙して動かないか――

ま近く南西方向に「通稱セントラル」The Baced Central Sugar-
Mills, Co., Ltd. (バコッド中央製糖株式会社)の高く巨大な煙突が見える。
「おい、セントラルが見えるぞ」「どこぞぞ」「あそこだ」などと、此の間まで住み

気だな。と笑かけると、「ほいたら来いや」と完全に賞えた土佐弁である。例
 の髭っ面をなでながらにやつている。
 招き入れられた、このコーナーで私れすつかり酔ってしまった。この頃、瘦身の
 坂本太一郎が安木郎の踊りを始めた。すると香川が向う鉢巻をふいて座
 の中へ乗り出して来た。しかめっ面の香川とまじめくさった坂本の格好が
 いかにも対照的で愉快な図である。二人の踊り手は互に相手のしぐさを
 のぞき、いんていすに合あせ、踊ってはまた相手を見る。しかし結構さ
 共である。舞臺さときさのつまさか混然一座の雰囲気は溶けて一層
 全体の興奮を高ぶらせていくのだった。また、やがて座の一人が「踊く阿呆に見る
 阿呆、同じ阿呆なら踊らなや損々」と雑したたのてたまらない。たまたま、
 満場、唄と踊り、歓喜の地堀と化してくるのだった。
 後一月三十日は休養日、全員に外出の許可があった。後兵長は合点ゆくと
 彼は寝転んでいた。曲げた左足へ更に右足を掛けて、何かの本を読んでいた。
 このポーズは彼がよくする姿態でもあった。
 「栄やん外せんか」、こちうしきほど期待してない、一種のいやからせのつもり
 だ。「暑いかうや」と云ふほとんどの外れせず、つれ休養日パーセント。
 の最古参の兵長、船大工の栄やん、と後兵長は愛すべき人良しなのだ。
 何か買つて来ようか。「うん、生菓子か酢づけか食いたいわい」

「クロエスなあんたのそんなんに欲しいか。
 「あれを三倍飲めやつてん、奥歯の奥でギリギリ鳴つてよ、軟いとしい
 えん、あう味よう、忘小人わ。
 また始まった。此律賓共和国にセキ教する島があるそうだが、生子の話は聞い
 たことなした。あつた、好物のシューマイ（焼売、シュミ）で我慢しろよ。
 私は後、物もよく知っている、彼のシューマイに泣き、シューマイに喜んだある時、機を
 乗り切つてきた過去を述べているからである。
 相変らずギラギラ輝やく太陽、浴けそうなたアスファルトを、踏んで私はバコバ
 ドの中心街に出た。まず、後ためにシューマイを注文し、ロサリオ街を右に曲が
 った所で連隊本部の高級軍医に出会う。
 「どうだ、状況は？」、ええ、今うとうとすきになっています。
 清潔な髭をたくわえ一見小柄で、気品のある高田軍医との出会いがこれで
 ある。
 「軍医殿入りましようか。遊ぶのはセブがベターですがバコバドにもし二三いい
 所はありますよ。私達は、セブのに入った、ここには日本軍の将校や
 気の利いた下士官たちがやってくるとかで、感いいという話で、現地の
 シビリアン、マラジ氏に連れ込まれたことが最初であった。
 閑静さへ、家庭的な雰囲気がよくマッチしている感いい店なのだ。

四十才に達り足りずの豊満な体胆のマダムが近寄つて来た。ティアル上の
 Xミニューで肩を揺りながら、ウイスキーと生菓子の注文をする、冷水をカウ
 シンダーへ通し、新車の客高田氏に目礼し、彼も私に紹介させるのだった。
 "This is a Surgeon Major, Frank, the Assistant Surgeon Major."
 彼は軍医の高田さんで、私の直属上官です、と紹介すると、「此処は頼朝参み
 かね」と私の顔を見ながらライターの火を点け煙草を深く吸う高田軍医。
 ええ、五、六回来ましたかね、私の名を知っている。うは、大行食堂の表にませた
 マリコという小娘がいる人ですが、冷水が教えた人でしよう。時折、衛生巡視に
 来たり、原住民たちにもたまには授業したりして善行を積んでいますので私の
 ドクトルトーマツの名も少しは知られていますよ。
 「ほう、そんな小娘かなあ、白石や中西もハモトダイドクトル、シミスダイド
 クトルなんですよ。しかし私はトウキョウインペリアルユニヴァーシティー東京帝大
 の出身になつてゐるんですよ。」
 「今の女性はこのマダムかね、」と云うです、とモエネルギツシで活動的
 マダムバタフライなんてからかひますよ。何でも十六才で結婚し、三才後に夫
 と死別、この方二十数年を独りで通してゐるようですよ。いつか私が云つてやりまし
 た。人間の細胞は七年で左に替つて、右に替つて、右に替つて、左に替つて、
 はねだ、だから今後はミスを省けて呼んでやろうなどと云つて笑ふん
 ですよ。アムルト（成人になつてゐる娘が一人いてスペイン系のハーフブリード）（混血）

してゐるのです。さうだ、理智的な感じだね。ええ、室外雄飛家です。
 「君はスペイン語もやるかね。」
 「間精神論を文へました。」
 「いや、駄目だ。医者仲間には語学は弱いな。」
 「そう、時々、マダムが現わした、軽快な服装だ。」
 「抜けた全身の線がすっきりしてゐる。」
 私達は一つテーブルを囲んで話し合つた。軍医も三暢とは三入ぬまのし
 何とか英語のカンバセーション(会話)は、なせるやうで安心して聞ける。
 昨夜、某将校の下士官、担任事件があつて、恐ろしかったというマダムの話
 から、我々もおしやべりは愛情論に移行してしまつた。この席での人生の
 絶対価値は、誠にさうであり、愛であつた。
 「私は愛情と云ふとスケイルが狭いと思ひますね。日本の軍隊かつて基本的必要
 請ふものは誠に誠意の問題です。上級者は人間として部下を愛はぐくむ
 責めをもつてゐるが苦です。あなたも昨夜路上で見かけたという事件も一つの
 愛情の発露なんですよ。こわい愛情です。さうです。こ小は、単なる
 愛がなく、こわは、骨肉の至情を申しましよう。こ小は、誤つて小乗的、婦
 女子の感情の中に溺れてあつてゐる愛情とは分離して考へたいと思つた。

またの面会を約し、その時まで力無事を乞ひに希し、なから敬礼を
三換し、彼は北へ、私は南へと別れてしまった。
手頃な土着にも生菓子と求め、憲兵分隊の前を抜けて右に折れ、マラス家の

事務室のメンブーと、土呉訶にみせられた夕陽が、西に沈し、吐息する地
に、サヤ海を渡つて忍び寄る、京風が何のたゆみもなく、部屋の中に入つてくると、そ
うして水上の大きな空には、その時の様々な星震がまたたく、その星は美しい、南国の
夕陽のひととき、夕陽ノチエ（夜のて女）は、妙なる香も放つてである。

支那半島當時の想い出をまじり込んでいたが、知れない。後には突如としてね起きた美しい樓閣に上つてゐるはずの戦友たちはどこにいた。湯気の中で蒸き上つてた

香り高い肉饅頭は恰も皇の大群の後方緑葉の如くに消え失せていた。
彼の意識の有無の境界線上で「ああ、ああ、焼売を喰ってみたい」という言
葉が吐かれた。この後の一言は本内による確証で私は信ぜられただけである。
この一言の内容は本内と私以外に誰にも知らず人はいない。

その夜、後方介抱にあたり、本内は私の指示によって、支那料理屋の食堂を
覗きまわったのである。世智に長けた本内は、試食を行ない、味のよい店と
して太鼓判を押したのである。それがマルケット前にあるマラダ氏経営の
食堂で、元々小だった焼売なのである。

翌日から毎日、私が本内がこの食堂に現れ、小なることになつてゐる。私
が「可愛い女主人」と評すやになり、夫のマラダ氏と一言葉を交わし、遂には
親交関係も結ぶに至るとして、何ら不自然さはない。

マラダ氏はマニラの大学で経済学を専攻したらしい。彼の口癖は「マニラと飾
らない物事ならさかさまでもあつた」。

上級政策による軍人と住民との感情の異和感や気配が私達の間にけささうなく
最初は英会館の叩き台にせよ、小づきという欲徳の下心を考へてゐる自分
に恥じる位は、全く打ち寛げる。いわゆるアットホームな人間関係に入つてしま
つたのだ。こうした日々が経過の中で、後の食慾は旺盛になつて、いったん私
の佐長に全付される月俸は四十七円であつた。これに於て、後の一日の食料費は一日に

三十円を要したのである。ハ統煙草を、他、宣給品を市内で売り払つて
餘金に充てしめてみたが、この経費の捻出にはほとほと困却した。私は十九日

五月十日朝、御里より送りに出てくれた母が、朝食の駅頭でくれた時計
を売りに出すことにした。激しい戦闘のさ中、風雨にさらされ、その精巧度
も失つたとしても、母の形見が、私に足になる。昔の物であつた。

眉間に決意を寄せてマルケット通りから、デイルズ時計店へ入つて、
予想以上の金額を受領して、日照りか、激しい舗道ではあつたが、私はは
快かつた。後には何とか工面すると言つておいたが、本内は感付いて

いるようだった。

数日後、例によつてマラダ氏の店にゆくと、マラダ氏が、左眼でウインク
して、印をくれた。私も同じ所を、左眼をして挨拶した。カウニターの上に英
字新聞が載つてゐた。その小を手にして見出しだけ、それと、思つて

眼を通して、マダムが、ナンオラスと問う。今何時ですか
と、二つこのピサヤ、話なのである。店内の壁の時計は動いてゐるが、
憤というものは恐ろしい。左腕を曲げて、私は突確に自分の時計を
見ようとしたのだ。それ、それは時計箇のワツカーの中に入つてゐるのだ
つた。あ、ツエニイパストナインと云つて、かなり、演出をやつたものの

私のあの演技は通用するはずしなかつた。ジエールの主人はマラタ氏の親友だったのだ。マラタ氏は私を近くには引き寄せ、遠くには手品でしするかの仕草で一つの時計を見せようとした。そしてその小は擬いもなく私の物であった。夫人の説明によると時計商の主人とマラタ氏に互いに親しい友人同志であり異邦人の私の言動に注意を払っていたらしい。店をたんで家庭へ帰った後、時として私の話題を語らうたりすることかあった様だ。その私がどうしたのか、時計を手放したり、毎日ジューマイを買いに来ることやうで更に話題を生み、マラタ夫人の弟コンセプシオンを暗躍させて事の事態も調査せしめたのである。彼等が知りたい実情は解明され、私の行為が彼等側からは善行として讃えられ、このことになった様だ。

支極時計は代償を支払わずに私の手元に戻り、チャオマイは後が治癒するまで提供してくる、と約束した。

十九年十一月三日はマラタ家の弟ヘト中主氏の三十四回目の誕生日であった。すでに招待状を受けていた私は徳々少尉が了解を得て軍服姿のまま彼の家を訪ねていった思い出を持ってゐる。

ハ 戦友たち

明けて一月三十一日 報告書を作成完了後、シライの連隊本部へ向かい、予定を立てていたが、十三時少し過ぎたシライへの連絡車は見当たらない。空襲下のこととして真昼間、国道を車輛で通過するのはこゝろ上ない。果敢なのだ。ノースアメリカの低空飛行による機銃射撃が終日続き、結局一日も停に振ってしまった。

この日、バゴド空港は激震され、あの橋梁が破壊され、川岸に繋ぎが切れたカラバオ(水牛)が射殺されたという情報を目にした。

要請によつて十時からその現場へ赴き、修復作業に力を注いだ。最近内外の状況も思わしくなく、皆胸の中が鬱々としてゐるようだ。谷中伍長はじめ数名の下士官が中隊長に激しく喝を入られたというものは、この夜のことである。

また明けるやぬ二月一日二時、中隊は車輛を連ねてコンセプシオン地帯へ移動した。二本柳子太郎山陣地へ通じる道路拡張が中隊の任務だった。連合軍上陸に備えての後退道路でありある。

分隊単位で付近の民家に兵を定め、指揮班は柳子の森影のニッパ、ハウスに位置した。しずるん、小は仮りの宿であり、道路補修の進むに

つれて行きつく先で露営するのだった。この作業は丸四日間続いて次
 の作業地 エスメラルダオへ移つていった。
 兵舎の設備は、何とか夜露営スコールをしのげる小屋をやらねば
 ならない。類に激化の一途を辿っている空襲に備えて、修繕には
 注意を払い、大きいマングローブ樹を利用したりして、幾つかの草薺のバライ
 を作るのである。

近辺に住む現地民たちは、殆んど使役として狩り出す小実に怪然たる
 光景が展開されたわけである。

宮本島雄軍曹と私は、何とオ・ダベンテラオという現住民に指図して
 青竹を伐り倒しては、それを割らせたりした。彼は随分怪しな話を
 平気な顔をしてやっていた。か仕事もその能力は上々であった。
 竹割り作業に至っては、文字通り、破竹の勢いで行なわれ、我達に驚きの
 眼を瞪らせるのだった。また彼は、*Enlagic Takangue* とすくさく
 達等で署名をし、私に号した。その文字を見た我達は、これに驚かされ
 てしまった。宮本軍曹が彼に對して付けていた、補助兵衛のニッケンイム
 は取り消されることになった。
 一週間ほどの作業の結果、粗末ながらも各分隊の小屋は仕上った。当分
 これらのバライに棲みつくことになるのである。

エスメラルダの主要なる任務は、ここを東西に流れるインバン河への架橋に
 業である。かつて砂糖きびの輸送のため、ロコモーション用軌条（レール）の
 取り外しと車輛通行に供するため、補強をしなければならぬ。この事
 業では小西軍曹の活躍が、象目の一致するところとして認められた。

太郎山と指呼の間にあるこの高原地帯からは、シライ、シリサイあたりから
 バコロドへの西海岸の緑が美しく眺望され、特に朝多の夕小は格別であつ
 た。高原の一角に、山を頂う名残りを止めて、砂糖きびの植えこまれている
 地域が見られた。激しい、盛夏の太陽の恵みを受けて、繁茂していく茶葉は
 小の下で、湿ましく、即ち小だった茶葉が、ぐいぐいと伸び、その中を満ちた甘い
 糖液は、しだいに濃縮され、基部に集結してゆくのだ。そこには最高の濃
 度の糖が溜まっているのだ。

この地ネグロスには、殆んど四季の別がなく、兵士たちは連日の炎暑を耐えら
 れ、多くの苦勞を要した。この作業は、暑さと進行していった。山口兵長が
 腸捻転をおこした外には、内科外科、何れも新患が出ず、私にとっては、焼
 いことであつた。
 け小れも全体的に日本軍の戦況は振るあらず、バライでキン島の王
 崎かどこからともなく伝えられていた。上空には、よく友軍機の影さえ

見えす 和達 の士氣も揚がぬまま次第に無氣力の方角に沈んでいく日々が続いていくように思われた。
 敵空軍の攻車に對しては、我々は常に受身身で敗北的であり、山口部隊からの情報も耳にしては、切當振腕しなから、敗戦の憂き目を意識し続けねばならなかった。

二月十一日の紀元節を機に日本空軍は一大攻勢に出るかと噂されていた。しかし二月に入り上旬も過ぎ、中旬に入ってもなお、何の變化も起りなうになつた。軍の首脳部は何を考へてゐるのたろうか。

日に日に敵機は数も頼人でも来襲し、爆弾回数も度を増してくるやうだ。中隊長さえ友軍の状況について何と語らず、中隊の兵士に對しても所信の投歴もない。中隊の士氣は漸次失せていくかの標に思われ、水てなり

二月十五日、ホサリオアッセンダ (San Antonio 牧場農園の意) を疾駆する車上の人となる。連絡の任務を帯びてのバコロドならびにシライ方面へ出張である。車上の二時間ほど人と移りゆく風景に捉われる程であった。夕焼けするカニラオンやシライの連岑は雄大で微々たる存在である。私心も鬼くに十分な壯嚴さを秘めてゐる。

刻々と移っていく雲の色合いに車の動搖さえ感じないほどだった。冥に半月振りのバコロド入りである。

残留していた徳兵少尉、井上之男兵長、生田上等兵、そして土砂の回収に來ていた谷中や富田伍長、しがあつて軍の情報を交換し合つては、海軍の無力さをも嘆いた。この夜のことだった。

翌三月十六日は水野隊の軍医を訪問。薬物に關する指導を受け、夜間本部隊付井上曹長と葉田や診断について事項を交渉を持った。午後シライへ赴く途上で、銀爆連の洗礼を受け、辛うじて町へ入ったのは、すでに陽は

沈み、夜は三三又自動車隊の衛生士、佐佐木兵に勝俊伍長に一時もたひ、互に思いを交換した。驚かした、初年兵時代の訓練、制裁を厳しかった高知達、軍病院の内務班、野病(日射病)患者を出した、高知城への担架、看護等、語り合つてゐる。今、離れ小離れになつてゐる同年兵への懐かしさが連なつてゐた。七中隊出身だったか、田井勇美を、千松公園での思い出、よみかえってくる。田中稲城は何處に居るのたろう。横山、山本朗、横山正美、兵田橋田三茂、北村、土本、山本忠志、土本、松浦、植木、等々、初年兵、時の同僚の姿が次々に思い出されてくる。一夜であつた。

ヤ、わ、や、かな朝を迎え、と、海、と、私は、互いの武運を祈りながら、
の敬礼をした。恐らく、両会に出発なのである。軍靴の踵が、ちと
同時に合わされたので、印象的であった。
その後、連隊本部の恒川軍医と打ち合わせを行ない、つぎは療養所の
シライ分室へ足を運んだ。

ここには、昨年（一九三〇年）十二月六日、バコド空襲の際、作業中、爆弾破片に
よる大腿骨折を受傷した青野一等兵と、その付き添い、我松信正一等
兵がいた。煙草に不自由しているという調子に、心をなやましていた。百本入
りシライ煙草一箱と、菓子一袋をくれた。これに、お出まの彼等へ
の精一杯の気持ちの表現であった。

青野は、かなり調子をとり戻していた。紅潮した顔に、喜びを見せ、
え、え、と、右大腿骨折の結合が、うまくつながらぬま、固定した骨をせ
いたので、脚全体が、変形しており、不調でならなかった。彼等の中隊
の近況と話をしていると、シライ分室の鐘が、乱打される。

「班長殿、空襲です。」という我松の言が、乾ぬうちに、三機のロッキードが
編隊を組んだまま、南の方へ通過していった。すぐ後で、機関銃掃射の言
だけ、聞かえて来たが、目標は、どうやら、タリサイ付近らしい。
療養所を出て、舗道を、跳び、最近、減多に聞かぬ、友軍機の爆
音、耳に入る。上空を、仰ぐと、司機機、た翼の、目か、丸が、眼に、くみ、る、ように

赤い、無事に帰還して、水、小、ばい、か、と思、い、か、る、ほど、か、細、い、海、で、西、方、に
移、っ、て、い、っ、た。

バコドの宿舎に、いると、連隊本部から、恒川軍医と、堀内伍長が訪ねて
来た。小、た、薬物、消耗品、配布、も、受、け、た。余、り、に、少、量、で、不、満、は、あ
った。か、一、心、有、難、く、い、た、だ、く、と、に、し、た。

間、もなく、指示、通り、に、又、つ、て、来た、車、に、便、乗、し、車、中、で、明、る、バコドの
空、気、も、胸、一杯、に、呼吸、した。また、暫、く、留、ま、ら、ね、ば、な、ら、ない、エスメ
ルダ、の、生、活、を、思、う、と、苦、に、な、つ、て、仕、方、か、な、い。

つい、数、日、前、数、人、の、患者、が、残、留、し、て、いた、ギン、バラ、オン、から、コンセ、フ、シ
ン、に、移動、し、て、は、ず、だ、つ、た、か、で、途、中、下、車、す、る、気、に、な、つ、た。

コンセ、フ、シ、ン、の、柳、子、林、に、入、る、と、一、頭、連、絡、車、勤務、に、あ、た、つ、て、いた、上、野、分
隊、が、入、つ、て、いた、仮、小、屋、に、安、井、軍、曹、以下、七、名、の、兵、士、が、集、つ、て、いた、か。

安、井、軍、曹、は、今、ま、で、か、な、り、怪、ま、さ、れ、て、いた、齒、（智、齒、難、生、症）が、す、つ、つ、り
よく、な、つ、た、か、で、エ、ス、メ、ル、ダ、の、本、隊、を、追、及、し、た、と、い、う、こ、と、で、あ、つ、た。

倉、橋、木、内、小、原、等、も、秋、山、と、私、た、け、で、この、夜、を、明、か、す、こ、と、に、な、つ、た。

適、当、な、良、薬、は、な、い、か、さ、し、あ、た、つ、て、この、病、人、た、ち、に、薬、物、の、調、合、を、し、た。

い、い、の、宿、舎、は、こ、う、少、数、の、グ、ル、ー、プ、の、集、い、で、あ、る、た、け、に、打、ち、を、け、て、樂
しい、の、で、あ、つ、た。

翌、日、八、時、等、こ、う、か、ら、出、発、し、て、エ、ス、メ、ル、ダ、へ、帰、つ、て、行、つ、た。そ、し、て、三、木

邦人衛兵と共に書類の整理にかかったが、連日の疲れのため気分が優れず途中で止めてしまった。

巡視がてらに訪ねていった各分隊では、最近専ら導に上っている連合軍の上陸の可能性やその時機などについて議論を湧かせていた。又かつて奥深い山間の還地帯で私達はあんなに底の底を探り合ひながら玉砕も決意する方向へと迫り込まれることを知らない。

敵機の鋭爆雷の少ないある日何とはなしに現地人のバライに三す寄つてみると、オールドストルカムインプリーズと招き入れようとする者。いささか狼狽したか聞いたところがある。誰だったかなと推定出来ぬまま

竹(バンブー)で組み合わせた梯子を上って部屋の中を覗いて見ると、例のクバンクエラオが坐っているではないか。彼のパミリア(カミニア族)はこの家だったのだ。妻と三人の子を抱えて日々の生計に忙しかつた。このことである。何の願望も理想もなく、ただ生き伸びることを目的に精力を充ちしなけりなう。彼等も哀れといえは哀れである。

その時ビエリの老爺が上から来た。客人の私に気付け部屋の中に入るのをためらうているようだった。彼リザブ(カイン)が帽子を手にして(遠慮は)いないという姿(入りなさい)の。この国では人生六十年といわれて頭を下げる。クバンクエラオの父らしい。

います。という老爺さん、日本では人生五十五で死にますと、それはドクトルが五十五になる頃ネグロスへ来なさい。そうすれば十歳長く生きられます。と三つうで一同は大笑をするのだった。その笑いに響いて子が顔を突き出した。その水を見て私達はまた大舌で笑った。

その子を老爺さんが「レ」と呼ぶ。クバンクエラオがその子を抱え上げた。クバンクエラオが私に見せるその子の右掌には六本の指がついているのだった。七本になると三つうには小指が更に外側に小指の形を整えしめられた。爪までついた指がもう一本出ている。私はすぐに切除を考へてみた。

切りましてようか。簡単にと私が言おうと、母親らしい人か出て来て「ノーノー、バディ」と拒絶する。死ぬのを嫌いだというのである。

考へてみれば低いベルカ医学環境の中で暮らしている彼等にしてみれば無理はない話なのである。

機念があればまた来ましよう。と言ってクバンクエラオ家を出た。屯所へ帰ると、トツテンカントツテンカンと景気よく槍音が聞えくる。中島上等兵、後兵長たちの作業場、鍛工場である。私を見たり、後、班長、芋喰わんとか、典型的な徳島弁、何だ、サカ、カモテなりと、カモテカホイなど二本世間、うかいと

「私か笑う。すると向う針巻のスタイルよろしく、我理鍛冶」と中島が
 「兵舎の一番奥の右側にある。ベリゴール（Very Good）やせ」と後に結託
 する。この二人は実に名コンビだった。
 後は芋饅頭を頬張りながら、「うん、うまい、うまいわあ」と誇大宣伝
 をする。
 「カモテは二つに頼みかきとつ。植に合わせて私か口を切ると、
 「ようがす。何でしつこくみなと後がおどける。
 「鉄刃刀という奴だ。小さい手術をしたんだ。元えたる腕を見せてみな
 と、予め紙片に書いてあった実物大のカギをいせると、中島はそれ
 を横目でちらと見て、「期限はいつか言ってみな」と訊いてくる。
 「ううだな。あしたの十三時だ。後は流し目で中島の目を覗いていたが
 心臓が戦友中島の喉かきもさうだったであろう。「へえい、ようがす
 冷えた。ま、ま、ま、いとおあきだ」と私に中島の代弁をするのだった。
 此の後の大差に、白川上等兵、森一等兵、金岡、そして静かな
 浦野勝手のまじり笑、鍛冶場はひととき爆笑の渦を巻くのだった。
 しづくたし和手清長と山中軍曹がやってくる。私を入れて
 三人とも土佐出身だ。方言丸出して時局を論じ合った。話論がつく

はずもない。ソレがうす中隊長が通りかかり、明日は太橋か仕上がる
 と思う。今日は午後から休養させてやってくれ」とか話があった。中隊長が
 隊長宿舎へ帰っていったあと、鍛冶場にはまたも飲声の起る中隊長
 想い出になるかもしれないひとときであった。

九 地方色

昼食を済ませて約束の十三時を待ち構えていた私は鍛冶場へ足を運んだ。
 食事を終えたらしい中島と後はすでに仕上がっている鉄刃刀の研磨に
 かかっていた。後がその刀を磨き、横に坐つて、師匠の昔の録よろしく
 煙草をいかせている中島は、ときどきその砥石の上へ水を流している。
 なんといつてしき気候合、気胸の通っている我々三人なのだ。
 どうだ切れるかい。細工は隆々、切れないものは、あなたと私
 縁だけよ。
 平生、中島の兵隊たちから人を聚めてくる二人の駄目やれに、私も相
 手をいれては、後の手先を見ているか流石は鍛冶場の業や人の腕は
 元々、いよ、仕上ったようだった。蝦蟇の油売りの前口上よろしく、後が切れ味を
 試すと、一草の白紙がさらさらと数を増し、あたりに乱れ散るのだった。

「やほり、うまいんだ。思にきくぜ」
「おれも愛せ取ってほくろみながら 指揮班へ引き返そうとすると、後の
声か、私の此方へ話しかける。

「班長、今晩、馳走するぜえ。」
「なんの、馳走だ。」と聞き返すと、今
度は中島が「豚と、寿司」と言う。「よく酢があったな」「なに、トバ
の腐ったやつよ。」こんな会話のやりとりだ。

「トバとは、椰子酒のタカが、誤ったのだ。」
「とにかくよば小に行くよ。」
「か足を止める。」
「あ、な、あ、」
「僕か、お、お、おと手を打った、うまいや。」
「よしよし。」

この頃になって土佐の方言に馴れた後の名調子か、小である。
わがわが 指揮班まで呼びに来ると、彼等が遠慮、敬遠している下士官
たちに見つかるといふ配慮があるかも知れない。

ひとまず 指揮班へとって返し、あらため準備しておいた医療^{つう}を肩
にする、目的は、バンケラオのバライだ。
「バライの階段に腰かけしている。小は、幸運なことだ。」
「エミール、これ、レッツスイミング。」
「エミール、バンケラオには何も言わないで、私は小とあひき出すことに成功し

慶

た、少年にあらぬ程の悪い背中を向けて「デレマイバック」と呼ぶと彼
は他愛もなく誘惑にかかると、
インバンのせせらぎに上かる飛沫へ金切り声を発して遊ぶエミール。

水際に立つてタオルを使っている私の格好を眺めながら泳いでいる少年は
純白な石炭の泡立ちが魅力らしく、私の方へ近づいて来た。

「ネストユー、少年、全身へ石炭を塗りタオルでこする。特に右掌^{てのひら}
は意識して丁寧に洗う。」

岩影に導入された少年は二本指の切除計画を覚ったらしい。そこに
煮沸させている刀やサメ骨を目にしたからだ。

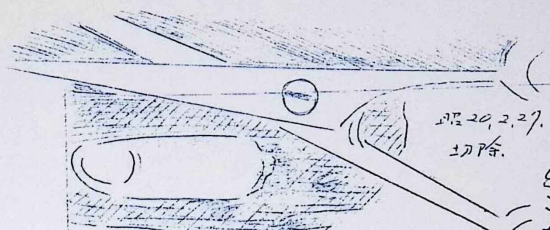
手の甲に青銅のマークは、そのあと赤黒い汗で下段が塗りこれる。そして
拭いたためのアルコールで色が褪せると、その地肌が出てくる。少年は
はかつて経験したことがない不思議な現象である。すかさず、私は刀を握

る。エアレンは本能的なルックアップ。
誘惑する少年の頸部が完全に伸びたとき、私の右手に力かこもり、げ

りつと鋭い音がする。か細い手ごたえをしていまエミールの第六指は完
全に除去されたのである。

「マサキット（痛いか）」「ノーマサキット」「ユーアブレイブボーイ
、うう、言い放ったときすでに持針器は拾われ、ホルマリン消毒は通されてい
た。おれもす早く仕舞つけると

オーケイ、ルックアットニアハンド。
 エミールのちうつと患部を見た時、
 の純白なガゼが被せられ、白い繻帯を巻き終る。少しはソコを見凝
 めていた。「ルック エミール」も、少しは切除された指を見せると、
 足小に付着している魚を見て、「ブラッドノール、インフルノーマサキット」と
 誇らしげに叫ぶのだった。
 盛夏の太陽は、依然としてインバンの河面に、そして斜面の草原に輝き映えている。
 ところが、時刻をとり違えた鶏の鳴き声を作っている。
 二月二十日、インバンのせせらめきやわやかだ。時刻は五時十分だ。
 朝寝坊の自分としては稀な起床であった。エミールのこゝろが気になつて
 いたかも知れない。早朝のエスメラルダ界隈は静けさ、そのものである。
 インバンの瀬音に調和して、カラバオ（水牛）の鳴き声か、ほかかな御愁
 を誘うのである。
 清流に水浴して、褲一つの姿で草原に坐っていると、そろそろ
 夜明けらしい。何処をもしなした出たすのすたきか、聞こえこくる。
 だから、感傷屋の私は、いっとしていられない。
 エスメラルダの朝明けで、マングの梢にさやぐ星
 いっしが消えて、ひんかしくと、独り、みみならず、河岸
 を離れ、少し歩くと、不寝番明け番の中島茂理衛上等兵が



三消していた。
 「お苦勞さん。ああ、ううだ。昨夜は、馳走になった。少し散歩してくるよ。」
 「どちうへー」昨日、すまうとしたオ（手術）をしたんで、診に行ってくる。
 河下のバライだ。もう勤務は終わりだろ？「後七分二十秒です。」
 中島は時計を見ながら、うう言ったが、例の、ついでに、防水被覆のあの時計
 も左腕へ着けて、いるに、ちがいない。起床を掛ければ、任務完了だ。中島の
 の声は、明るかった。
 大和太橋の手前、つまり橋を渡らずに、右へ折れて、大きく曲がると、足先へ
 朝露の、感觸が、快い。いつか、神々の、丸書書店で、読んだ、ブラウニングの
 詩文が、思い出される。動き、せすに、金色に、まっく、雲を見て、いると
 久しく、考えた、ことも、なかった。生への、執着も、ふつと思ったりした。
 タバコ、エラオ家の、その、貧弱な、バライから、もう、一条の、煙が、まっく、上っていた。
 今日、一日、また、始まる、人魚しく、不安な、生活への、祈りにも、似た、煙の、脇にある。
 入口を見ると、誰し、いな、が、開閉窓の、その、下に、坊主頭の、エミールが、笑っている。
 白い、繻帯の、右手を、得意、げに、私に見せて、シゲナ、シゲナと、迎え、こく、れる。
 声、元氣、そう、である。私に、エミール、イス、ス、レ、バー、ボーイと、當、あると
 親、たちは、大変な、喜び、である。私に、エミール、イス、ス、レ、バー、ボーイと、當、あると
 母親は、「ヒイズ、ノ、ニイ、バット、イー、ジー、ツ、グ、ロー（こゝろ）は、いた、すう、で、

あるか育てやすい子です。と云える。その横でタバコを吸うのはにこにこして
いる。ウェアリズグラムパ（おじいさんはいこ）とたずねたがまだ寝ている
ようだった。
午後、バンディージェンジについて指示して兵舎へ引き返した。

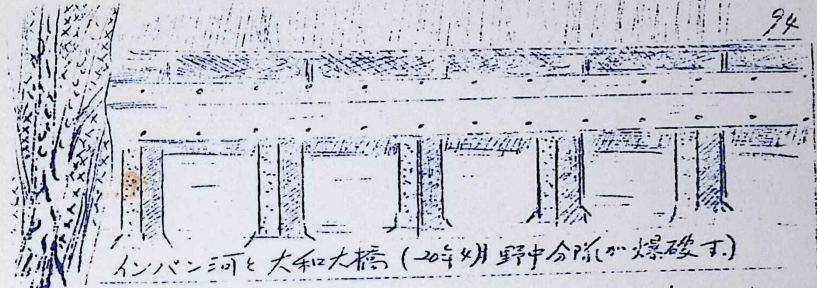
十一 愛するに愛される心

二月は逃がると言われる。私達は此律賓共和国ネグロス島西ネグロス州
の北部インバン河ほとりのエスメラルダオで三月を迎えた。
常夏とはいえ、体の倦怠感があり、発行量は増大する。午後半夜の気温
の降下も著しい。このような非衛生的環境に加えて、道路補修、架橋作業、
等の労働のため、体力に大きな負担が見えはじめていた。戦況不振、敗退の横行
テロ事件、そして打ち続く暴行、極まる空襲、反軍の勢力、このような
情勢の中で、現在、将来共に自分自身を対処すべきこと、決意すべきこと
は夫々個人個人の胸の中、纏められ、小づいてはいるはずである。
三月一日付けを以て、陸軍衛生軍曹に任ぜられた私は申告を兼ねてシライの
本部へ向かった。同じく連絡に來た島本中隊長と連隊本部で一緒にな
り、エスメラルダへ帰つていくことになる。しかしコンセプシオン残留の患者
診療のこともあり、途中で下車をするに決めた。
さわやかなコンセプシオンの椰子林へ踏み入ると、患者の木内が椰子の皮を割

ついているところだった。診断と投薬を済ませ、昼食のあと、エスメラルダへ帰
隊すべく準備をしていると、木内が同道させてほしいと申し出てきた。今隊
長に用件があるんで、軽い運動しかねてエスメラルダまで歩いて行くとい
うのである。

「木内、二点と結ぶ最短距離は直線だろう。可能な限りコースを直
線で行くようにしよう。」という協定を結んで同行することにした。何と一
気兼ねのいうね、木内と私のせりりであった。高原を吹き渡る風が強く

木々の葉裏を返して乳白に見えていた。
煙をよみ、川を渡って平地へ出ると午後二時の陽光は灼熱の炎だ。
幸いにして風が出てくるが、その風も四十六七度位は上っているだろう。
生きとし生けるものも焦がせてしまふかの感がある。喉頭がからからだ。
途中一本松付近で忽然と姿を見せた現地人をヨサツ（敗匪）と決
め込んでしばらく尾行していくと、全然無害下のシベリアンであった。し
かし彼が入った家に招き入れられてコーヒーなど振る舞われたり全く
恥をかいたシーンもあった。
三月七日は大和大桥、小橋の落成祝賀の宴が張られた。橋梁完成の
慰労と士氣昂揚の宴会なのである。中隊長以下全員カモテ（芋）畑
に陣取り、カソリン臭、ウイスキーの宴会だ。全く粗野な野武士の感慨



ともし云おうか、兵隊達はバコロの市街地を離れて数
 十日は経過している。ワインやウイスキーなど久し振りにある。
 車座を組んで飲み交わすウイスキーは、臭くても
 結構楽しめるのだ。酔う程に飲み飲む程に酔い、サナ煙
 は騒然たるもの。時としてグラマンの編隊が上空を通過し
 て、平然として往々返えす連中なのであった。
 中隊長の指示によってサラババコロの、喝あれ、安本節
 よさ、い、か、出、阿波踊りの始まる頃には夜もかなり更け
 てしまっていた。
 星座の混入が一きあ、白を帯びると一人倒れ三人去
 りして、サナ煙の会場にはもう四五人しか残っていないようだ。
 三好貞一、田中萬治、後榮吉の連中と相撲をとったり、都々
 逸ハ本節を歌い、さらには後の阿波踊りに打ち興いながら
 残りの酒を飲み尽くしてしまふと午前一時を少しまわって
 いるのだった。
 萬治帰ろう、私を誘うと、ウー、ウー、と彼は土佐弁で
 応じる。お三人は、鍛工場のスロープ(傾斜)を転がるようにし
 て、下りたが、どうにか本道へ出たようだった。

二人の千鳥足したとたどしく、やっと大和大桥にかかると、
 「萬治、うちへ来い。」酔い痴れた私であった。水面上二十四メートルのこの
 大橋から田中を降ろしたくはない。完全に死への道行になるから。
 細心の注意を傾注して萬治を、そして自分自身を渡さなければならな
 い。全身の血液が血管内で湧きかえり、ドツドツと頭の方へ集結して
 来るようだった。
 小さな橋は渡りきった。が、その安堵感に心の隙が、出来た様である。
 肩を組み合ったまま、右手の煙の中へ、山崩れ落りてしまった。
 (きい)煙へ陥落したとかわかった。かきかきと鳴る葉っぱ、マイス
 「田中、萬治、合隊までいこうとした。しかし彼は動かす。ここなところ
 寝ましやう」と、言ったきり、はうぐうと鼻をかいて眠ってしまった。止む
 なく私も、一夜を過ごす破目になった。
 眠覚めると、もう夜明けだ。天空を横切って白雲が流小、銀河が果け
 る。天空の光の中へ溶け入ってしまった。美しい朝だ。
 田中も、起きて班へ帰し、指揮班へ入る。和手曹長を訪ねた。
 車乗の任官、勝瀬三木、新地誠定を訴えながら進級の件について
 細々と要請した。少しは肩の力が軽くなったようであった。

この日の中隊の行動は徴発であった。
 常夏の緑のネグロスにも戦禍は人なかり拡大されてた。米軍機
 の来襲は益々多くなりシベリアンの前に忽然と現われ出て暴走無残
 な日本軍隊の徴発行動。日本軍隊にとっては止むに止まれぬ行為とは
 云え犠牲になる現地住民にとっては迷惑な極まりである。
 (君鶏をさせ 米のあつたう) 米のあつたう (マイス グラデシ) などと目
 録しい物品を自在に強要すること、良心の呵責に耐えぬことである
 しかし中隊の食糧事情を打開し今後を戦うために体力の調整として
 おく必要もある。
 谷中分隊の収獲は豚頭鶏七羽 米三ガシであった。帰途柳
 子林のバライに棲んでいる土民からトバ(椰子酒)を貰い受けたのは嬉しかった。
 夜は谷中軍曹の班に招かれ、この班の小室に連なつた私であったが、
 留守役として分隊行動に参加しなかつた下上等兵、K上等兵に肉を
 った論争があり、すつかり興が醒めしまったのである。
 初年次兵の懐惚、古年次兵の立場、兵進級にかゝる噂の解明等々
 上部への不満の笑き上げが、雲月に入んな時、んな場所、んな場合に噴
 き上げてしまったのだ。
 怒りと騒音と聞きつけ、馳けて来た上野重太郎伍長と私は丁々戸

をなだめたりしながら、この場での仲裁をしたものの、何か割り切れないものが残つて
 いた。
 低く垂れ込めていた雲が、夕方から露点に達して雨となり、次第に激しさを
 増して来た。私は田中万治の隣で雨みれるバンブー(竹)の床へ横になった。
 灯し油の心が怪しく揺れていた。誰かが水を消した。闇の中で更に固く
 眠を閉じたが、さき程まで喚びつけていた椰子油の灯火が、残像となつて私の
 頭の中でしばらく離れなかつた。
 私は昼間谷中分隊長に植つた三姐を抱つた。私と谷中の関係、そして
 私と三姐と人関係のトライアングル(三角)の一頂上に位置する私
 の立場として三姐に制裁を企てねばならなかつた。徴発行動中、谷中の
 命令に北月き、とさうに、分隊長に反抗した三姐をいさめるためにはある
 こと以外にとる方策がなかつたからである。
 さきほどの分隊内部での論議、理は理、非は非、是は是、否は否、各個人の
 意図や解釈はあろうが、強度な自己保存の発現は、組織の統合に危害を
 を加えるのだ。全体構成の一点としての社会性の欠如が指摘されるのだ。
 悲憤の分隊長、谷中の心にうごめいているであろう。分隊団結への不安
 感を思ふと一肌を脱し、私を苦しめる。また、三姐への私の態度
 〴〵雨脚にかき消され、うになる正義感を信じてはいるが、愛する三姐
 を抱つた事実、それへの後悔は去らない。恒願はなおも湧いては消え、失せて

「は湯いってくる。」
 「おい、萬治、おきてるか。」と田中にささやくと、彼はまだ寝ついていた。
 中隊長から伝達された、時間厳守に關する繰り言を田中に伝えてはみたが、それによつておさまる、私の心境ではなかつた。
 眠る小ぬ雨の夜更け、この憂い、体をもて余していると、「小野（重太郎）が蠅に刺されました」と、伝令がやつて来た。
 「なに、蠅に刺されたつて。」指揮班から医療班を取り、上笠分隊へ走つていくと、闇の中で唸つてゐる小野の音が聞こえる。舌を激しうでその痛みをよくわかつた。消毒、塗薬して、パピールの皮下注射をするとき、不遇の兵士の期待に添うべき自分自身の任務の重みをししと想つた。
 上野班長には、小野患者について明朝までの注意事項を残し、復床に促した。もう眠つてゐる田中たちを起さぬ、拍氣を使いながら毛布をかぶつた。田中にすまな、氣持であつた。
 もうみんな眠つてしまつた。たつた。三女の寝てゐるはずのところ、に、寝息がきこえない。と、何人か問うし、私の枕元に近づいて来たように思ふた。ただ、そのように思つただけで、暗闇の中でそれが何者であるのかは判定し難い。ただ、その体が激しく小刻みに動いてゐるようであつた。
 三女だ。そうに違ひない。と思つた。刹那、私はすぐに起き直り、身辺に發生する平然の収拾に努めねばならぬと考へた。
 暗黒の空間で、顔も姿も見えないが、心の動揺に堪え切れないうち、舌を噛み殺し、激しく肩で呼吸しながら、這つてゐる。三女は、一であるにちがいない。突如、腕を伸ばして探る。その指先に人の腕が触れる。同時に私の右掌へ握力が働く。
 「三女。はいめて死したのか。」意外に高くあたりに響いた。
 「班長」と呼ぶその者は、矢張り三女と同一であつた。
 「三女は私の性格をよく識つてゐる。自責の念に駆られてゐる私を和らげるために近づいて来たのだ。愛するに對する愛さるゝの相互の待遇表現なのだ。彼三女が生き残り、私が死んで、三女が死に、私が残されたとして、このリスパシブ（感応的）な了解は永遠にいや、水城に言水得ぬものとして誰かの心に留め置かれざるはずである。
 「ありかとう。お前か、ここにまゐる小なかつた。俺は一晩中眠ることが出来なかつた。よく心を配つてくれた。今夜はもうおそい。早く振りに一緒に枕をならべて寝ることしよう。」
 私は、う一言、たかへ、うに泣け、うであつた。三女は私の毛布の中に

のかは判定し難い。ただ、その体が激しく小刻みに動いてゐるようであつた。
 三女だ。そうに違ひない。と思つた。刹那、私はすぐに起き直り、身辺に發生する平然の収拾に努めねばならぬと考へた。
 暗黒の空間で、顔も姿も見えないが、心の動揺に堪え切れないうち、舌を噛み殺し、激しく肩で呼吸しながら、這つてゐる。三女は、一であるにちがいない。突如、腕を伸ばして探る。その指先に人の腕が触れる。同時に私の右掌へ握力が働く。
 「三女。はいめて死したのか。」意外に高くあたりに響いた。
 「班長」と呼ぶその者は、矢張り三女と同一であつた。
 「三女は私の性格をよく識つてゐる。自責の念に駆られてゐる私を和らげるために近づいて来たのだ。愛するに對する愛さるゝの相互の待遇表現なのだ。彼三女が生き残り、私が死んで、三女が死に、私が残されたとして、このリスパシブ（感応的）な了解は永遠にいや、水城に言水得ぬものとして誰かの心に留め置かれざるはずである。
 「ありかとう。お前か、ここにまゐる小なかつた。俺は一晩中眠ることが出来なかつた。よく心を配つてくれた。今夜はもうおそい。早く振りに一緒に枕をならべて寝ることしよう。」
 私は、う一言、たかへ、うに泣け、うであつた。三女は私の毛布の中に

もくつて来て、子もいかに甘えるように此月を丸めて、くすくすへ寄つて来た。考へてみれば、ひとこころ、この三好は私の些番兵としてしばらくの間、私と苦樂を共にして小した。去年の七月頃だつたが、島本隊を離れて、單身セブ島の師団司令部に勤めていた頃、一人一信、私の身を案じてくれたりも彼だつたし、また、ネグロス島のバコロドにいらつて来た私を喜んで迎えてくれたのも三好だつた。特に、後、崇吉兵長が熱死したあの当り、私と共に、金身金霊を捧げて彼の介護に努めたのも三好だつたのだ。

後の経過が不振で、人知れず悩み苦しんでいる夜半、こつて私の所へやつて来て慰めてくれたこともあった。そして彼が佳人でいたという和歌山の話、家族のことを語り、互いに生還して日本で再会する日も希い、私の手帳に地図まで書いた三好でいあるのだ。あれ以来、八月の月を経過しているが、三好と私は互いの胸に誓と変わらぬ戦友愛をよみかえらせ、この日インバンの河畔で断たれたか、三人のそのわだかまりは言ひ知れぬ力と特異な形式で、美しく抹殺されてしまったのである。

十一 残

印四

この様な事象とは別に、バコロドを離れてからの私は判然と捉える程ではないが、或る種の嫌世感にさいなまれていたようだった。

日々生活のうちに規律も希望しない。自分の将来に何の見通しもつかぬまま、生殺しの状態で飼育されている自分であるが、独力でこの世界から脱却する事は出来ない。各局面に於ける日本軍の戦力、勝利も敗北もつんばい、戦局を把握している故である。むしろ、この辺地の住民が、軍、戦局の或る日、私の許へ味代木の急病を報いて、高宮が駆け付けた。味代木は、野中、中隊を告ねるを果たして、彼は局部の疼痛に堪えかねて煩悶して、持病の「アツ」(胃腸突起)であった。ラニツ氏庄奥の診療室の多量撮影が原因して胃腸の痛みを訴えているかも知れない。特に、纖維食品、昨午に同じ症状で私が診療した患者である。注射二本と薬物を与えて、戻つて来たが、昨夜から降り続いている雨はまだ止みそうにしない。陰気な思いをしなから、軒下でひとりで、呆然と座っている私だつた。

夜更一更、思ひ、水を得た草原の緑が印象的だつた。将校宿舎へ回つてみたが、中隊長はすでに当番の曾根六を伴つてバコロドの街へ出向いてあり、猫の子一匹いなくなった。ポツ、ポツとリスミカルに落ちてくる水滴を受けている一枚の紙片

に気付いてよく読むと、このハムレットの英語で印刷されている紙が美しい。
Shakespeare's Hamletの詩だった。何たる事か。幽霊の入ってくる場面
が書かれている。

Enter Ghost (幽霊入る事)

Alar. Peace break Thre off, look where it came again!

Bar. In the same figure, like the King that's dead.

Alar. Thou art a scholar; speak to it, Horatio.

Bar. Looks it not like the King? mark it Horatio.

ア- (セラス) レー 静かに また来る事だ。 ~~~~~

バー (ナード) 以前と同じ姿だ。セラスは王さまに会っている

ア-セラス あなたは学者だから、これに話しかけてください。ホレイシヨ。

バーナード 王さまに似ていませんか。よく見ればホレイシヨ。

幽霊の代名詞に「イト」を使い、学者でなければ幽霊と話すことが出来ない。裏を返せば、質問をぶつけた人でなければ幽霊語が解せないという事だ。いろいろ考えをめぐらせたが、中世の文壇ではそのイトと語るにはラテン語でしか対話が出来ないという風潮を作り上げていたのであろうと結論を出してみた。

ふと、神々の居留地「丸善」で洋書の立ち読みをしている自分の
幽霊を見る思いをするのだった。

飲してくれない煙草をくやらせながら、その詩の柄を暗記していると
指揮班から悲鳴が聞こえてきた。安井軍曹と信田伍長の若ら
しい。どうせシラスレイナインのウサスキーでも飲み交わしているのだ
あろう。彼等とて酒を飲み飲まぬと治まらぬ。突きつめた精神状
態にならているのだらう。

夜は田中萬治と色々話し合った。彼の物語る瀬戸の海の光景は私の
心も動かすことは出来なかった。萬治は船乗りをやっていたらしい。
北ビルマの戦況が優勢だという。そんな情報も伝わってきたが、それ
もほんの一部かも知れない。また、誤報かも知れない。

ササ煙を横切っていると、「ドクトル」と声をかけられた。振り返ると現
地人だ。この近辺に一軒しかないバライの住人の一人である。

「やあ、マム」と振り向き、誰か病人でか、この四十二才の末之人は私も
揺らしたらしい。

いまはあそこのバライに棲んでいるよと、私は川向こうの谷中分所のパラ
イを指さした。川向こうに孤立している破屋づくりの小屋である。
今、夜七時にあってください。岐度です。と彼女は心を押して帰っていった。

「オツケイセブンオロツクアイゴウシユアリー」といったか、小ほと氣に
 かけてしいなかつた。多分、小松分隊にいて、かみさんか、おざわさ呼び
 に来た。私は彼女について、バライに入ってしまった。
 盛り沢山の山の珍味を用意して、いたので、少なからず驚いた。
 格別の用件があった訳ではないが、私達中隊が近々エスメラダを離れて
 行くであろうと噂もしている。土民の話を聞いて、招待のようであった。
 料理も食へ、随分しゃべった。シガゴは使わずに、英語だけで通じた。
 あんなな表現もあった。けと、いう風に、単語や表現法で参考になった。
 翌三月十五日は午後から、下士官以上の集会があった。会場は昨夜
 私の居た小松の、かみさんのバライであった。
 、そこで、今後の中隊の行動が、はつきり明示され、確認された。陣地は太郎山
 に構築される。連合軍の上陸は近いらしい。軽、不安と焦燥の景
 が胸を掠めた。時機到来の感慨は一入深かった。
 戦友グループは、トバを汲み合って、互に武運長久を祈り合った。
 後、中隊の田中谷中、三好、そして私の連中は、まわす不血に祈りを
 こめながら、なまけの液体は、なみなみと注がれ、そして乾き、水でいくつ
 であつた。
 予想しなかつたにすぎない。最後の別小酒になろうとは、誰しも、あ場では

間もなく中隊主力は二本柳子までの道路補修をすませ、二本柳子
 を經由して太郎山の北裏側、天龍川の畔へと移動していくことにな
 った。
 け、小松は、私は、少数の勤務者や患者と共にしばらくエスメラダに残留
 することになった。
 歩兵部隊山口部隊（部隊長山口正一、^部府王、津川村、久世間出身）の主力は
 すでに太郎山陣地を構築しているはずである。

（十二）連合軍上陸

患者を預ってエスメラダに残留している私の所へ、先発小隊から担架が
 運搬されて来た。井上分隊の藤川、言一、等兵である。作業中、下腹部
 に鋭痛があり、担送された。また、痛みは止まっていな。発熱し、嘔吐を
 入校をすすめ、小エスメラダに受診させたところ、急性虫媒突起炎だとみこ
 ち、搬送すると、眼は充血し、舌に白苔を生じている。フルス（脈膊は九十二
 ランツ）圧点に、苦痛の激しさがあらわれる。
 藤川は、調べて、調合しなから、私は、この処理について、留意を要する。
 藤川は、かつて内科医連で、私の手にかかったことはなかった。味代木によ
 うに、落ちつきをみせるか、し知れない。しかし、他隊とは云え、軍医から入校を

命ぜられてゐる。その宣告を私が無視することは出来ない。ギンバラオンで
の失策はある。あの小泉患者に對したように独断で前を張るのは止
むべき。一刻も迅速に入院させるべきだ。
喘ぐ患者を車に乗せ、その動搖に精一杯氣を配いながら私達はバ
コに到着した。
その日没であった。日昏れとしか思われず、この街の一角では人の足
運びが急ぐ。不快を思わせるばかりの雑踏があるはずなのに、夕
は往來の人影さへなく、あの風流屋のなかでギターの調べもきこ
ない。ゴーストタウンだ。
異様な怪物に對処して身構えている、そんな緊張と不気味ささへ
感じられる。この様相を裏書きするごとくに、この沖合には連合軍
の奥雷艇の出没が伝えられていた。
あるいは、と考えるから訪ねていった。バコに患者療養所はすでに
藻抜きの殻である。亭ういて路上で発見したシベリアンの話では、行
き先は判らないが前日午後からトラックを連ね、患者や勤務者とし
て医療器械など運搬された模様である。
療養所の行方が不明ならば、藤川は入院させることは出来ない。
さてどの指に對処すべきか、打ち拉かれた意図が頭の中で空転する。

入院と詮める決意と共に旅団軍医部の井上曲目長のことには思い付
いた。彼に相談して手術器具を借り受け手術をするより外はない。
石渡工場の角を曲ると、旧兵舎につく。久しく空き家になつていた
元角田分隊の部屋に藤川を休ませ、その足で軍医部を訪ねてみた。
しかし、隊医板(手術器具を格納した箱)も持ち出した後だった。
最後の頼みの綱も切れると、私の心身の疲れが一度におそつて
くるのだ。万事休すだ。悄然として藤川の部屋へ入つていった。
と、いうだろう。下腹が凝りも治まり、ポリス(肺)もかなり好転して
いるではないか。私は安堵の胸を撫でおろした。
「藤川調子がよくなつてゐるが、翌日も異状は起こらなかった。私は
これと同じ事例の患者を按摩法の手技で、快癒させた経験
と二件ほど知つてゐる。」
付添看護士の番西嘉太郎一等兵は、午後になると私の襦袢を
着て街へ出て行った。その番西のいない時、藤川は、
「腹が減つてゐるぞ。班長、まだ駄目ですか」と空腹を訴えるのだ。
「もう少し様子をみたい。俺に考えがある。後三時間位すれば、都合で
朝食を作らせよう。」
藤川は嬉しそうに笑顔をつくり納得したが、

恐らく手術器械は入手出来ないであろう。その可能性は頗る稀薄だ。多分藤川に食餌を与えることになった。彼の患者食が終つて暫く経過した頃、突如として車轉然たる音響音が鳴り渡った。窓を震わせて断続する音は稲妻の閃光を伴つて、不安と戦慄を漂わせる。息吐まる沈黙が続いた後で、何ですか爆弾でしょうか。藤川が最も恐怖感を抱いているようだ。無理もない健康状態が最悪の彼である。『どうも艦砲射束らしい。沖の彼方から打ち出しているのだろ。しかし、どうしたとすると、奴さん、一両日中に上陸する作戦らしい。彼にかかる憐憫の情というよりむしろ哀願の思ひだった。階段を駆けおりると、長田軍曹が、此だらけの顔をして佇んでいた。『参ったですわね、こんなときに。艦砲射束でしょう。奴さん上陸ですよ。と云つてもう一度彼の顔を見ると、『うん、どうもし、しかし患者はどうする。』と云う。『今と云う入浴は手術も不可能です。しかし昨夜マッサジを入念に

やった方がよかったのか、大分サアすつてきました。、こしはらくは元に戻るだろうかい、お小、つかは、ふり返す心配があるうで、この際手術をと思つたけど、まあ、その時は、その時のこととしておきましょう。なおもしきりに海岸線一帯に砲の激しい炸裂が続いている。やがて夜になるであろ、二戦への緊迫感をいやか上にも高めていくのだった。その夜、長田軍曹がすすめを受け入れて止むなく、私達はエスメラルダへ引き揚げていった。高原から見あすバコド付近の海岸線一帯には無数の曳光弾が乱れ、真昼を照くばかりの輝きまを放っていた。彼等米海軍連合軍はすばらしく優秀な武器装備をもつて、その夜半からほとんど無血に等しい、ネグロス島上陸作戦を開始したのである。

十三 訣別

別

バコドとエスメラルダ双方の残留隊が、お小、お小の坂を捨てて、太郎山の裏、天龍川畔に、いるはずの中隊主力を、追つて行った翌日の三月二十八日、連合軍上陸の報が伝えられた。成規アメリカ軍、ならびにオーストラリア軍は、巨大な戦車を陣頭に配

備し、さるべき化学兵器も駆使し、威武堂々バゴド以南バゴに至る
 海辺地帯にすぎまし、進軍を開始した模様である。しかし日本軍は既に
 空軍の地上兵器もなく、小の抵抗に事欠くは必至であった。主要戦力
 はレイテ島に戦で消耗し切っていたからである。

この時点で東条貞男少将以下七名は、バゴ地区警備ならぬに橋梁
 破壊の任を以て派遣されていた。中隊長は隊長はとしかくとして何
 とはなしに気がかりでならなかった。全軍無事で中隊を逃つて太郎山の
 ふもとで天龍の山に帰ってくるとはどうして考えられぬのだ。

ネグロス山野を揺つて、本格的な艦砲射撃は続行されている。
 迫る砲、野砲、重砲、戦車砲等の集中打が加わり、とうとう久しく攻軍に暇
 をみせない米空軍の銃爆連が呼応する。まさに海陸空三位一体の
 閃電に、ものといわせた総攻軍であった。

家にギンバオンも奪取されよう。ギンバオンを拠点にした彼等
 が繰り出す戦車、ブルドーザは、指呼の間、このサンファン道に
 車輪を上げ、天龍の溪谷に本進してくる。殺戮者といはれようの付近
 へ近づいて、だう。
 いよいよした時機に、私たち島本隊はエスメラルダよりする糧秣輸送を行
 わねばならなかった。もちろん空襲を避けるの、夜間輸送である。

ネグロス西海岸からずつとせり上がつて来た太郎山の麓、二本椰子に
 は砲煙が渦巻き、跳めやる彼方のビサヤ海、そこには遊撃する敵艦
 船の信号が明滅している。鳴り渡る砲の音はなおすまじく、なうた。
 友軍の貨物集積所であるう、ギンバオン付近で数か所火を吹い
 ている。アホ周辺は煙の幕にとさき、役界はゼンゾウの中に山口部隊
 の散兵たちが活動しているはずだ。

自鼻を突く砲煙の香を、銜いて一行はカラバオ（Caramo）スペイン語
 の羊の轍の軌みに、寂寞を思ひながら一踏エスメラルダへと下つていくのだ。
 連日の過労と睡意、空腹に耐えながらカラバオに鞭打つて二本椰子（
 しりついたのは）四月六日午前九時であった。

誰かにもらったシガレオ（煙草）現地という。良質のものはシガレットと英
 語で呼ばれる）に火を点けると、程遠い海辺から、広漠とうち続くマ
 イス煙を、渡つて来た風にあわたたく消えてしまふ。こんな紫紺の
 煙の流しか、異様に私の心を捉えるのは、何故であろうか。
 左手のギンバオン付近には、数条の火の手が上っている。あの雲の大群れ
 巨大な群れを山崩して、難を避けているだらうか。

「臨終に傷いた人のせへ」「生に關する主題を掲げて、空虚と放心と暗黒の空間へ描き、続けていたあの、ネオンサイン、あの風物も幻の色彩となり、永遠に目にふれることのないであろう、頭上はコバルトの空、その下にかつた白雲が絡み合っている。私ははるか隔った故郷の人を想い、春のおぼろ、夜の蛙の音と桜のことを回想していた。」

と、その時私は大きな衝動に眼を瞋り、愕然とするのであった。一本の小径の向うから斬り込み敢行の任務を帯びて、松尾へ赴く古内小尉以下一個小隊の出動に遭遇したからである。愛刀を確と握り、黙として歩を運ぶ古内小尉の背後に続く下士官兵たち、中隊最初の斬り込み隊であり、初陣である。その小は、どうだおまじコンセブションにまで進攻しているといわゆる連合軍の戦車と対決する挺身攻車による挑戦の拳なつた。班長行ってくるよ、凜と結んだ白鉢巻へその決意のほどを見せて笑顔を作って、私に手を振るのは角田伍長だ。「がんはつてくれ」と手を上げる私に、応える下士官や兵隊たち、そして恐らく、小が最後

になるかし、知らぬ、あの時を惜しんで握手を求め、兵士もいる、あの世に

伝わる人のあたたかみが微妙になつていく思われる。一つの使命をひるまず受け入る、身を挺して大義に向かい、踏み進む力強い歩み、足、足、足、足、俺も後へ続くぞ、激しい感情を互の胸に受け止め合つて、しかし笑顔さえ見せている井出伍長、井上兵長、谷中軍曹、中島三好、香川、藤村、田村、池田たち、そして勝瀬、山口兵長も続く、特に傷病のため私の手をかけて全治させた兵士たちへの愛惜の念は格別に抑え難いものがあった。

ああ、みんな征つてしまった。伸び上がったのは振り返り手を打ち振っている彼等にはあるが、この岸に出れば恐らく還つては来ないであろう。笑顔で死地へ赴く彼等の英姿に思いを馳しているとき、

「班長殿」と呼ぶ声、振り返ると田中だった。突如として、いよいよない感情が私の全身を駆け抜ける。

萬治おまえしか！ 自分に分かるほど声が上がっていた。もう会えないではないかと気を揉んでいました。長い間お世話になりました。田中はまるで死出の旅に送った人の挨拶のままだった。

「おい、萬治。今の言葉、ありがたう。俺は何かと無理を云って世話になつたな。今までのいい思い出を作ってくれたのは、お前だ。甘んじ死に急ぐ必要はない。死ぬのはいつでも死ぬるんだ。出来れば生きて俺の所へ帰って来てくれ。しかし、俺の戦友だ。未練は禁物だ。少し遅水たな。武運を祈っている。さあ、征つて来い。」

私は胸の詰まる思いを、こらえて彼に抱すべき、心中を披歴した。

「班長殿、それでは……」

二人が握り合つていた手を振り切つて彼は崖下の礼を残してお隊を追いかけに行った。田中が落としていった涙が、高原を渡った風に光つて私の掌に残つてた。

十四 緑

島本中隊が居を構えている天龍川岸に遂に攻めの的となつてしまった。迫撃砲弾であらうか、ミーツミーツといやな摩り音を伴つて谷合いの銃力屋根を掠めると、必ずその後で大けさな炸裂音が車轉き、谷間に真紅の火花が上がり破片がばらついてくる。また弾着地は遠く、谷へ呼びこき出す友軍の機関砲は、音も絶え絶え、水々々減るに聞かれ

一日と教を増す連合軍側の砲撃。砲の音が熄むしばしの間隙を逢つて必ず数回かかるのがグラマン、ノースアメリカ、ロックスヒード、ストコフスキー双発機、B三十五、まるで空軍の大見世興業だ。操縦士たちは谷合いの上空で器用に旋回し、その有能ぶりを披歴し、その後で機関銃の連続点射を仕掛ける。

ダググダグダグドドドと射ちまくる。下で逃げ惑う我々の鉄帽に葉莢がカチンカチンと怪しくはね返る。葉莢の刻印には一九三八とアラビア数字が刻み込んである。何と彼等は七年も以前に生産された銃丸を使っているのだ。

余裕なく、縦横無尽に、そんな波状攻撃が止むのは夜間だ。がそれにとって代わるのが地上火器の迫撃砲である。トントトントトントと気が抜けた大鼓の連打のような発射音、そしてその後火花を迸して炸裂する。が、その炸裂の位置はかなり我々の方に近づいている。サンファンあたりか、この日の午後、戦車の軌跡が聞こえる。これは谷間の夜は深まりやすい。太郎山と双葉谷を隔る溪流が、不吉な予感を伴つて騒ぎ、夜目に光を白く、そんな夜半（三十四月八日）であった。荒々しい声を発してなだれ込んで来た三人の兵士があった。

松尾虎行、吉本正敏、西川山太郎である。彼等は車乗員男伍
 長の指揮下にあつて、バゴロド南方のバゴ地区の橋梁警戒備にあつ
 っていたのであつた。

三人の原隊帰還は直ちに中隊内部に伝えられ、隊内は湯きに湯いて
 飲んだ。しかし分隊長車乗以下四名は、その任務のため相果つていた。
 中には自らカ手によつて春秋に富む生命を断つた者もいる。手榴弾
 を使つたのだ。敵の掌中に捕えられ、より、早く死を握ぶのは軍人の道
 として信念を強くもつていたからだ。

帰つて来た西川山太郎は重傷していた。連合軍から橋梁を守り抜いた
 ため、創傷の勢が、草むらへ、握銃したとき、突如として全身にしびれる
 ような衝激を覚えた。嘔き出す鮮血で自らの受傷に気付いたのだ。
 ある。カラバイン小銃弾による貫通。銃創であつた。

激しい攻防戦の末、遂にバゴ区を奪取された。西川たちは、太郎
 山の裏に、島本中隊を追及して、この天竜川ほとりに辿りつく
 数日間、登山を分けて、飲まず食わずでやつて来たのだ。
 西川は、創の痛みと、疲労と空腹を緊張で支え、本隊にやつて
 来たのである。か、医務室の顔をみるなり、心が弛み急に低い呻

きを發した。余程堪えていたにすぎない。中隊長もかなり氣になつて、うらしく、
 胸の横に坐つてせあしく急かせる。創部の処置、石断え、血清注射、化膿
 防止のための処置をすまると、私は彼の両肩に手を置いて、言つた。

「西川よく帰つて来たな。却て芳だった。幸いにして左腕だから、高一
 の場合、たつて行動し出来るだろう。今夜は蠟燭のあかりで十分に
 診入れなかつたか。一応の処置はしてあつた。明日はもう一度診なおして
 みよう。この場で石断壊疽と化膿のおそれはないはずだ。今夜飲を
 食つたら、この場所を休むかい。

私は、そう言つたが、彼が不憐れにならなかつた。分隊長以下四名の
 戦友に死なれ、激しい創の痛手を負いながら治療してくれるはずの
 班長の死後、(四月十日)新たに開設するネグロス島野戦病院
 (Hindenburg Hospital) 略して「H」の定員として転属していかねばならなかつた。

西川は、「はい、ありがと、うございませう」と、刻みに二三度頭を動かして
 謝意を表わすのであつたが、この大きな男の、うさしい、くさが、何と愛
 おしく、なつた。

喉頭を決るように短刀の利いた舌をしながら眼には優しげなうろおいで

たたえていた。と、
「班長、また何かへいり来る人ですか。」と訊くのである。
「……え、知っているが、しう……」
私は不思議に思った。

野戦病院の開設、その小に併う私の転出、このことは中隊長と人事の和手書

長と本人の私しか知らないはずである。
「……え、何し知りません。彼はややためらって私を見凝めた。一層うろお

いも増した眼であった。私は一瞬、ときとしたか、平然と装ってしう一

度西りを見直した。西りは泣いているようだった。痰が一つ床にこぼれ

落した。私も泣けそうだった。
「何か俺のことを聞いたのか。」

「……え、何し聞きません。でも自分はバゴから班長、班長と思いながら、必

死で此処まで遊りつきました。でも傷の手当をしようとしていたでいる時、

藤松班長がどこかへ行ってしまふんじゃないかと、そんな思ひがしてなら

ない人です。
彼は世智にむけたブローカー（仲買人）のごとくに人の心を洞察する術

と心得しているらしかった。

「西川、お前たち東条分隊がバゴへ出発したという知らせを受けて以来、俺も
臨分心配していた。状況が状況だけに一日として安らかな日はなかった。お前
たち全員が戦死し予想していた。お前と前バシて云うのもおかしいが、実
を明かせば、西川を少し知ってあげばよかったなと、二三日、前バシを思
つたことだった。お前は健康で頑健で俺の世話になる男ではなかった。
従って強人ど付き合ひや互いの文法はなかったと思ひ、俺は頗る好
奇心の強い男で、うすい丸の船室で腹を見せて寝ている奴は、この剣で
突くぞと言つて短剣を振りかざしたとき、驚いたような眼をして俺を見
たんだ。その時の眼が印象的でその眼に目を付けていたんだ。悪いか
謂わばジプシーのよう、飾みだと思つていたか、矢張りさうだった。
矢張りお前は鋭い感を持つている。お前も子どもの頃から臨分苦
勞して来ただろう。え、私なんなんだ。人間は苦勞を積み重ねないと人間
になれないという。苦勞しない者がいかに高い下駄を履いたってお前
には敵わないと思うよ。
予期はしていたが、明日から野戦病院の開設を小ることになった。転属だ。
中隊のみんなと別れること、傷ついたお前や運田を置いてここを去るには
億万人気持だが、この転属し云わば才能を買収することだからな。」

話が方向転換し、うになつたので一先ず切つたが、西村に何を説明させれば、つゝ怪りも与え得るかを私は探してゐた。

「俺の島本隊付きは後三十時間位か。しかし西川考えてみる。車条分隊は恐らく玉砕だろう。西川はもう一度会って話をして、俺の人間性を理解したい。恐らく駄目だろうがと僅かな期待を繋ぎながら待っている。俺の所へ、傷を貰ったその西川が、班長に会いたい。班長に会いたいと希望して、しかし俺はただ惘然と、お前（まえ）に会うのみか、今まで知り得た医学的な体験の上に、一心をこめて治療しなければならぬ宿命を以って対しているんだ。お前は俺に治療を受ける。必然性をもつて隊へ戻って来たんだぞ。これが尊い人間、機縁（き縁）というか神仙（せん）とさせ給う巡り合ひだな。しかし俺が野戦病院へ転出すべきその翌夜に、患者と治療者との関係でいい情をかけ、情をかけられ、心を照らし合はう一夜を過すことか出来る。お前の帰りが二日おくれば俺とお前は会えなかつたかも知れん。その母（はは）と銃剣（じゆんけん）だつてという明日まで、そのまゝにしておけば駄目だったかも知れぬからな。戦友の死、自分の重傷、私の転倒、いわばそんな三重苦を背負って戦列にゐる、戦友の死、自分の重傷、私の転倒、いわばそんな別れ、いく俺だつてつらいよ。西川、戦友の分まで元氣になつて生き長らえてくれ。」

班長殿、そんなに心を配っていたって嬉しいです。自分は班長殿の所属

121

西川は、両方の拳を固く握り、その片方で眼を、幾度にもすった。
「いや、曲解して世間たり困る。上級者や戦友が亡くなって、そのことを思い遣う
西川の思ひは痛くはたよく解かるか、義理を立てて追腹を切るかは今は流行しな
いぞ、乃木將軍のように、みあと慕って我は逝くなりて殉死したあの方は別だ、
古代に堙輪で心を捧げた例が、梁山ある。堙輪、というは優雅で何か魅惑する
けど、英語でクレイフィギアという、粘土の人の意味だ。駒の頭も信心か
らというけど、西川のように気を揉むと、東条分隊長も困るだろう。むしろ
生き延びて日本へ帰り彼等が留守家族の人たちに勇気づけた彼等が行
方を話して上げる方が、最良い方策だと思ふし、俺が東条死ななう是非
うしてほしいよ。」
西川の苦悶がよくなる。時折、生唾を呑みだす。喉頭が動
いてそれを証明しているようだ。
「臨分話したぞ、西川、俺も満足だ。今夜は此処で泊まってくれ、熱発やら
すと大変だからな。」

「は、病後へ来たときはお送りします。」

心身共に疲労の極みに達している西川は、その三ノ刀とたたない、うすに「喝り」をかきながらぐっすり眠りこんでしまった。安らかな寝顔で嬉しかった。

西川にとってみれば、ゴの思ひ出は、彼の生う続く限り尾を曳きながら「景」の心とくつき纏つてゆくであろう。彼はその心と生う対決しなけりばならない。私も毛布を被った。明日からの野戦病院での勤務分掌など、おれも小考をいっている。次々と好奇心が頭をよぎってくる。

敵の火焰放射機が放つ炎が、愛の両岸に反射し合つては絶え、消え、はまた燃え上る不気味な一夜であった。

その翌日、夜おそく古内少尉陣り込み隊の面々が帰ってきた。興奮と幻滅の交錯する寂しい凱旋であった。化学兵器に加えて、予期以上に旺盛だったヤンキー連の敢闘に抗し得ず、斬り込みは断念。取り消しとなったのである。サンフラン道へ押し寄せて来る戦車の放射火焰が、ボーツボーツと赫く照り照え、天竜りの岩壁は不気味な色に塗りつぶされていく。その山岸辺の谷中班上連合軍の情勢や、彼等の作戦の予想を語り合った。床についたのは、夜中、十三時になつていった。

十五 野戦病院

昭和三年四月十日 朝、重い背囊を背に、爪先登りの山途を、喘ぎ喘ぎ上

てゆく、野戦病院の開設予定地 照国台（日本軍の命名地名）へ単独赴任していくところなのである。

迫近砲弾、投下爆弾の炸裂によって、森も林も荒涼たる姿に荒れ果てている。道中には到る所、空中から撒布したリーフレット（宣伝ビラ）が、乱れ散らちていた。憶りに耐えなからしむる坂を上ると、古い台地へ出た。勿論地味もなく、この径を通過した経験のない、従軍の感によるものだ。この地味はサンフラン道の終点あたりであろうか。そうすれば、此所は同時に敵の幕舎が出来ていると言われている。アホやギンバラオンへの始末もあるのだ。

巨大な弾痕が、赤茶けた穴を、不態に見せている。大きいのか、三つしんがたれ、いた。火焰放射機によつて、焼き尽くされた数台の外ラックの残骸が、転がり、また、鼻先に硝煙の香が漂っている。全く完膚なきまでにやっつけられた姿だ。

と、敵側の小銃弾が、私の頭上を掠める。またカラバインの連続突射が鳴り渡る。周囲を敬言戒しなから進んでいると、友軍の三八式歩兵銃が、おれを、おれを、おれを、近づく音をたてている。もう米軍の散兵が、ここまで来ていた。と思ったとき、またおれも頭上を弾丸がヒューンヒューンと掠めていく。

「サナバビッチユー」(根畜生の英語)アイバブインポートグレート
 (俺には重大な任務があるんだ)と喚いたが彼等に聞かぬようはしない。
 実際、こゝで殺すのは何にしろない。軍医学校入学を諦めてわざ
 わざ高知陸病の津野進尉を口説いてヒリッピンへ渡つて来たのだから。
 人なことを回想しながら、身をひるかえしてマンゴの木の下にもぐった。
 寄りか大樹の影だ。

今しかた弾痕の傍で拾い上げたリーフレットを捻りてみると「一将功成り
 萬骨枯る」のテーマ見出しである。中国の昔松竹になる己亥歳
 の漢詩の最後の結びの一節を引用したものだ。アメリカにも智者者
 かいるんだな。多分アメリカ籍を獲得した日本人が
 イラストしたものには違いない。明らかに日本軍階の指揮
 官も中傷するためのビラである。

澤田江山入戦図

生民何計樂樵漁

憑心君莫話封侯事

一将功成萬骨枯

その挿画には第十四方面司令官山下奉文将軍を
 モデルにし、全く顔色を失った閣下が戦場の廃墟
 のさ中をただ一人打ち伏す部下の屍を踏みまたき
 なから刀を手に落すのびてゆく姿が描かれていた。
 私は一見してそれをすたすたに引き裂き、弾痕の底

へ投げ捨てたが、相手にこちらの実態を見透かしているようで無性に腹
 立たしく思えた。時折小銃丸が飛び散る。ここに居ては危険だ。

小屋のみに姿勢を低めて懸命に走り、台地をよぎると右側へ小径が続
 いていた。よし、此所だとばかりに茂みの中へ通じるその径へ踏み込ん
 だが直感的におかしいと思った。手榴弾の安全装置を外し、急る
 ことなく警戒戒を続けながら進むと斜面に伸びている雑草の根っ子で足
 が動いた。か、日本人の軍靴だと察知した殺那に顔が見えた。

「あつ、富永曹長。不意の侵入者へ思わす声を発した。」

「曹長、どうしたんですか、今頃こんな場所です。もう、このところであつ
 てしたよ」と右手に掴んでいる手榴弾を見せた。とにかく冷静であつ
 た。

「ぼくは斬り込め隊を連れて、夜からこのあたりで緊張しているんだが
 示し合つた時刻に、こんな兵隊があるばつてんか、まだ素人だよ」と九州弁
 を言い放つてまた憂い顔になった。彼は鹿児島島出身であった。

「そのつは、大度ですわね。一服やりましょう。」マッチ持つとるな？」

「うん、マッチはあるけど、シガレリオはないですよ。三人は其所で打ち
 寛いで煙草を喫ったが、二人の出合はこわつきりであった。」

「野戦病院」つちかしひすねえ。二島の教育隊の同僚 福岡県、女郡
へ、女村出身 吉泉大助の九州訛りを使つてみた。

「照国台へつくととな、照国つちとげんとかな」と彼が訊くが私自身も
知らず大笑した。そのあとで「やや心細くたつてとにかく日が昏いという
すに」と考え、別小言葉と交わして別れてしまった。

照国台と呼ばれるその場所に到達したのは日の暮れたつた。そこで
ネグロス島野戦病院長として赴任していた 箕田大尉と会い、庶務の青藤
少尉に引き合わされた。

希望としては手術室付きと願っていたが、すでに配置は決定されてあり
本部勤務となっていた。

青藤少尉は小男で軍医ではなく衛生少尉である。総深く気むすかし
屋で愛のないだと直感した。はやくも、小から先を思いやられる。し
かし、人格を構成する諸要素にはよって来る原因があるのだ。何か彼
をどうさせたかを探求してみよう。気が起こつたりする。

当分の間、この人と連絡を取りながら、入院患者の受け入れ、院内
各部への連絡、病床は誌一子紙の作製そして遺留品の保管等の
事項を司ることとなる。幸い、第六航空通信隊（六航通）の隊付下士

佐官・黒田伍長が入ってきた。満州から南方へ移ってきたという、顔面は蒼白の
淡白な青年であった。互に協力態勢の関係を保たれようとした。

深い森の茂みの中で、こころかしこ、と粗雑な幕舎が張りめぐらされ、入院
患者の受け入れ態勢が出来つつある。

二十四日四月十三日以来、戦傷患者は続々と搬送されて来た。日は入院患者数、
数十名あるいは百名以上に上る患者の受け入れは大変な重労働である。勿論戦
傷者の入院には予告はない。全員臨時入院だ。次ぎから次ぎへと運び込まれてく
る。朝も昼も深夜でもある。

いかに張り切りの私でも、小以上の体力は続きそうにない。さすがに病院長も
この実態を見かねて、一日最低五時間以上は睡眠をとらねばならないと忠告
をしてくれるのだった。

が、この病院所在地 照国台へ空からの攻撃が迫るようになった。野戦病院
の存在を知って知らずか、爆弾はこんな山の斜面に落ちた。野戦病院
敵機よりの機関銃掃射によって殺されていく患者、幕舎での就寝中に
迫る砲火の激しいことによって、傷つくる者等々、こんな事例は枚挙にいとまは
ないほどに切迫してくるのだ。

野戦病院が最前線になつてしまふ。か入院患者は日毎に増加して中
くもの、それに比例しての糧秣の支給は出来ない。
とにかく、平穏な地域を探してそこへ病院全体を移さねばならない。
新たな病院南設地を探査する仕事は私達本部の任務とされているのだ。

129
兵團の令報へ、んな思ひ切った指令を書き、いま小るゝことになつてしまつた
藥物、消耗品は残存が少くない際、上守ら小るはずはなかつた。

隠つぽい山地の樹々の蔭に、設置しきれなくなった屍体が幾体も見え、誰か言うところなく、この野戦病院は姥捨山の異名が付けられていた。各部隊が、この病院設定地を通過する時、各隊で足手纏いになる兵隊は、この地域へ置き去りにして行かざるからである。

空陸よりする立体攻撃は続けられている。

薬局付きの高田一等兵が、私に話した。今朝の二時から今しかたまで、迫撃砲の発射音を数えていたんだが、九千八百五十二回だった。頭が混亂してきたので数えるのを止めましたが、この調子ですと、迫撃砲だけ一日に三万発を越えるでしょう。しかし奴さんうそ氣ですわね。

高田は持てる国、持たざる國の対比をしているのだらう。彼は氣軽に兵隊のようだった。

「高田、お前も変わり者だよなあ。俺と一緒にだ。」

病院内では、私のことを変人だと云っていることを、私自身知っている。

「でも、自分とはどきどき、壕の中へは逃げ込みます」と言う。私は笑った。

「いや、そうではない。俺が壕の中へ入らんことを知り疲れているようにだが、迫撃砲の数を、そんなにならぬとどうにもならん。数える人、もうさう言うには、いまい、氣慰めにならぬとしか、そんなことは止せ。その水に薬室勤務者が、豪の内へエスケイプ（逃避）などして、いたる。劇毒薬、なんが、溢れ小じし

たら不愛だぞ。

「へえ、何かあったんですか。」

「いや、今朝も俺の所へ三人ほど来て、代金は十分に払うから毒薬を分けてほしいと云うんだ。別の人があそこと相談に来たよ。」

「なにに使うんですか。」

「相手は在留邦人だ。延々事情は聞かされたが、結局は自分の子に飲ませるつもりらしい。眼を泣き腫らして、ただ戦争って悲劇だよな。」

「足手纏いになるからでしょうが。」

「そうだ。泣き喚いたりして大言を出すも、数千メートル上空から観測機が、付く装置を仕掛けている。その地点を教えられた爆撃機が一発でトカント殺るからだ。」

「悲劇ですわね。」

「結極、人間が最終的に何を求めているかよくわかる。親子だの女性愛だの、

の、起因しているか、最後に至れば、自分自身か宝だよ。しかし、この場合は、集団への心遣い、起因しているか、まあ、愛に開ける、アイロニーの命題だな。」

「そのアイロニーというのは何ですか。」

「ああ……哲学という意味だ……知識を愛

「へえー」高田は感心していたが、薬室の保管品が気になったとみえて、急いで帰っていった。
野戦病院も環境不衛生、薬物不足、処置の不適当、その他、事由で死に絶えてゆく患者は後を絶たなかった。
積み重ねられた遺留品の包みと前にして、果たしてこれ等の品々を守り抜くことが出来るか、どうか不安に思えた。
パチパチと迫る砲弾が近くで炸裂した。その硝煙の嫌な臭いが一杯たちこめていた。病院本部前へ「お願いします」と担架が運び来て来た。
担架隊の面々は申し合せておししたかのように全員が白鉢巻をしている。
連日降りつく雨、乾いた泥濘の山坂を交代しながらとは云え、担架を運んでくるのは大変な業である。
患者は第三航空測量隊本部のパイロット下士官だった。痛い、痛いと言いつつも泣くこともない、声を上げていって、声を発することによって苦痛を和らげることも体験によって知ったのだ。
「おい、やろ小た」屋老の流付近す「そしたらすぐ近くじゃないかい」「おい、やろ小た」爆弾なのかい「あ、一体どうすんだ、今度は黒田伍長か、私に代わって気合いを入れた。」「だめだ、誰か返事をしろ」

「はい、迫ります。患者自身も答えた。」「そうか、元氣を出さなきゃあ駄目だ。」「小位のこと、下士官にしろ、部下の手前み、としないぞ。腕の一本や二本折れたって喰らなう。」「臨分、乱暴な受け付けである。」

兵士たちは患者の干切れを聞いて、ぶら下がっている左腕に注目した。私達病院勤務者が大声で怒鳴るのを、ときまぎして答える小ないた。やろ小たのは残念だとは云え左だ。幸い、創は小さいから治りも早いだろう。氣をしっかりと持ちつた。左の膊骨は複雑に挫滅しているから、切断は止むを得ないが、詮めろ。右を切るより増した。昨日は腕一本、脚本切断した兵長がいたんだ。」「お前はいいようだ。心配するな。」「い、い、い。」

私の銅鑼音が迫る砲の炸裂音に對抗するため一層高まる。いならぬと聞えぬばかりか、精神的創傷の治療に期待する面もあり、また受け入れる私たちだってたまらない。毎日毎日、腕や脚や顔面や時には罌子丸を咬み飛ばした患者だってくる。平時の病院の受け付けの様にはいかない。私達も氣を張って大声を出して、いなければ、第一私たちが参ってしまうのだ。患者も輸送隊も病院へ怒鳴られに来たようなものだ。しかし、患者も御苦労だった。病院も精一杯手当ては尽くすからな。と言葉を添えて

輸送隊を労、つことは高小なかつた。
 やかて五月半を過ぎると一人一合の糧の配給がなされた。しかしこれが最
 後の後の補給は完全に杜絶されてゐる。海岸線は連合軍が充滿し、
 物資の輸送は断絶されてあり、制海制空権も失つてゐる。
 五月下旬に飯盒の蓋一杯の糧の配給があった。食糧はこれが最後であつた。
 勤務の隙をみて兵隊たちは鉄屑へ糧を入生木の棒で突いて脱穀してゐる。
 更にその玄米を搗いて精米しなければならぬ。これに要する体力の消耗がこの
 米自体の持つカロリーとで幾何の差があるであろう。
 私はとしかく思ひつきり眠つてみた。病院開設以来平均四五時間は眠れて
 いるだろうか。誰だつたか中国の詩人、黄山谷(十一世紀)の作も無理矢理思ひ
 へてみた。
 (晨雞催すに起きず彼を擁して松風を聴く) 朝雞か時を告げたか起きずに蒲
 団を抱いたまま松風を聴いてゐる。漸く思ひ起して何と素晴らしいことだと黒田
 に話してみると、「しかし我々が日本に帰るという体験をするに自體出ま
 るであらうかと言ふ。それこそだ。松風は聴かなくともとにかく眠つてみた。
 しかし日本に帰つたら須磨あたりの海岸で一泳ぎした後で松蔭かど
 かで昼寝をしようといふと考へたりもする。そしてついでに時代のことなど
 追憶して神戸の山手風景や平和樓のあった長留地の公園あたりを回想

してゐるが自らで作る心のなやういひをときといふべきか。
 多岐な勤務の明け暮れが続いてゐる。命令受領の順番が巡つて来た。
 将校や下士官にとって最も好きな勤務なのである。

殆んど年中降雨の現象が持続する。こんな山中に追いやられて日の目を見
 ることが出来な、我々なのである。連日陰惨な雨の荒小模様続きである。
 瓦退治の手段として洗つてゐる軍袴(ズボン)や襦袢(シャツ)は半月も前に
 洗つてよくしぼり幕舎の中へ吊してあるがまだ干てはいない。

濡れた軍衣と編上靴のいびきで参謀本部のあるはずの笠置山へ向か
 った。何かに備えて、伴つてゐるのは鈴木上等兵である。私はすでに栄養失
 調に罹つてはいたが任務は任務、その責めは果たさなければならぬ。
 双葉台へ上ると敵の重火器が火を噴いてゐた。凄く速く出す自動小
 銃(カラバイン)の流弾が身辺を襲う。その音が不気味だ。

ここは太郎山に連なる傾斜面で第一線だ。しかし、目的地の笠置山へ
 到るには、ここを通過するしかない。強いて突破だ。

鈴木、いかに振り返る私に、うなずくその顔に緊迫の色がうかかえる。
 「俺に随つて来るんだぞ、覚悟を促して、小屈みになり焼け野を突っ
 走る。」

ヒューンヒューンと小銃丸が後を追う。右を左も流れていく。ダダダツと軽機関銃の連続射撃が加勢する。

焼けた野を横切つて三人が木立に身をかくそうとした。その時、低い雨雲をかぶつて旋回していたノースアメリカの投下爆弾が炸裂した。耳を塞いだまま振り向くと、鈴木も異状なした。まず一安心。最大の難所は突破したのだ。

鈴木、関門は抜けられたぞ、これから太郎山からの車砲の発射音に気をつけるんだ。帰りは東側へ大きく迂回してみよう。やがて到着した笠置山から見る双葉の台地は、まさに紅蓮の炎が渦巻く茶褐色の煤煙が立ち上り、地獄の様相を呈していた。

鈴木、疲れたろう。少し休憩だ。

残り少ない煙草に火を点けたが、私は腹線を太郎の山脈へ注いでいた。

頂の生々しい戦禍で、櫛けずらした姿は見るに耐えないものであった。後掌古し、森り伝承らし、あそこで慟死したのだ。一部の島本隊員はまた死守している。その後犠牲は出なかっただろうか。皆死なずに、あのままの人員が残つてくれれば、いかに切なく祈るのであった。

笠置の腹線を越えて右へ下り、天龍左岸の兵団本部を拝し当てた。

兵団長以下諸参謀らは難を逃れて、鹿谷へ後退した直後だった。

疲労は激しく、空腹の胃があたり、空虚なものを感じた。

鹿谷で複雑な命令、全報を受領した私は、再び泥濘の途を、病院本部までとって返して来た。

そこには、中島茂理衛上等兵の死の報が待ち設けられていた。二所頭部から頂へかけて、直連砲弾破片が貫いたところである。大張り束太郎山だ。(五月二十五日) 昔者も身受けしたか、と聞いた梅香という名を奥さん顔が重なり見えようだ。

後にも失い、中島を失った。生への執着も失った私である。

病院で死した者も、富田伍長、池田、井原、松友男、田中敏春、小原山本助一があり、安永恵の死は昨日聞いたばかりである。

あの太郎の斜面を鮮血で彩り、後中島は処を同じくして散華したのだ。

某分隊長が離隊していったと報告を受けた。現役の下士官だ。私は逃などとは思っていない。何か意がさしたとでも、二うべきか、必ず帰ってくる。いせ帰ってくる。軍曹も。皆が待ち促している。きつと帰隊してほしい。

憂うつな夜、何かと悩みの多い最近である。毛布を覆っていたが雨は煙んだらしい。見ると木立の中にも明るさか漂っている。隣で休んでいる黒田伍長は眠ったらしい。彼独特の鼻がせまった。

「うつつらうつつらしている、うつつ私の部屋へ一人の兵隊がずかずかと上がり込んで来た。何と騒がしむは仲が騒がしむは生え放題である。誰かは見極め難いか」「班長殿、米をください」と手をさし伸べるうた。その声でよく見直す

と、その小は田中萬治その人ではないか。ひょくやせ細っている。

「おい、萬治、どうしたんだ」と叫ぶと、田中は「斬り込み隊用員に選ばれてギンゾラオンまで行ったんです。しかし、アホに飛行場が仕上っていて、重軽爆機が盛んに発着してました。警戒か嚴重で任務の達成が出来ず、そのまま帰って来ました。自分等は、この一週間、何も食べてないです」と云うのである。

「よし、田中。それにしても此所までよく訪ねて来てくれた。ここには生憎米の持ち合わせはないが、六航通の本太尉殿に相談して航空食を貰ってきこてやろう。心配するな。何とかなるだろう。」

「ここまで言った時、目が覚めた。

「ああ夢でよかった。自分、言葉に安心しながら起き上がった。全身がぐつより汗で濡れており、何だか倦るくて空しかった。

「戸外には人らしいもの、姿は見えなかった。病室の幕舎で患者が低くうめいている声が聞こえた。雨に濡れた木々の葉っぱが、珍らしく雲間から覗いている青い月に光っていた。

一六一 隊長の自決

不安な一夜が明けると、私の体は身動きも出来ぬほどの重症になっていた。食糧の欠乏による脚気兼栄養失調症である。連日連夜の酷な勤務も一枚唾んでははすだ。動悸の鳴り、腹部から陰部にかけてのひどい浮腫、全身の倦怠感、四肢の痙攣、この病氣独特のこの症状は深刻に私も悩ませる。

連合軍の空陸よりする立体的な攻めは、昼夜の分かちなく、病院の斜面に迫進してくる。脚気など死ぬのは嫌だ。私は悶えたが幾らあせってもどうにもならなかった。野戦病院といえども本部勤務の私にすらくわてやる薬物すら無くなってしまったらしい。同僚の黒田伍長がビタミンだカンフルだといろいろ立ち回ってくれた。

れはレストケースだと考へる程に冷静をとり戻した。
黒田伍長の親身におよぼぬ誠意に心いて私は移っていく氣になった。
頑健な黒田に私の装具まで持たせて私はただ歩くだけ。というより彼に
より掛つて移動するといった体である。

悪臭を放つ友軍兵士の屍体は、こゝかしこ何百何千と連なっている。腐敗
して溶けているものもある。やがては自分たらし、んな姿体で死して腹のあたり
からどろけていくのだらうか。

嘔吐をさそう臭氣が行く先々をこにしえ満し体の中にもでみ込んで
来ようた。黒田は重い荷物と月魚いながら、なおかつ私を抱えるようにして
支えてくれる。

奥州平泉によつて紫骨を誇つていたサ藤原秀衡の使者、いわゆる金売
吉次にとしなわ水で奥州へ落ちた義経をさへ吉次から、こゝうな
献身は受けなかつたではないか。ふとそんな場面を連想し、黒田を指
まんばかりの心境になり、終には、水以上、この吉次に迷惑かける。是非
を考えてみる私であつた。
黒田は第四十八飛行場中隊付下士官であつた。熱心な勤務と敏腕を
買わね、このネグロスFlie (Tyson Heston) 野戦病院へ搬擧されたも
のであつた。病院勤務者中、他には特別に親しみ合える人物もないまま

黒田だけが友であつた。彼は私に親しんでくれた。私達は何一つ対すること
なく、恰も兄弟の如く励まし合ひ、扶け合ひして食欲なドブさん(斎藤少尉)と
対抗して来たのだ。しかし今、この私の罹病によつて、随分彼黒田伍長に思
慮を受けてきた。黒田の一挙手一投足に至る迄、申し訳ないと思う。他人の
親切好意に殊の外感動を覚える性分になつてゐる。

紫骨失調症(軍隊での教育期間中一言も耳にしなかつたこの病名に、病み
細り、今にも消え失せようになつた私に、再び立ち直つて大恩ある黒田伍長に
報いる時機が到来するのであらうか。

完全に衰弱した体、心臓のペースメイシの激しさ。まるで足腰が
動かない。這うようにして進む途には、深淵の坂あり深い溪谷があり、そして急峻な
極まる天神山の斜面が連なつてゐるのだ。

雨が止みになったかと思へば、露臭と一言(全く全く蒸りを合人だ不透明で
乳白かつた霧が横なぐりに吹きつけ私達 同行三人をすつぱりと包んで
しまふ。

体力にも限度がある。体はもうこれ以上続きそうにない。(黒田は重い荷物を背負い
続けた。済まない、帯皮に縋りつてある手榴弾を解いて試みるが駄目だ。
黒田の警戒心も厳しい。二人のうすどつちかか小用する時をさえ、彼は私を

一メートルも離さないのだ。杖代りにしている刀も、手榴弾も受取らずに、
暗に決意していた。自決はこの道中では決行出来そうにない。私自身の
体とはどうも思えぬ。体に鞭を打って辛うじて天神山の中腹、脇天神に
辿りついた。任務は重し、死は軽しの実践といふ言えよう。私にとつて、運
にとつて、いふ言ひ得て真なる形容である。

病弱の私は勤務は出来ない。すでに先発隊が組み立ててくれている幕舎へ
私はただ一人が入った。

この道の道中、全行程、屍の中を歩き、這いつくけて来た。この道はまだ幾多
の死体を横たえながら、ずっと奥地まで伸びているようだった。

が、この脇天神に、三休攻車は迫りつつある。空襲と迫撃砲、そして
もう侵入して来たらしい。迫撃砲の射つ自動小銃、カラバインの音、そして
騒然たる戦場の様相である。私達とは、こゝまで追いつめられている。

迫撃砲の角度をこゝろに変えたり、時おり、その弾丸が炸裂
して火花を放つた。鼻を突くこの硝煙、その硝煙は空間を埋め、物
に定かに見えない。もう何処にいたって、最前線にある。

こゝに收容された傷病者の訴える苦痛の唸り声、そのまま測候機に
よつて捉えられ、この病院の所在が発見し、直ちに攻撃目標となるのだ。

その夜、私は瘦せこけた自らの左腕に注射針を刺して、横になったが、心
臓の鼓動は激しく高鳴り、不気味であった。やがて来る死期まで、心
のなかを整理しておかねばならない。

翌日も連合軍の兵器は多くの弾丸を打ち出していた。雨は激しく降つて
いる。

運田は次の病院設置地を探索すべく、病院長に随行して出かけて行
った。天神山方面へ行くとのことだったが、彼の上衣はびしょびしに濡
れていた。私、私の力を借りて出て行った。

本部の勤務者である馬場曹長は、もう一ヵ月以上も防空壕へ入った
きりで出て来ない。その顔さへ入る程である。病室やササ室から
の連絡や照会にさえ、口先で応答し、指示を与えるばかりになっている。私
は、馬場曹長を批判する資格はさうさうない、とは勿論である。

雨のせいで減る幕舎の下で毛布にくるまり、まや、尽ききんとしている
二十三日、六月の自分のいのちを哀れ、と愛しいと思ひながら、病を
展びていた。

と、突然、北斜面の幕舎附近で銃音が放たれた。その刹那、もしや

148 殿には入院された長老台ではじめてお会い出来たんだが、実に惜しいことを
した。実に私の方だった。私は人知れず私淑していたんだよ。
「これまで話すと、五月上旬の雨と機銃掃射の激しかった夕刻が私に舞えう来た。
担が込まれた担架の人、刀削り後の入院は特に私が受け付けた。病院へは
入院患者二人について病床日記というカルテを備えておかねばならない。
その一、用紙の作製にあたり、隊長に私が彼の軍隊での勤務（勤務と同じ）
年数と伺った。隊長が「三十八年だ」と應えるのに驚いて、今回の年数
だけで結構です」といって返した。ことだった。すると、隊長は私に
「さうだ。現役で三十八年だよ」と言いつつ、改めた。改めた。改めた。
その隊長の壮重な淀みと、いかめしい母性録を刻みこんだ顔形がその
まま思い浮かんでくるのだった。
「お前たち、隊長殿の遺髪と遺留品を纏めたり、原隊を追及してくれ。
埋葬のほうは私が誰かに頼んで、鄭重にさせるから」と言っただのを思
い直して、「さうだ。埋葬は三人に任せておこう。見ず知らずの他人がするより
誠意で気心のよく知れた三人にして貰う方がよからう。最後の勤めだ。
心とこめて鄭重に葬り上げて上げてくれ」と言うところ、是非さうさせてください。
三人は嬉しそうだった。

149 相も変らず、迫撃砲は気狂い太鼓のように連轉き、渡っているが、幸いにして
観測機らしいものは見えなかった。こいつは爆撃機を呼ぶので仕方が悪い。
一時間経ってからであらうか。三人かやって来た。忠誠を励んだ甲斐
もなく、主君に先立たれた二人は孤児のようになった。
彼等の手には、隊長の遺品であらうか、大切そうに抱かれている。
二人は横隊になり、私の前でも不動の姿勢をとった。何れも四十才前
後、現地召集で軍籍に編入された陸軍一等兵である。
「報告します。」堅苦しいのは止そう。「はい。」髪はとてく小たか。
「はい、持っております。」
「本堂に御苦労だった。こゝは病院とは云いながら、最近はいかあたりを
焼捨山と呼んでいるさうだ。病院勤務の俺が脚氣兼栄養失調症になる
位だから他の者だって五十歩百歩だ。患者にさえ十分行き届かないこと
ばかりで申し訳ないことだ。しかし、これ、時流だ。君達も現地召集なん
だ。そのために一億、苦しむところがあるかも知れない。身心共に弾丸を
つけて、自らも殺めたり、殺められたりしないではいられない。本隊の位置に
目星は付いているか。多分、千六百二高地を越えた台東かバンダナウエイ
位かも知れない。俺に頼みなければ調べた方がいいぞ。」

隊長の死が彼等の心を虚しく砂漠にしたのかしら知らない。不憐れに思えてならない。つとめて優しく言つたつもりだつた。

すると、背の高い一人が、一步前に歩み寄つて

「班長殿、少しお伺ひした方がすか……」と、言う。

「何だ。わかることなら、」

「はい、今さっき、部隊長殿が亡くなられたお心がわかると云われたのですか……」

「ああ、その事か、私は先刻発言したことを思い出した。

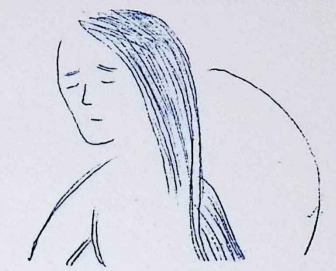
「大へん僭越ではあるが、隊長殿に代つて一言言わせていた、だ……」

「まさ君だす二人には殊のほかお世話になった。重々お礼を言つて感謝する。そして、このたびの私自身のフライングの

拳を相済まないと思つてゐる。日本軍は日本国も未曾有の危機に直面したが、私は一億玉碎などの声に共鳴して、このネグ

ロスの山中ですべての部下を救したくない。すくは時即が解決してくれる問題だが、この闘いもそんなに長くは続かないたう

う。先に心を山崩して、部隊長としての責めを果敢し得んことは慙愧に耐えないが、隊の諸君には、単なる血氣に逸らす。最善



を選択し、その都度処理をしてほしい。部隊の各位の健在を希いながら果てていったと伝えてくれ。すでに死んでいった多数の部下に会つて私の心を伝えることも出来よう。そんな心も働き、この道を選人でいくと伝えてほしい。以上。こつと言ひ終つたとき、この三人はまだ不動の姿勢のままでいることに気付いた。

「ああ、却免、悪かつた。休め、休めだ。もう楽にしてくれ。私はもう前部隊長をすくく敬申し上げているが、私自身はそんな儼然物ではないんだ。

私は周知したが、二人はカタルシスにかつたように体の硬いおぼろを解こつとはしなかつた。

「それでは道中を随分用心して本隊を追つてくれ。また今う機会があれば嬉しいけどな。」

「お世話になりました。今のこと、副官殿に申し上げます。班長殿のお名前も……」

「なかに身元を明かすほどの者ではない。ただ、島本工兵隊からここの本配付きとして来ている。涼へ入らない軍曹だと云つてくれれば少しは知

つてくれるか。しらん。いすれは褒賞するだろう。はつはつは、

……数か月末、こんなすかつたと思ひで笑つたことのない私だつたが、ここの

とによって全身に勇気が湧き体が軽くなる思いがした。それは不思議である。
三人は「それは失礼します。お体もお大切に」と別の車を挨拶にして
雨の坂道を登っていった。

十七 一身代り

その後、次の病院移転先の偵察に行っていた黒田伍長が帰ってきた。
「ただ今、どう気分は、」やあ御苦労さん。雨が強く大変だったろう。
「私は多才振りに気分が優れている。」
「ありかとう。藤松班長に借りた服が濡れになった。肩たまで乾かすか
らね。今日は病院長に抱えられた。いささか腹が立つねえ。」
「彼は幕舎の入り口で、濡れた帽子をしょりながら私の顔を覗き込んで
「すまんすまん。俺がええ気だった。黒田班長はかりに苦労をかける人じゃ
ないけど、お前に申し訳ないことだ。」はかない自分の健康状態をかえりみ
て、お前に情なかつた。
「俺は照国台を偵察した時、彼に頭をやらされたなあ。叱って、うまく口が
利けないから、いらだてて手が早くなるだろう。いいじゃあないか。黒田と
俺がうまく話合っている人だから。任官以来、二人俺を抱ったのは、あ
のドブさんだ。」

「とにかく藤松班長がよく、おうオッズ（odds 中途半端）のグループの一人だか
らなあ。仕方が悪いや。」
「私達も他愛しない。憂さ晴らしをやっているところへ、当番兵の安田一等
兵が入ってきた。眼を盛んにこすっている。すると黒田が目ざとくその水を見て、
「あうい。安田、お前泣いているのか。藤松軍曹が泣かす訳はない。その水と飯を
炊いているのか」と強次った。
「安田は眼も開けられないうちに、はい、両方あります。藤松班長が飯を炊け
といわれたので泣かされたのであります。」
「黒田は事情が分らないか。私は安田の言いかあかしとてどと吹き出してし
まった。」
「へええ。米がどこにあったんだ。それは嬉しいなあ。
黒田は子どろのように喜んだ。その水はすす。私達はもう十日余り米らし
いのを口に入れてないのだった。」
「黒田、今日はう前部隊長が自決したんだ。あの当番の二人可愛想だった。
俺も後の処置に力を貸したんで、隊長殿が残した米一升ばかりを全部
くれると云うんだよ。」
「全部もらったの。」

何日振りの食事であろうか。全く鼻を撮つまましても分らぬ暗さだ。その中で黒田と安田。私の三人の食事が始まった。左に安田、左に黒田が坐つての車座であった。せわしげに糺ただすする三人が、あつたか、うろたへ、ほど繁ひらくたつてきた。迫撃砲の発射音には神経を突つたせ、警戒を怠ることは許さない。

黒田一色の世界。車轉音の度にあちこちの一角から、パツ、パツと火を吐はいている。迫撃砲の弾丸に射しなけりばならぬからだ。

本陣はコンソリー峠らしい。かなり以前にコンソリー (Consolidated) ニ入る。墜落させた山の峠への名稱である。敵兵はそこを砦とりでにしてゐるらしい。数多くその峠付近から火を噴ふいている。トロン、トロンという発射音の高鳴る。前後には必ず稲妻のような光の線が漆黒の中から浮き出されるのである。

もう少しと、長い連日連夜のこと、格別警戒せず怖おそれもないだといは

なかつた。不感症にあちこちに入つたかも知れない。しかし、この夜は別であった。彈着点かなり病院所在地。脇天神の斜面に近寄りつゝあるのだ。

私たちは糺ただすすつていた。

「どうし今夜はあつた。目標はこっちへ変えらしたぞ。こゝろ私と言つた時だつた。コンソリー峠から発射された異様な音響音。

「おい、伏せろ。目標になつた。用心を促うながし、私がこゝろ叫んだ時、ヒューツ

を放はなつて炸裂したのだ。一瞬、目をつむつた。その目先へパツ、パツと光が閃きらき

と、か細い音の集あまるような音が聞ききと小たつた。」「コロコロコロ……」

不吉な予感に、漆黒の闇の中で私は呼よばある。

「黒田、おい黒田」「……」「安田」「はい」「おい黒田、どうした黒田……」

「……」「返事はない。」「……」「……」「……」「……」「……」「……」

「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」

「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」

「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」

「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」

「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」

いやや冷静をとり戻して私は黒田の点検にかかった。でも異状は見つからず、深い闇の中であらう一度息を吸い、静かに頭部、頸部、胸部、腹部と撫で下げていったが、分らない。北月部にもない。もう一度脚から撫で上げ、てゆくうち左胸部に穴があるのを指先でさぐり当てた。しかし、黒田の上衣は黒田のものを脱ぎ、私の上衣を貸したものであった。おかしいと考へて、指先にやや力をこめてまさぐると中指か、こぼつと言を発つて奥にのめり込むのだ。生温い粘液がその尖端にからみつく。ああ、やはり。

黒田伍長は心臓部に迫る砲弾破片の直撃を受け止め、その場で絶命したのである。

フライリピン国、ネグロス島、西ネグロス州、北東部、通稱脇天神において私が大恩を思ふ黒田伍長は散華したのだ。昭和三十一年六月六日午後、時十三分であった。岡山県内郡部の出身で味噌醤油を扱っている家の出身者だった。黒田の死は私も失望させたが、しかし、大義の義望を覚えるのであった。黒田、貴様、儲けたぞ。死ぬんだらう、既死かい、人だ。うん、この方がよかった。

私は闇に向かつて独り言を云った。もしたうはじめて涙が涙み出るのを覚えた。迫る砲弾はなおし身辺に炸裂している。今夜は弾丸の数が最高だぞ、と思つて、またしても至近弾が幕舎裏へ火花を散らして炸裂した。

時を同じくして、安田が私の幕舎になだれこんで来た。息せき切つて、
「何と云つたか、私の急ぎ込む間い、やや間を置いて、
「どうも済みません。明日の朝来るものとす」と、馬場曹長の伝言だ。
「どうして、なだれこんだらう、同じ本部の戦友が死んだというのに、誰も来なくはない。弾丸がこわくて戦友道の発揮出来ない奴は全部死にます。激しく興奮している私の怒りに、安田は自分か責められて、と感違ひした。かもし知れない。今の今になつて嫌な思ひをさせるのも気の毒だ。やがては玉砕して全員死に絶えていくかも知れない。生き延びているのも僅か間だ。だから壕へ入つてほしい。みんな思ひ思ひに行動してほしいんだ。――私はふつとそんなふうに考へるようになっていた。

「安田、お前も叱っている人じゃないぞ。今夜は馬鹿に逢つてみかひい。壕へもいって休むかい。」

「安田を壕へ帰して、空しい思ひだった。黒田の両手を胸の上で組ませていると、安田がまたやって来た。

「班長殿、今晚だけの壕の中へは、いったらうと、馬場曹長殿が言っています。との伝言である。」

「うん、有難う。心配してもらつて嬉しいが、今夜は黒田班長のお通夜だ。黒田も俺が居ないと、林しいだらう。俺は黒田に随分助けてもらつて、いるから、

160 彼と一夜を明かすのが義務だ。義理感情でなしに明日は埋葬だから
別水を惜しんで運田と一緒に寝るさ。安田は私の一徹さに買けたのである。詮れたような挨拶を残して引き下
がって行った。

「……脇天神へ来て病院本部の勤務者には誰にも会っていない。みんな壕の
中へ入りびたりだ。うう。運田と私はまだ一度も壕へ入っていない。考えてみれば、
うちらが常軌を逸しているかなと思える。しかし、壕へ入りびたりで彼等
等とはどんな生活をしているのだろうか。」

「もうかなり遅い時刻であろう。山の中腹斜面での夜更けは段々冷えて来
る。私は運田の体を横にして背中合わせに寝転んでみた。運田の体温はもう
とくに失せていた。」

明け方近くひんやり寒のため目覚めた。運田の心臓から溢れ出た血液が
流れにじんて私の背中をすくう。濡らしてしまつたためであつた。

翌六月七日、兵隊に指示を与え、私自身も瘦身に鞭打つて現場に出て
運田の体を埋葬した。何を伝ひたい葬儀であろう。

幕舎へ引き返して思い出してみると、葬つた運田の着けていた上衣は私の物で
貨物廠の下士官に与えるはずのサントミン錠が七錠入っているはずだつた。

勿論私の私物であり、それと煙草七本と交換すべく契約が成立してゐたのだ。が、
生前いかに親しかった運田とて、みほとけの存在であり、遙かなる祖国の神の生
に連なっている。その彼を握りかえして物入れ(ポケット)の中味を取り出すことし
出来ない。運田は恐らく笑つて許してくれはずだが、その水故になおさら私は詮め
の決意を固めるよりほかはないのだ。

運田の情死は野戦病院勤務者に伝えられたはずだが、病院内の下士官将校を
含めて運田の遺に祈りを捧げ、いまだには軍医の飯塚中尉ただ一人であつた。

千草、運田運田とこの名を呼び捨て、傲慢に彼を酷使した上官や上級者は運
田の墓地には振り向きをもしなかった。日本軍隊も地に墜ちたものがある。

走馬灯のように想い出されるかつて親しかった戦友たちが、愛おしい。
高い樹木から幕舎に落ちかかる水滴を聴いていると、木内一等兵がやって来た。

彼は高木隊出身でかつては私の先輩として勤めてくれたこともある。迫近砲弾
破片を趾に受け入院しているのだ。かゝる後の首傷なのか頬の部位から鼻孔
へかけて貫通した創を患えていた。その顔の創口から白いうじ虫が二匹

見えているのだ。驚いた私がその水を採つてやろうかと言うのに彼は断るのだ。
「うじ虫を飼育していると化膿防止になるんやせ」という。

昔は軽血を吸わせて病気の治療をしたというかなるほど粗糲に膿を吸わせる
のも現代的ではないか。一つの治療法かも知れない。

「本内腹が減ってや小人南、バゴドではよかったな」と話を向けると、本内は「あしげな追想のおもひで笑みをこぼすのであった。そして本内は班長、病室のテントは雨が漏るあかんすわ、何をかならんすかない」と愚痴をこぼすのだった。

「それはよくわかってはいるが、御夏の通りの姥捨山だ。何をしなうないよ、お前だけで此所へ泊りに来い。本部の連中は皆壕の中へ入って、黒田伍長が死んでしまったので、天幕舎は俺の独りだ。我々もいつ最後になるかしらんぞ。三人であれ、小話して夜を過すのも小気ななくなった時以來だ」と誘うと、本内は「その気になったのか、一先ず病室へ連絡して来るあ」といつて引き返したが、夕刻になると、松甚太杖をつきつき、本内へやって来た。何とはなしに四方山話に花を咲かせた。所謂「お前さん」といふへきお喋りで愉快であつたが、この間に天幕舎の周辺で幾度か追ひ至近弾が炸裂した。

「班長が壕へ入らん」といふことか、病室で話題になることがあるんやが、何を特別な理由でしあるんかいな。本内と離れて五か月経つていた、本内が私の心境を知らないことにはや

物足りぬものを感じたが、

「何とはなしに俺は死なぬという確信かな。強みだが、弱みだが、いつか頭にこじりついているんだよ。それか他人の目には特殊な存在に見えるのかな。」

「でも死にたくはないでしよ。」

「いや、後や中島、三好、三好、三好、黒田伍長、そして馬の合った戦友かはたばた死に急ぐものだから死んで不足はないと思うようになった。」

しかし中途半端は恐ろしいな。つまり即死できないで脚が切れたり腕を吹っ飛ばされたりした時の事を思うと、人並に弾丸は恐ろしくなるよ。」

「どうでしょうなあ。」

こんな会話をやりとりしていると、また追ひの攻車が頻度を増して来た。陣地はコンソリー峠付近だ。闇の中でパツパツと閃光を放つのが目を眩ましてよくわかる。

「あのトントロンという追ひの発射音を聞いてみる。あれを聞くと子とこの頃の故郷の秋祭りを思ふんだよ。まるで祭り太鼓のしやないか、ようでなつかしい。発射音が地味まで走って行くみたいよ。気が持たない、立てられてやり切れないよ。本内は毛布をかぶったままで、私の方へ思いっきりしかみついて来た。」

「木内、毛布を要復つたて駄目だ。う、削つたは、三置の壕の中で負傷したらしいよ」と私は笑つたが木内は言はう。
「しかし、負傷して以来、水以上あつ、う、傷つくのか、怖ろしくなつたわ。毛布一枚でし氣持すの上では乙なもんやな。救いになるわ」と大改弁で生口にするのだった。
傷ついた人には、さう思ふてあるが、いつの間にか私達は砲弾の散る中で眠りこけたらしい、とさうが、弾丸に怯えたのか三人は抱き合つたまま、朝を迎えた。しかし木内には、この事を口に出しては言ふまいと考へたことだった。
一夜が明けた。三人共命があつた。朝になつたが雨はまだ熄まず、三人が体と寄せ合つて、山の冷気の中では、体温さえ高まつては来なかつた。
木内は跛を引きながら小徑に出て、器用に松葉杖を使いこなし、自分の替金へ帰つて行つた。見送る後姿が何か影うつすように思ふのはどうしたことであらうか。

十八 患者輸送隊

脇天神の野戦病院本部前を通過した和手小隊に二日遅れて、倉本中隊主力が通つていく。最前線となった東太郎山、西太郎山の陣地を放棄して地獄谷方面からなお魚地へ入つていくつもりらしい。中隊長はいぬ、守井、長田、山中各軍曹も既に痩せ衰えてはいるが、意気

は、まだ喪失してないようだ。

「生田、どうだ」と指揮班の上等兵に話し掛けると、眼鏡の底に力力して笑

彼は、仲のよかった三人の死に、胸がわづかしく、氣を落として、私を慰めてくつろぐつと、

りなのた。こゝろを知らず、
「うん」といふ。
「さうして、
「林」の字は、
「しん」の字に
「木」の字が加
へてゐる。と、
教回をひく。
「うん」といふ。
「さうして、
「林」の字は、
「しん」の字に
「木」の字が加
へてゐる。と、
教回をひく。

淋しいしよ。彼は更に訊ねてくく。
「うん、淋しい。滅多に会うことが出来ず、顔が見えなくて。後が、中島が、そしてその他
の輩たちが生きているなら、いつか reunion する機会もあり、楽しみや期待もある
んだが、みんなが、こうして太郎山を捨てて、彼等の墳墓の地から遠去かつていくこと
を考えると、余計に心が疼く。さう駄目だ。せめて太郎山の現場で、彼等
の死に立ち会い、見おさめしたかった。私は自らの心を偽らず告白した。」

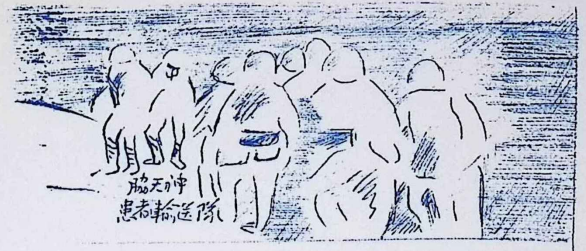
「萬治はとうした。まだ顔を見せんが。」

田中萬治ですか。田中らは吉本を担^かいで少し遅^{おそ}くくるはずす。しかしこの雨とこの坂道じゃ大へんですよねえ。

「うん大変だ。それで吉本はどんな風だ。」
 「たしか右でしたか、足を追で打ち抜かれてかなり出血してましたか。」
 「吉本といえばあのバゴの生き残りだろう。惜しいことをしたな。」
 連中と色々話を交えて情報を聞き取ったが、中隊長の「前進命令」が
 なかった。彼等と固く巡り合うことがあるだろうか。詮め難い別離の
 傷心か去来する。
 彼等の後姿を目で追ったが、山の小径はすぐ向こうで左へ曲がり、あつと云う間に
 視野から消え失せていった。
 雨を食んだ重苦しい空を爆弾が車轆、一しきり迫る砲弾が炸裂して
 また嫌な夜がやって来た。闇の幕舎でただ一人毛布をかぶったが、明
 日まで生きていて、そして命の約束保証の出来ない一日が始まるのであ
 ろうか。
 荒涼たる山中の幕舎で全くた一人、友もなく、食もなく、生も死し
 ないような安易な私になつてた。当分食物にはありつけようになし
 体は冷たくなつていく。しかし、手づいて掴まり歩きが出来るようになつて
 来た。幕舎の枕に掴まって立つてみる。木内に会いたい、行こうかと思つたが
 また胸騒ぎがひどく、とてし彼を病室まで行けようもない。

どうしたことになる、木内に会いたい、無精に会いたいと思つた。
 それにそのはず木内は脳症を併発してた。
 潮しいめまいのため私は木内をさへ見舞うことが出来なかつたか、その
 翌日（二十五年六月二十日）彼は神に託され昇天した。
 私は外科の勤務者に依頼して、私の幕舎に出来るだけ接近させて彼の墓を
 作ってもらった。
 当番兵として、友人としてよく尽くしてくれた木内である。
 彼独特の一反煙草豆は……の唄も聞くことは出来ない。ただ成仏を
 いたすに祈るのみだ。
 次ぎつぎと身内に先立たれることは堪へ難い無常やと思う。
 生者必滅といひ同行三人という、神と共に、或いは目に見えぬ仏と共に
 自らを置いて同行三人などと、納得し得る悟性は私の心に生まれてこな
 い。日々昏小にも迫る砲火の炸裂が数回あり、患者が四名も非常な死を遂げた。
 気分が優れないままに幕舎の中で転んでみると、誰か私を呼んでいる様
 思えた。二度、三度、たしかに私を呼んでいる。
 死んでいった黒田が、木内があるいは、う前部隊長が、黄白水の固から招んで
 いるだろうか。か、疑いもなくそれは現実の声である。
 幕舎の下の小径、傾斜のその下を見ると、恐怖を思ふす形相に変わり

「何れは一所しかなくて十メートル位の絶壁になつていて、ある下士官の話では、葛さへ伝つてありて行くしか方法がないらしいよ。また現場へ行つては田井という兵隊の話では、その谷には既に何千という友軍の屍があるやうだ。」「イッ付近は年から年中雨で雨の降り息みが一秒もない所だつてあるやうだ。」「人として持つてゐる米が三合か三合ではなかつた死にだ。まず第一吉本が明日に知れない重症になつてゐる。なあさうサ何か重いんだよ。細領大の独断の項を知つてゐるやう。言つてみよ、うか。」



「ソノ兵隊ノコトヲ独断ヲ要スルコト頗ル多シ。而シテ独断ハ決シテ服従ノ精神ニ相反スルモノニ非ズ。常ニ状況ノ変化ニ応ジ自ラ目的ヲ達成シ得ベキ方法ヲ選ビ以テ機先ヲ制セサルベカラズ。」「俺が責任を持つと、吉本は一先入院させよう。輸送して吉本はよけに苦しからうし、途中で若しものことがあつたらうとする。」「慎重に考えるべき所だ。」「雨は小憩みになつてゐた、時折低い雲雲が走つていくたびに雨の粒がバラバラと木の葉を激しく鳴らした。」「数日ばかりの雨であつた。涙を落として私も泣いてみたいと思ひながら輸送隊の決断を迫られ苦しんでゐるのだった。」「田中、お前はさうする。」「は、自分も班長殿の言われるやうに入院を受け付けてもらつたら」

「私は田中の考えを輸送隊全員に思ひのやうに解釈したかつた。中隊長には思ひが、この輸送隊の名を救う方法としても患者吉本の苦悩を和らげるために、これが最善だと確信した。」「確信といへばドイツの法哲学者ラートブルフによつて創設された概念に「確信犯」というのを思ひ出した。」「つまり政治、道徳あるいは宗教上の信念から自分の行為を正しいものと信じて犯罪を犯す場合を云うのだが、私は確信犯人となつて中隊長に非難されることも破廉恥な行為ではないのだ。」「患者吉本に遇してはくれよう。」「患者を病室へ搬送したら、ミへ戻つて三十分休んでいけよ。」「病室へ患者を入れたら行は、私の幕舎前まで帰つて来た。長い間の悪戦苦闘の果てに疲労困憊しなあかつ、飢餓に迫られ、死の形相がそのれ、首の上に懸かつてゐるやうだけの姿なのである。」「この時、田中萬治は肌を赤えて、湿気から守つてゐた煙草の葉を胸のあたりから掴み出して私にくれた。」「田中と私の出会いは今日でいう七十日振り位になるやうだ。」「以前、私が夢に見たあの姿、そのまゝ、髪はぼうぼう、鼻と垢に埋もれた顔と顔が思はず泣けやうになるのだった。」「しかし、こうした歓喜のひとときは、その月後に予定されてゐる別離の哀しみ

を決定していなければならぬのだ。またや追軍砲が唸っている。
日の暮れないうちに一刻も早く出発させなければならぬ。素直の旅人
たちである。

「会うは別れの始め」というが、別れは会うの始めと逆説的に云えるだ
ろ。道中十二分に気を付けてくれ。追に気をつけて、途中で食えそ
うな物があれば、何だか食うんだぞ。
変な別れの挨拶をする私であったが、果たして連中と面会することかあ
るだろうか。
身軽になった八名は、それぞれ小銃に挨拶の言葉を残して、幕舎から離
れていった。
時折り、振り返って軍帽を振る彼等、自らを生白す小銃は、ただ一つの希
望を繋いで待ち侘びていた人たちだった。
それはや、この世界に待つ人はいないか、知れない。語り得る友、あるべき人は
一人として私の周囲には残されてはいないであろう。追軍砲は鳴り続けている。

十九 孤 独

今、今まで、島本隊の兵士たちに会える、田中に会える、と一縷の望
みを繋ぎこんでいた。もうそれのみか生き甲斐であったはずなのに、さて、彼等と
会ってみると格別の話し合いさえ出来なかった。彼等の少女が木陰にかくさ

れてしまうと、胸の底が痛む程の
一夜が明けると、山に辰次は吉本正敏も死に絶えてしまった。中隊の行動から
途中で落伍したという小松忠臣はどうなっているのだろうか。せめて此所まで
来てくれればと時折り思う。砲の音に明け、砲の音に暮れる夜の闇、その
闇の中の幕舎で、金くた一人。ますます暮る孤独感に救われようもない。
一方、連合軍の拠点からは日本軍に対し、盛んに降伏をすすめる放送がなさ
れている。

「両手を上げて何の心配もなく私達の前へ来なさい。日のよく出たる場所、特別な
待遇とします。云々」と流暢な日本語だ。多分日本人二世の米軍人が話しているで
あらう。

彼等の報道する通りに日本軍の崩壊は時間の問題かも知れない。
比島に戦いは特攻隊員が活躍したらしい。私の掴み得た情報ではその命中率は
二六、ハ、パーセントに達するといわれた。ハルシー海軍大將は麾下の将兵
に対し、日本軍の特攻機はわずかパーセントの命中率しかないから、恐るるに
足らずと豪語しているとか。
しかしアメリカ軍は日本軍の特攻機の威力を減殺する方法を見出したらしい。
大型空母搭載の戦闘機は各母艦ごと五十四機を七十三機に増加したようだ。
そのためには母艦搭載の急降下爆撃機と雷撃機の機数は減少しなければ
ならなかった。たかシイテ海戦以後は海上で日本艦隊に遇ったとしても

シアリアスイルニス、ヘルプミープリーズと云うんだ。覚えたかい。

「それは何という事です。」

「重病だから助けてくれ」といふ。と、いう意味だ。落すつて云うんだ。私は自分の立場を云い、いふでない。人の立場の両方を教えた。しかし、その夜、気早い患者が、教が所で手榴弾を爆発させたのを聞いた。その都度、私は、お前たちは偉い、成仏しろよと合掌し落涙した。二月の中旬に入った。いよいよ次の中継地、天神山へ後退する日になった。うすうす、雲田、木内、山口、吉本たちの眠っている、この山の斜面を去るに、強い抵抗を感じた。うすうす高く盛られた友達の墳墓、その塚に深い祈りを捧げて、握くと、繁みの裏葉を白く返して吹く風が冷たく頬を打つ。木内、お前は早く死んだ。小泉が死んだ。あの晩、俺と一緒に死にたいと云うた。俺は、お前は早く死んだ。小泉が死んだ。あの島では死ねそうにないよ。バコドの医務室で、小泉を火葬にした一月二日の晩、成田さんの護符を授け割ったとき、四割が当たって死ぬだろうと言った。神や仏は誰の心の中で磨き上げられていく、良心みたいなものだ。お前の言う神が存在すれば、神風を吹かせるだろうし、お前だって死ぬほどの傷を負わなければならぬ。木内、お別れだ。瀬戸の音へ帰るのか。俺の所へも遊びに来るかい。

眼に見えなくても、私の前には彷彿として木内が立っているのだ。

雲田、私の胸の中に生きてる。彼の墓前へ先日さしてやった比島田サナは、今も早緑の生きのよきを見せている。かどうしたことが一枚の草に落ちて、かかった雨水は中心の一点に集まらず、あたかも二つの眼のように、二か所に分かれていた。お前はまるで決別を惜しむかの様な眼の形に見えるのだ。お前、雲田、岡山へ帰った。醬油屋の若旦那で、おさまるんだ。俺は、今から天神山へ出発する。お前が偵察して決定した天神山へ、お前が行かないで、俺が独りで行く。悲劇だよ。あちらへ移った俺の幕舎へ、日亭旗を揚げ、それが目印だ。何日経ってもいい。待っているから探して来るんだ。いや、失敬する。墓前で正破な岸手の礼を行って踵を返した。私の目の前には、一条の光明さえ射し込んではいない。山口辰次が、三、残して逝った言葉。コマツがクルカ。イツクルカ。を信じ、中隊に落伍したらしい。小松忠臣を心待ちしながら後を振り返り、振り返り、天神山の斜面を登っていった。道中、山の斜面には深い霧が閉じ、いつになく霧が重なるか、全く見当はつかない。追連砲弾に仆れた者、栄養失調症で死んでいったらしい兵士、屍は行く小径の両側へ、何百何千と並んでいる。悪臭が鼻をつく。

螢が無数に滅滅し、生きている証拠を見せつけるようだった。一瞬に濡れた
木々の葉が草や花に月を返して、美しい時たま地上の骸骨の入
れ歯らしいものが光ることもある。

「ウオツタビニエール、シーナリー、イニス」 私は印度カルクタの二がらブラ
ザーズの社長と神々の港祭りの夜景を見て、錯覚を伴って

「何ときもない光景ですわ」と独り言を云ったようだった。
我に返ると、夥しい数の死体が散乱している山中、腹まで上って来ている。

と、その時、うす紫の天空から繁みを背負いてピカッピカッと稲妻が駈
け抜けた。トントコンという発射音を聞いたと思った刹那、あたり

をゆすり、地を裂かんばかりの大音響音が車轉き、そしてその後、空しい
硝煙の香が生臭く鼻を突く。空中高く飛び散った土塊が私の全

身に降り注ぐ。元の平穩に居たのを確めて、ゆっくりと上かった
私の由堂に迫る砲の炸裂で散った無数の木の葉が固く固く

握られている。こんな負け戦が一方的にいつまで展開されるだろう。

二十 脱 出

雨鳴り渡る迫る砲の弾又を逃れて、元の幕舎に戻って来た。日章旗も

どうやら無事だったらしい。夜更けの山間の凹地は底冷えがして毛布一枚ではと
ても眠れそうにない。先ほどまで母親を呼び続けた患者の者はもう聞い
ておぼろげな声か、絶命して黄泉の国へ赴いたらしい。どこかですんでいる

その翌日、野戦病院では下士官以上の勤務者に集合があった。

「この闘いには勝てない。希望的観測は皆無である。日本軍は、十パーセン
トの兵力を失い、残りの人員は銃丸や下砲弾の中で戦傷と飢餓によって

戦闘能力はあらか生な能力さえ失いつつある。我々病院勤務者は戦
闘のための要員ではなし、すでに医療器具、薬品、消耗品は皆無だ。

食料に至っては知るところ通りだ。病院としての機能は果たし得ないのだ。

同じ敗戦の憂き目を見るなら、これ以上の困苦欠乏に申訴する必要も
ないであろう。せめて、特殊勤務の野戦病院だけでも纏まって降伏し

ようと思う。というのだ。

私は考えてみた。投降、白旗を掲げて敵軍門に降る。いま患者の数は
何名に上っているだろう。病院長の苦惱は解らない。常に兵団長の

意に添わず、その責めを感じて自決したとまで導をされた病院長。
私は一下士官であり、大所高所から判定してとすらが是非はつけ難い。また

184 部下をこれ以上殺傷させたくないという意図はあるが、しかし単独降伏には賛成出来ない。失った戦友、同胞のことを思へば、尚更のことだ。

多数決の原理は、他に求め得る条件の可能性さえ否定し、その決議法を唯一絶対の処理の如くに錯覚させてしまふのだ。私一人の反対では如何にもなし難く、遂に当面の敵米軍へ単独降伏する旨の決議がなされた。私は少なからず動揺した。蒼き糸えを喰って敵に降るのとは、き戦友に討てた道義が通らないのだ。そうだが、ひそかに脱出するより外に術は無い。

七月一日を期してするという投降説は、動きそうになつた。ひそかに装具をまとめ、脱出の時機とつかつてゐる。二十日六月二十日の深夜、バコド患者療養所（第十四方面軍）から野戦病院に移行した。岐阜県出身、額領伍長と元旅団作業隊からの和歌山県出身、鈴木上等兵、三名が私を訪ねて来た。二人は、私が野戦病院の投降を拒否して別行動をとるものと察知して、一諸に行動させてほしいと、たつての懇願である。

昭和三年六月二十九日 脇天神で死に絶えようとしていた私の新たな出発の日だ。その朝未明に目覚めた私は、谷底へ下つて行つた。あたりが冷気の中、前夜までの不安は全く消せ、確固たる意志に統御された心境であつた。飯盒へ一杯清水を掬つて幕舎へとって返した。

同行とせかんだ鈴木、額領の二人は私の幕舎で泊つてゐた。二人を起こして私は合図した。

「おい、いいか。今から脱出だ。低くはあるが力のこした言葉、へうなすき、その顔に決意の色を見せた。

「これを飲むんだ。結合の血だ。私は真顔でさう云つたが二人は慎重な面持ちで、それを口に盛らした。結合の水を口へ運んだ。私も乾いた。これから先々どんな苦難に直面しようとも、めげず、互いを割らぬ結合の血なのだ。

僅かばかりの所持品を背に、記念すべき行動への第一歩を踏み出した。しかし何処へ行つていふという確固たる予定はないのだ。バコドと英語を中心、何と現住民との意志の疎通は可能だろうと、いつ安易さはたしかにあった。或る場所へ出てある人に会い、さす小ばという特定の人物は十数箇所に目星はつけてゐる。虎穴に入らずんば虎児を得ずとは、言うが事実命を張つての大冒険にはすかないのだ。

一箇目のこと、最も難事ではあるが、南まわりで、それも大きく、干回してコンセ、シミン、椰子林を目ざす。夜の闇にまぎれ、ドリサイの某氏を、バコドの某氏から某氏に取り次いで貰ふ。しかし、どう問屋か卸すのか。

道々 到るに横たわっている死体、そこから発散する臭気にさえ馴れ
 ている。山径はかなり歩き詰めたようだ。第一日が昏小ようとする頃、
 樹叢蒼たるジャングルを抜け、やや展望の利く林にさしかかった。我々は木立
 のあちうでぬくと突立っている一人の人間を発見した。ギリリとする衝
 動の後次々に変わった。鈴木が「どうもオーストラリア人らしいです」と言う。
 数十メートル距離はあるが、しばらく注視をしてみると、髪は髪し延び放題、
 まつている衣服はかなりお粗末だ。たが米軍の一人ではない、しかし
 色が真っ黒いのはどう判断すればいいのか。濠州兵か此処まで来ているとし
 考えられない。現地のヨサツ（敗匪）でもないらしい。
 鈴木、あれは日本の軍人だ。間違いないし、責任を持つ、俺について来い。
 私が先頭を切った。そのあたりだけ木立すう少ない台地に立っているのは
 日本人の感いだ。一体、彼は何と返事をするだろう。なぜこんな場所に
 独りでいるのか。私も好奇心は逸った。
 「どうですか、私が聞いてみた。もしなら、どうやら行きますか」とはつきり
 した日本語で話しかけてくるのだ。この謎の人は航空隊付きの曹長だった。
 この道中で日本人に会うことは嬉しい。相手は素人だ。不思議にも彼
 は、米や銚詰など食糧品を多く持つており、おまけに煙草もマツチも

持っている。部隊の仲間と後退中、迫撃砲弾の破片で右足半月を挟まれ不甲斐
 なくも隊列を離れたのである。
 彼は創のため自由な歩行は無理なのだ。六航連の部隊が張り巡らしていた
 電線の被覆部分をはかして、それを火を起し、炊事など熱したりしている
 とのことだった。それでよく理解が出来た。彼は炊き火の煤でいふされ
 た顔を洗いをせず、死を待つ訳でなしに戦勝というただ一つの奇蹟を待
 ちながら生き伸びているのだ。
 彼の依頼を受けて、私達三人はあちこちから百メートルばかりの電線を
 たぐり寄せ、彼に与えた。おれは米を何れも上げましようとは云って行く
 のだが、食料をせいい受けることは、彼の餓死の時機を早めることになる。
 犯罪だ。彼の定背を治療し、若干の繃帯材料をよそえ、その代償と
 して煙草の葉っぱを三枚しらい受けることにした。
 少し煙草とは遠ざかっている。バージニア煙草のようにすばらしい色香のある
 逸品だった。もう何十日振りだろうか。少し振りに味わう本物の煙草に私達
 はまるで夢見るごとく、陶醉するのだった。
 「いいオーストラリア人でしたわ。耳元で囁く鈴木は言葉に私達は大声
 を上げて噴き出してしまった。名残りは尽きないが、彼に、激励の言葉を残して出発した。

煙草のせい、頭がくらくく様だ。道々の屍の群小に小松忠臣の体付きのものを探してみたか、こんな多くの数から見付けするのは大変である。

やや下りになる傾斜を進んで行くとき突如として大の遠吠えが聞こえた。一匹ではないらしい。近傍に民家のあろうはずなし。矢張り米軍の軍用犬の標である。大樹の根に腰を下して時を稼ぎ様子をみることにしたか、その希き者から察して大の位置は一向に変わっていない。予想もしなかった伏兵の出現に、息気をそかれたか、その時鈴木が手榴弾を投げる格好をしたか、私は首を横に振って彼を制止した。たとえ大敵を殺傷してもその北月後には幾百幾千の兵士が攻囲をかけるにすぎない。

調子だと、この予定路は危険らしい。命を惜しまぬは兎に角として、今我々が止図し実行に移ったこの結果を見たのである。

全然予定を変更してネグス州に入りサンカロスあたりの海岸へ出てみる。面白。友軍の一部が海水を汲みに出かけたという事、例し聞いているが、そのあたりには知りはなく地理も皆目解らない。だが、裸一貫危険を覚悟し、これに討とう不安や怖れさえ統御すれば、三人はどの部隊にも所属しない、風来坊なのである。

我々は何いしよく相談する。この割合迅速に結論を出すようになった。

結構サカス方面の米軍のいない、西海岸を目標する途中、誰かに会って得る情報によつて会議を行うこととし、さしあたり元来た道を引き返すことになった。

189

しうすつかりあたりは暮れている。追軍の発射音、砲弾の炸裂が茂みに木霊をたたく。雨の中、びしょ濡れの全身は悪寒にふるふる震えるばかりだ。いなかで天幕をつなぎ合せて野宿でしなけりばと思つて歩いてゐる。大い歩けば、標に当たるといふか、何たる幸運か。少し狭くはあるが、どうにか三人が入れ、空積の山小屋を発見したのである。屋根の下で休み得る。何れ月振りのことだろうか。しかし、床に敷いてあるアンヘウの下に、合に足りぬ少量ではあったが押し麦を鈴木が発見したのである。

運入世間長から世間た煙草を喫い、麦粥を飲み、定に恵まれた一夜も過ぎ、朝を迎えた。

一枚の地図さえなく、食糧として全然持ち合わせはない。これから先々の苦難をどの様に切り拓いていくのか。他人の話を思い起しては、撃き合わせ、一つの指針とするより外、あるべき方策はあるまい。私達は今日一日への不安と強く対決し続けることに、総力を傾注し、結果しなけりばならぬと思ふ。

友軍の屍体の悪臭が、到る所山肌に蒸気返っている。鈴木が拾った麦で作った糗を食ひ、煙草も喫った。装具を背に出発した。軍用犬に

だろ。フルセーション（鼓動）はまるで危機を生ける信子の赤だ。
 頭顱のあたりへも同じ速度で伝わり血管がこきしめて破裂しようとした。
 手足は完全に冷えきっているが胸のあたりは燃えるような熱さだ。この灼熱
 のボイラーが冷却しきるとき私の体の活動は終局を告げるのだ。私が死ねば
 頰縁や鈴木はどうするであろうか。私の屍を乗り越えてただ一本の泥濘
 の道をか弱い足で山をいくのであろうか。
 指先へ響く脈膊と頭顱へ感じる血液の流を申し合わせたかのように昂ぶつて
 いく。どうしたときか、別カ流水が私カ体内に伝導されてくるのではないか。
 耳を澄まして疑えば疑う程全然別個の聲音が伝わってくるようになった。
 おかしな一本全体その音響が源は何であるのか。
 「サーツザーツ」断続的というべきか確かに二耳へ入ってくる。固唾を呑んで
 息を止めてみては矢張り心臓の高鳴りとは異った一つの規則を保つた
 響きか聞こえることは確定だ。どうもどうも先の方から起こ
 ってくるかの音なのである。
 かばつと撥ね起きた。衝動を意図的に押し鎮めて寝返りを打つて言った。
 「鈴木耳を澄ましてみろ」頰縁に何か聞こえはしないかと、私は別な表

現で二人に注意を促した。
 「本當に何かスコールみたいになんて言いますよ」と鈴木。
 「何の聲の降ってくるような音ですか」と頰縁伍長の声。
 「まあ似たようなことだな誰かに聞いたわけ、この島に……そうだと友軍の命
 名した地獄谷が近いんだ。あそこはガイザースの音だ。そうに違いない。
 ガイザースって何です」「歌の音、つまりきまった時間をあいて噴き出す温泉水の
 ときと私が断言する」と。
 「班長殿は不思議ですよね自分が行ったこともしないのにまるで予言者みたい」と私
 「今更にと言いますが、野戦病院が銀杏台にあった頃、斎藤少尉殿が、藤松といふ
 男は俺の言うことには大抵従ってさういふしうしたらどうかと云うんだ。結果として
 藤松の予測した通りになつてしまふんだよ。あいつは俺以外の者に対しては人
 としてさういふ理堅くて記憶力がすばらしい。それに運がつかつてこの砲弾の中
 壕へ一回も入らんのに和我一つしなくて安然としている。神戸にいる時、数えの十八
 日に通訳をしたり大學生に論文の指導をしたというやあないか。ひよつとしたら
 あいつだけがこの戦争に勝つような気がする。この戦争中あいつにくっついてこれ
 は絶対大丈夫だよ……と云つてましたよ。
 「おいおいそれじゃ悪いことなしやないか。はあそれ、一人だけで脱出するつ
 もりの俺について来たのかい。私はさし振りに笑つた。

194 班長「ういやないですよ」と異口同音で三人は否定した。かきろろ人そんな
 事と本気に考えた訳ではなかった。
 嬉しく有難いことであろう。そして私は心から彼奇藤少尉に買けたと思った。
 なせなら私は彼を上級者として立てて来たつもりだが本心から服従は持たず
 心ずいそに軽視していたのだ。彼が私でなくても第三者をかきで褒めめをす
 という美徳を見えていたことには、私なことであり、私のためでなく彼のために
 祝福すべき慶事であると思いつく意味で嬉しい思いがしたのであった。
 「それでは先ず奇藤少尉殿と彼う言を伝えてくれだ。額額伍長に敬意を表明しておい
 て、今の燭でに乗ってまだ見ぬ地獄谷の姿を説明してみようか。三人のうち俺
 か一番心身の疲労を持っているうで、少くも此でいってしまいたいかな。
 俺は、このネグロス山に温泉が湧き出している。谷間があることをバゴロドのシ
 ベリアンに聞いていたんだ。そして山口部隊の下士官にヨサッへ討伐のときに行きた
 という温泉場や湯の川が流れていることを聞いて知っていたんだよ。とにかく、
 屋々たる歩みながら九四日東の方へ来たんだから、あか言を耳にして、もしや
 と見当をつけてみたところだ。これが種明かしだ。人々は予言だが、その
 谷間は千や二千の屍体がかかっていると思ひ、みをつけている。その現場で
 発狂しないように十二分に精神を練磨しながら行くに、確かめてみるかし
 進んでいくうちにゴロゴロツという凄しい音は次々に近くなってくる。



バゴロド在住の頃ラットオブエイティーン（十八才の若者）と自稱したコン
 セプシオン（マラタ夫ノ弟）がスパ（温泉）付近に山猿がいるという話を
 してたように思う。フレンティという表現をしたので天山いるか、知れない
 一匹、手榴弾で炸とせなしたのか。そんな夢みたいな、重小を抱いて
 みる。和手い隊中隊主カシ田中達もみんな、この道を通って地獄谷
 の温泉場を通過したはずだ。一刻も速かにこの場所へ到達して、みたく
 いふ思いが切実になってくる。肩へ喰い込む背裏しさほど苦にならず、何か
 喜悦の最中にさえ入っていくように足は軽くなったように思える。は不思議だ。
 い（へ）行って、常には友軍の死体はいるいと連っている。この無気味
 な小径も、夜の暗さが、霞い尽くしてしまつまで、歩度も伸ばして、
 三人だった。

三十一 悪 魔

195
 小径は、断崖絶壁によって断たれている。その尖端から見おろす、
 溪谷が、地獄谷である。谷底から吹き上げる、風が冷たい。
 右手の茂みは、神秘を色んで、霧の中、蹲まっている。白い色の
 水が、たまる、淵の中、不気味な、静寂を上げて、いる。は、間、端、
 泉の噴出口である。うが、まるで、地獄をのぞいた。

その深い谷底まで延びていらい、葛が一本、頭上の巨木から垂れ下
つて、何処へ行くという後退する。それを頼みの命綱として、ぶさ下
担架輸送を免れ、幸運だったと云えよう。
葛へ腕と脚を絡ませて、この断崖を器用に下りねばならない。十三分な
注意を払って、とに角下へ行かねばならない。それ以外に谷底に下り
るための人為的な工事は何も施さずにはいない。死にもの狂いでとにかく三
人は谷底に墜りて来た。

何たる光景か。彩しい友軍の骸骨、雨風に曝され朽ち果てた幕舎の
下で何百と並んでいる。まるで髑髏塔だ。迫る砲の破片がその小を爆弾の
破片によって裂かれたものか、幕舎の破片から谷の風が蕭々といふあたりに
流小にむ。谷合いに反響する雄壮な大音響と、空しい白骨群の対比を
いかに形容すべきであろう。無常感に言葉もなく、すすり泣くみである。
人の世の醜さと尊とさか全身へ透徹してくる思いで襟を正さずにはいら
ない。鈴木も顔も頭も重く、掌を合わせ深い祈りを捧げている。
相も変らず温泉の噴き出す凄いと反響は、また新たなエコーを伴って互いに
反響し合ひ、まさに地獄谷にふさわしい凄惨な、醸成しているのだった。

二人も同じ感慨に耽っているのだから、奇妙な姿勢で佇立している。
「さあ、先へ進もうか。三人へ声を掛け谷合いに歩を進めた。老なく屍は累
累と横たわり、悪臭が漂っている。新しい死体も数体見える。
湯気を上げながら、谷底を流れていく褐色の川。その濁水にも無慮数百と
あるだろうか。みじめな姿に変わり果てた同胞の最後、川底に沈んだもの
あるか、浮上したもの、流小動くものもある。全裸の者、上半身裸の者等々、
見渡す限りの屍の数。

老い出すこの標相に、固唾を呑む私達であった。生温いこの川底に、ヒューア
種の怪鳥が棲息してあり、死者の体を、膝間のものに穿るまで咬り尽
くすという事を知り、身の毛も逆立つ思いをするのであった。

乏しい時の流水が移った後、鈴木が切った口火から私達はお互いが生きてい
る確証を得るのだった。しかしこの場面はまるでこの世の生きた地獄でもある。
「悲惨ですわね、これ以上の惨めさはないでしょう。班長殿、この実態をど
う説明したらいいですか。

「さうだな、どうせこの人達は傷ついたり、栄養失調などで行く先の長いこと
ではなかっただろう。過労や空腹、あるいは脚気、赤痢などという人々が
ここを通り、おいての水は温い水とばかり次々に入ったんだろう。湯から
上ると雨は降っている。雨に濡れると悪寒がする。もう少しもう少しと入って

人間の運命は神の配慮で決められるかどうかわからない。奇妙である。もし
 幸か右の希望金地への道を選んでいたなら、追分峠に至り、当時盛に
 出沒していた追討、つまり同じ友軍兵士でありながら日本軍人の食料や衣服
 を盗み、あるいは殺害してその肉を喰うために組織していた強盗の群衆に
 出合つて殺されてしまったかも知れない。どうであつた。

私達はまた歩き始めた。この国での雨期は二月から十月と聞いている。雨期に入つてはいるが、何と降ることが。條突く雨に手足の皮は剥け、心身は疲労が極みに達している。肺然と降る雨は私の背を走り、渾へ流れ込んで来る。追討砲の音は遠くから、空中からの爆音の時たまにしか聞えなくなっている。風が方向を変えたのか、地獄谷からの車轡音は耳につかなくなっていた。次の難所は千二百三高地への急峻な坂道だ。連日の雨、雨のしるし、高い山中の、この寒さ、たのたのた震えるばかりである。震えは、何とかならないのか。泣き喚きたい。一周間、何と喉頭を通つてはいない。依然、早鐘を突くかの動悸は耳の周りに高鳴り、心臓のしるし、熱く痛みを伴っているのだ。もう限界だ。このまま息絶えるかも知れないと、幾度か死を予想しながら這上つていく急傾斜であつた。あたりの樹木の幹には真っ白い徴か一面に這いつくばっている。その樹木の根元に伏す死体の数々も、這上る雨水の流氷に溶けて流れているようだ。

何とひどい雨であらう。モリムンが作らしたか、この様な雨をテーマに書いた作品を讀んだことがある。人間の身も魂も奪いながらなかつ肺然と天空から落ちてくる洪水でさえあるのだ。

希望も信念も失せたまま三人は山の頂上まで這上つて行つた。二体の屍が腐つて漬水かけている山頂で、ずぶ濡水の天幕を敷き合せて小枝にくくりつけた。日は完全に昏く、水は上一步に進め、そうになつたからだ。

こんな事態を想定して、脇天神、当時から持ち歩いていた板の切れ端と、ゴム布へ包み込んだマッチで火を作り、暖をとることにした。

生木を割りながら、林火、火を太めたか、体の芯を暖めるまでには長い時間を使った。地獄谷の屍体の間を跳ねていた小さな蛙をつかまえていたので、一匹ずつ分け合つて食つたが、水が、一周間で一度だけの食料なのである。そして、水は翌日、いや、幾日続くかも知れない、日々のための活動源になるものであつた。

広い地球の上の、たった三人だけの、うら悲しい夜が明けて朝を迎えた。けいれんも雨は降り続けている。仰ぎ見る天空からは雨が燃え、おれという予測は生まれて来ない。

一刻も早く、青空というものを眺めてみたい。この体に巣喰つて蠢く微

細な生き物・肌膚に執念深く付着している小さい虫けらを、さんさんとふり注ぐ陽光の中で殺してしまいたい。左右の指爪の背と背へ力をこめて思いつきり、ふすふすと押しつぶしてやりたい。私達の体には無数の虫が湧いてゐるのだ。た。

このため、年若い従軍看護婦が発狂して死人であった現場も黒田悟が見ている。この條突く雨をおして出発する勇氣はどこを押して、勇気上ってはいない。結核また、この場所でも第二夜を送ることにした。雨は迎えた朝も雨でまっ白に一段人である。霧状になった。乳白色の空間、いや空間はない。散れと降り、暮る水の塊りだけだ。その雨を眺み握る力さえなく、飢えと寒さと空しさで泣き喚きたいような衝動にかられ、死んでいくのだ。た。

この同行三人のうち、最も若年の私であった。ただ軍医の階級が上位であるという事実のため、この行動に關する限り、續續伍長と鈴木上等兵の二人を安全に誘導すべき責めを感じてゐるだけで、心は張り詰めていなければならぬのだ。もし私が一兵卒であつたなら、人前をかまわず、天空の一角に向かつて思い「よし、此所まで来たからには、この三を、命に代えてでも守り通してやるぞ。」

この思いは計り知れぬ重みをもつて私の決意となり固められ、死んでいくのだ。人間の信念は究極的な苦悩に對処しなければ、その確固さを持てないから。

知らない。「此所は年々年中、雨が降り、地帯らしい。晴れるのを待つてゐると餓死するばかりだ。氣をとりなとして出発してみよう。」
天幕を、松うと近くで、追車砲が炸裂した。長い尾根をつたつていくと、この部隊が、兵隊が五、六人いた。何か、その話をやうてゐる。

「はい、もうバコド付近へ出る決心です。何か食わぬとやり切れません。」

「そうであるう。誰しも五十歩百歩、私達と同じ願いだ。御安全に、彼等へは格別の助言をするといつた義務も権利もない。誰だって人間だ。最低食料だけおしえてほしいものだ。基本的な食生活が満たされなければ誰だって命を張つての無謀な愚感も出てくるのだ。」

私達は歩を伸ばした。自由という観念と実体の霧の中へ拡散されていくようになった。心は自然と爽快になつてくるのはどうしたことであらうか。

山を下つて来ての気圧のせいかもしれない、と思ひ付いた。果たしてどうか。暗黒の空は、雨を叩きつけるだけだ。周辺は霧に閉ざれ、樹々の茂みも

雨の音さえ除けば沈黙を保っているような奇妙な雰囲気である。

霧にさすよう不思議さよ、茂みも石もわびしげに、木々も互いに見え合えず、ものみななべて孤独なり」と訴ふる私の声は、

「これです、これです、動いたんです」と、早口に言い足す。人間を指さした。
「この体の上半身は、大樹の根の向うになつて見えない。下腹部から足先まで
靴の紐を解き引つ張つたらしい。鈴木は大きな靴を見付けて、よし世間つてやろうと
の足がひくひくと激しく動いたのである。」

「これいまだ生きてゐるんだよ、この人は。」
「その人に相談してみよう。靴を欲しいといふ。縫綴り口を添えた。
木の根をまたいだとて、その人の上半身があつた。」

死に絶えていゝとする一個の生命に抱きついて、共に泣き共に苦しんでやりたいと思
つた。不憐なこゝろも祖国では人の親であり、人の夫であらう。結核や紫

養失調症患者は死の直前まで意識がはっきりしている。餓えと寒さと
雨の音では眠ることも出来ずじつと来るべき時を待っているのだ。

月と皮ばかりの顔の中でギョギョ二個の眼球が光っている。高度の貧血、
瞳孔が散大している。

「あ、い、耳元の叫びへや」と首が動くだけの重症者だつた。鈴木は彼の耳元
へ口を寄せて「生まれはどい」と問ひ、盛んに「うん、うん」と言っているよ、うだ
つたが、何か通ずるものがあったか、知れない。
生まれは九州、殺してこい、肉肉をやるばつてん」と云つたといふことだ。

いすからともやく、夜はやつて来た。死んでゆくとする人の近くで幕舎
をくりす中に入つた。

彼は九州生まれだつたのか。雨に打たれながら、もはや舌さへ噛み切る力は
失われている。散大した瞳を動かして、精一杯努力して「死なせてくれ、そうす小ば
代償として肉を」提供して欲しい」といった。その人が愛おしく思われる。彼も
自由な天國へ届けてやりたい。しかし後四、五時間すれば昇天するのであ
ろう。死ねばすかしが、生きることも大へんだ。

僅かに落ちる水音が時たま天幕に当たっている。どこかで自働小銃が鳴って
いる。鈴木は追にやう小銃が軽くてよかった。靴は世間つたらしい。
闇の中で毛布をかぶり、何かすすり割り切れない思ひだ。誰か話しかけてく小
れはいいと思ふが、皆沈黙を守っている。そのかと言つて、こちから話しかけ
る元氣もない。声を出せば、それだけ体力が消耗することを誰かがよく知
ている。夜はかなり深まった。一寸先だつて見えない。思ひ出したの様に軽
機銃の連続発射が聞こえてくる。全く淋しく空しい。全身が凍えて
しまふぞうだ。

207
「もう何れも考えまい。生きとし生けるもの、すべて滅亡してゆくのだ。生者必滅。
お前も長く生きようとする心。人より優位に立つと云ふ思い。富貴を
望む。聞くすべて亡女執事だ。早く眠りたい。胃が鳩首のあたりに空虚な
ものを感ずる。」

「もう真夜中だろう。夜光時計は十二時とまわっている。」
 鈴木 私は鈴木を呼んでみた。鈴木は顔紅し起きていた。死人とする
 頻死のためにはと考えていたから知れない。しかし五に語らず、その水に
 「すまないが、さっきの兵隊だが、生きているか、死んでいるか、それだけでいいんだ。診
 て来てくれないか。」
 はい。鈴木は一つ返事で出向いていったようだ。一寸先の見えぬ闇の中を這
 うようにして、途中の屍の幾つかを越え木の根もところまで行くのだ。相手を
 間違えずにあの男に近づき、体にな小胸へ耳を当て心音を伺うのだ。私は、
 ああ男が息を引き取っていてくれることを願った。死に至るまで苦難をあ
 まりにもやるせなく思っただけだ。
 間もなく何かの動く気配がして、鈴木が帰ってきた。
 「どうだった」と私が聞く。あつた方へ鈴木が這い寄りこ来て、
 「死んでいました。体温は残っているかと云う位でした。息は完全に止まっ
 ました。」
 「そうか。御苦労だった。彼も救われたらう。俺も救われた。ここで眠り
 った。みんな眠ろう。」 鈴木は報告に安堵したのか、何の不安もなくすぐに

眠りに入ったようであった。

明けて七月四日、珍らしく一番先に目覚めた私が二人に起床をかけた。
 装具を枕元に置いて、鈴木を分けなから少し歩くと、昨夜言葉をおわした
 九州生まれの男の前にも来た。
 「成仏しろよな。九州へ帰るんだよ。」
 手近にあった灌木の枝を手折って、昨夜十二時かきり（恐ろしく）に死んで
 いた男の胸へそれを載せつけた。雨に濡れている山吹の葉っぱに似た植物
 であった。この小が、この死者に對して出来る私たちの供養であった。
 「お前たちも何か云ってやれ。」
 顔紅し鈴木はひざまづいて合掌した。か鈴木は神妙なことに泣いていた。
 昨夜、私の要請でその死を見届けただけで、このように愛惜の情念が湧
 くものであろうか。
 「あ、上を見ろ。明かしくなってきた。さあ行くぞ。」
 陰惨なこの逃避行の後で、青空を見、そして陽光を体一杯に浴びられ
 るという憧憬が強烈に士気を高めてくれるようである。

鈴木が先頭を切り次が私、後へ顔紅が続いた。下り坂では歩度がいくら
 か伸びている。第一目標地点バンダナウエイ（櫻盆地）まで行けば何と

「額頭、駄目だ。俺には太嘴鳥のように死人は啄めない。心が乱れて斬れ
 なんだ。あと数日我慢してほしい。桝盆地へ出て来食物がなければ俺が
 この刀で腹を切らう。俺の肉を食うてくれ。痩せてはいるが鈴木と二人で
 分け合してくれ。何の遠慮かいるものか。俺の肉だもの。」
 私は本気で決意していた。しかし、このことは部下に対しては必ずしも然
 る義務とは思ってなかった。「さあ、頑張りなう」と二人を促し私は先頭を
 歩いていった。

三十三 桝盆地

名知れぬ大樹群の遙かな葉末にすらほら見えはじめて青い空、白い雲
 そと、この明るさ、太陽の白い。私達三人は一層の活気を得て、意気だけは
 天を衝くかと思いつてあった。湿度が少なく、頭上には暗い雲も雨もなく、全身を吹く
 風さえ爽かに思われる。三日月振りに巡り合えた陽光に、私達はすっかり上気している。
 すると、小径の右側に刈り取られたらしい、ササの茎が束ねられ木の枝に
 掛かっているのを見つけた。さほど日数を経過したものではないらしい。
 「おい、見ろ。此所に、んなものがある。まだ新しいササの茎だ。きつと近くにササ
 畑があるんだ。」
 妻悦の余り泣けそうになる。三人の顔に大きく喜びの色が見えらした。
 さあ、いって歩くんだった。元氣を出して笑って行こう。

天にも登る心境とはこんなものであろうか。三人は歩度を速め、いよいよ坂道
 を下って行った。

昭和二十年七月四日、十一時四十分。遂に私達一行はバンダナウェイ（桝盆地）
 の見える茂みの切れ目に到達したのである。ここ三日月間、日光の見える山
 間の湿地帯から脱出して、流るる天空の下に現われたのだ。長い苦難の
 連続であった。急激に来る安堵の思いが、身心に全く虚脱状態になつて
 しまったかのようだった。三人は山崩れるようにその場に坐つてしまふのだった。

自然は敵意も見せず反抗も示さずただ一助に生き続けている風物をもつて
 私達を迎えてくれる。

この場所は、日本軍に追いつめられたヨサッ（敗走）たちが雨を期しなが
 らかく小棲み開経したものであろう。巨木が倒れ小切り株などがあちこ
 ちに見える。

風はさやかに緑の木々や草原にそよぎ、コバルトを溶かした空は、高く高くどこまでも
 続いている。その遠くに霞むのは、ミライ山やカシラオンの雄姿。そして白樺の木々連
 なり。異事な光景だ。六七羽の燕が盛んに飛び交いながら飛びまわっている。

ああ、さんさんと降り注ぐこの陽光の中で、黙って死んでいたい。一瞬、私の脳
 髓を掠めた思いがこみである。

けれども安易な感傷に浸っている場合ではない。とにかく付近一帯の状況を把握
 しなければならぬ。水が先決だ。私は二人をそこに残して、坂刀し偵察に

考えてみると、このいかし芋を食うのも、芋っぱ汁を吸うのも、実に三ヶ月振りだった。任務を遂行すること、また、この食料にありつかんかため耐え忍んできた長い夜と昼を振り返るとき、思わず溢れ出る涙を抑え得ぬ私であった。

二十三 カマリスク

グー 7.6

昭和三十年七月五日 中隊長以下 私たちは、先発隊 徳久少尉以下十名が待っているといわれるカマリスクへと行動を開始した。出発に当たり、生田亘たち歩行不能患者三名と三木衛生兵を残しておくことにした。気うまだが止むを得まい。

この行軍は、疲労が限度に達している私達にとって生涯忘れぬほどの難事であった。この世界で全ゆる苦行に耐えて来たと考えうる私たちであつたが、その行く手には、更に高く、更に深い山峡が連続しているのだ。カマリスクへ行けばカラバオ(水牛)が食えるそうだと、誰云うとしなした。佐あつて来た、この一言は一行に強大な刺激を与えエネルギーを賦与したようだ。苦難の山を幾つか越え、道なきジャングルを踏み分け野営予定のバナナ林に辿り着いた頃は、日もとくに暮れかけていた。

どこかで喰う迫る。食料に呼吸してびとしきり車轡を渡った雷鳴の直後、金も遺棄し、ばかりに詰め込んだスコルにすっかり慌てふためいたが、バナナの皮を滑り落ちて、重根を作り大火を焚いて暖をとった。か細い裸体、夜が更けるに従って、スコルは本降りになり、雨に加わった自動小銃へ不安を思ふ一夜であった。

朝を迎えるとも、銃声も聞えず、頭上に美事な快晴がひろがっていた。洗えた空を、グーラスであるうか輸送機らしきものが往き来している。水も仰ぎ見る私達には、現在戦況がどのような展開しているのか、残存戦力がどうだ、これから何に生かすべきか、寺と語らう、ともし必要ではなく、この日一日中付近の草原を探索し、林へ分け入ってバナナやドリヤン採集に熱中したのである。

ここでの三日間の休養で、疲労も癒えた私達に出発合図がなされた。

217
広い草原を渡ると、夕ボラン地帯らしい。砂糖きびがすいほの糖分を含んだ成長しており、手早い兵隊たちが駆けつけて行つては手折る。急いで列中は戻ってくる。そのしきさか子供、ほく微笑ましい。その様な行為が私にはどうして出来ぬ。固苦しく、寝たせいであろうか。なれと思つて、いると、ふと故郷の母や兄のことが、思い浮かんで来た。

やがて大河（大川）だ。正式には、いさや海に注ぐ、河の上流とでもいうべきか。
 山口部隊（京都府玉津町村之世間出身、山口正一殿指揮）は、この多摩川
 大川地区に分散している模様である。額部、鈴木は中隊長。気兼ねし
 あり、いつまでも私の世話になるのも心苦しいとみえて、ここで私達と離れ、
 山口部隊（八幡流）したとの希望を打ち出した。鈴木の出身はたしか旅団の
 作業者の部である。そう云えば、山口部隊とは姉妹関係もあるよう。そして
 額部も山口部隊より、山口部隊に知り多くいるようだ。少人数の山口部隊
 より、寄らは大樹の蔭とやらで二人と山口部隊へ編入させてもらう方が
 いいだろう。
 山口部隊は関東、中部、近畿地方の出身者が占められており、岐阜、和歌山の
 出身の二人が、いざ都合から知れない。私達トリオはここで別れることとした。
 後々、語り合おうという約束もなく、何んな事自体思ひしなくていいと、随
 然な離別で後々やや気掛かりになることであった。
 山口大佐殿は事情を説明して、願ひ出る私の依頼も快く承認してくれた。
 大りを渡り、牧場地区、大谷を経由すると、カニラオンがその麓まで手に
 とるように見渡せる。溪や中島、そして山中で死んでいった多くの戦友たち
 に、雄大な大自然の景観を見せたい。死に絶えていった彼等とはどこ
 に安住の地を求めるのであろうか。今は亡き戦友の顔、顔、顔がはろか

Kamatsuk.

山頂の雲間から見守っているようにも思える。何かと出ること
 があり、隊列から遅れたか、死者との魂の交流は自分から一番深く関わっている
 私である。或る種の誇りめいた心情を抱いてゆくりゆくり後をついていく
 カマリスと呼ばれる地区へ入ったのは七月十一日、正午すぎであった。ユサツペリ
 敗匪の棲んでいたらしい粗野な草葺きのバライ（小屋）に分散して入居し
 当分の間、状況を覗いながら生きながらえていこうとする私達である。
 カマリスに於ける当初は平穩なものであった。
 カモテ（草）マイス（きび）カモテカホイなどの食料にも恵まれ、私達は極楽
 の生活の中に入った。しかし、間もなく米軍観測機の低空飛行を試み
 偵察を開始することとなった。恐らく近在のヨサツペと通信している
 に違いない。
 中隊の地獄谷通過に前後して、爆薬、伝染病（主として赤痢）または栄養
 失調等内科疾患による犠牲者に山中軍曹、杉浦、藤田、雄、井上常助
 井出伍長たちの名が挙げられ、和手文太郎曹長以下二十数名の死が不明
 者の安否が気つかわれている。梶原、栗男や谷中繁富の死も確認されて
 いない。小松忠臣も遂に姿を現わなかった。腫れあがった小松よ、どんな
 手傷を買ったというのか、いつの日か、中隊へ、そして私のところへ帰って来くれ。

「この生活は体力回復のための素地作りというべき明け暮れであった。
ある日、中隊長の要請を受け、私は桜金地へ赴くことになった。

桜金地へ残留させている生田上等兵、土兼昌三郎、黒石光雄の患者三名と、その看護を委託されている三木衛生兵をカマリスへ連れ帰る任務である。

道中にヨサツベが出現、暗躍しているという噂も立っているし、桜金地も奪取されているかも知れない。中隊長は私に、今隊長以下一個分隊を連れ、いったらとすめてくれる。か、襲撃されるのは、兵器弾薬のない、我々は皆殺しになるであろう。

ヨサツベに感銘をためたためには、いく少人数がいい。

結局、私は森岡英則上等兵と杉村孫一、一等兵を選抜した。三人は中隊長の頑健者だったと同時に優れた機敏性を兼ね、思っていたからである。

携行品は限定した。森岡が小銃一挺、私が手榴弾一個を持ち、杉村はフリーとした。身軽にして、おいて別の任務を予定していたのだ。

「さあ行くぞ、御苦労だが頼むぞ。」私の決意はすでに三人には伝わっており、その眼も生き生きと光っている。

通りかかりの植田分隊前で、私の声か怒鳴る。

「おお、みんないるか、今から桜金地へ行くが、もう帰って来ないかも知れない。俺の顔をよく覚えていてくれ」と私の言、草に植田も刺れたもので、

「まあ、縁起でもない」とい角気をつけて行ってきこくぞい。黒石が、うちの分隊へ入るようになっています。帰って来たら皆さんに御馳走しますよ」と、お人好しの本性を表明してくれる。

吉田茂、渡辺勝安も小屋の中から激励してくれる。それらの声に、心へて歩き始める。班長殿と呼ぶ声。

「ここに田中萬治が立っていた。彼の物足りなそうな顔に、当惑したが、内心すまないようにも思う。

「なんだ、萬治、そんな不満そうな顔をして、お前も連れで行きたかったか。中隊長と相談しての人選だ。また今度な。」

田中は私の心も分っているはずだが、私の弁解には何とも云わないうで、「これは昨夜作った物です」と、包みを渡してくれた。重みから判断して、草団子らしい。

植田徳治兵長は、五月初旬に中隊を離れ生死不明のまま、有難いことだ。われている。谷中軍曹の分隊を引き受けている人、分隊長勤務者だ。

この分隊も、湊中島、伊藤、堅田、森、西森の戦死者を出し、寂しく切つてい

る。その様な悲しみを慰める意図をもし込めて、時々この班に入ったり、残

存者と親交を結んでいるのだ。カマリスで半月ばかり休養し、栄養を攝取したためであろ、うか、私達の

救出班は、足もと軽く目的地を目指して歩を進めていった。正午、前早くも到着した大川の畔で休息をとっていると、山口部隊長が、「おそろしく行かな」と口をきかれた。

「横盆地へ残っていた患者たちを連れに行くところですか。」と私が答えると、山口大佐は「ほう、それは御苦労だね」と言われ、親切にも近道を教えてくれるのだった。

私が山口部隊長にお会いしたのはこれで二回目だった。好感の持てる品性の高いお方である。高い徳望を具えておられ、左軍は勿論ヨサツへ（敗匪）の総指揮官

である。中佐からし尊敬され、かつて花束を贈呈されたという話を誰かに伝え聞いたことがある。彼も鈴木と立派な隊長を仰げて幸福だろう。

厚く敬意を表明して、私達はそのを離れた。大佐を渡りタボラン地区に入った。大佐から教わった通りに道を選んでいった。

山口部隊の経理部が屯しているバライの前を抜け、急峻な坂道を上り、陸稲の植わった山畑をよぎり、山口部隊の分所が立っている高台へさしかかると、

激しいスコールの訪れた。予定以上の歩度も延びているし、道連れの二人に風邪でもひかると大変だ。若干、方角を左へとってバナナ林の方向へと急いだ。

山口部隊の某兵長に、私達の動向と用務を連絡すると、このあたりから前方は危険性があるので十分に注意を払ってほしいということになった。

かなり警戒戒しなからうと前進したが、銃声もなく、それらしい人影も見えなかった。

辿り着いたバナナ林の小屋に足を踏み入れると、半月前、私達が宿泊した時残し置いていた未熟のバナナやドリヤンが芳香を漂わせて色づいているのだった。これは有難いばかりに、空腹食った。日没後の蚊の襲来には全く閉口した。「ヨサツが何だ。かまうものか」とばかりに火を焚き、大胆にも手伝って大火を作り生草を投げ入れ、蚊を追っ払っているうち、次第に眠くなって来るのだった。どこかで自衛小銃の連続発射が鳴っている。三人はそれぞれに外被をかぶって焚き火を遠くから囲んでいたが、ついにはその位置で深い眠りに陥ってしまったらしい。

翌日は絶好のネグロス晴れに恵まれ、朝八時に出発、午後三時前にもう横盆地に到達したのである。

三木たちは生きていた。近辺に迫っているヨサツへの襲撃を多分に敬言戒上り兵は、それはや、このせいでなくなっていた。草木物と葉長の皆無の場所、赤痢を完治させることは至難の業だった。非常の死を遂げた生田が愛ほしい。また三木たちも、いんばに動転し、悲しく不安な日々を過ごしたことであろう。

三木たち残留者たちに煙草やバナナ畑の収穫物を分け与えたが、何かと不安で事件の多かった横盆地、エヌエヌの話題を報告し合っているうちに、夜に入った。明朝への準備を完了したあと、私達六人は頭を並べて静かな横盆地

三十四 分散問題

さわやかにバンダウエー(桜盆地)の朝が明け渡る。東の空を分けて射す日射しが快い。一時に出発したものの重症の黒石をかかえて予想以上の難行軍であった。精神力、精神力と何十回かこの言葉を発して内的な気力を強要しての行程であったが、黒石も精神力のすべてを傾注しての移動であった。私が生命を預っているのは黒石だけではない。三木、吉兼、黒石、杉村の総員を無事カマリスクへ連れ帰らねばならぬのだ。重症の黒石に對しては、脈膊測定、数時間と夜の注も怠らなかった。衛生部員としての任務、一隊の指揮者としての責務と此月、この身心の苦悩は大へんなものであった。

カマリスク出発以来四日目の刻、目的を果たして苦心惨胆の岩向カマリスクへ戻った。私達にカバオ(水牛)肉の特配があった。敗匪の牧場へ夜間襲撃をかけ、掠奪したものである。四五の月振りの肉食だった。

近辺には芋類とうもろこし等の食糧があった。日本軍に送いやらした比律賓軍の生産になる物資である。彼等はカニラオンの山麓農付近で反連の機を狙っているはずである。

またその時機に内熟したと見るべきである。彼等は夜陰に乘いての攻衛を企図しているようだ。

私達の周辺には四月へ膨満感を感じるほど。

質や動物性脂肪分が欠乏している。野生のサリ子は時として発見できるが、食塩のないものが多くある。すでに皮膚病はさうざうと潤いも失い、体に付着した垢は幾ら擦っても取れない。体内に脂肪が欠乏しているからだ。

ろう、発汗量の多い、の草原に束ねる塩分の補給なしに日を過すことは出来ない。山塩(Rock Salt)だ。海水だ。とばかりエヌエイヌイル(NAC)塩化ナトリウム(化学式)をとり、塩が欲しいのだ。

視野がすすんで物体が明瞭に見えないのも、このためだと決める。上つてはまず、なにか空しいものか、体内で浮遊しているか、奇異な感じのする、そんな状態が続くのである。

十日後、二十日の予定を期して多くの危険を冒しながら東海岸サンカ

も二十個も集めての決死行である。戦友の水筒を十個

將來へ展望を轉ぎ得ない、うら悲しい沈滞が、言わす語らずの沈黙の中で、隊員の中に波紋を描いてくる。空襲が積極化するにつれて、地上のヨサツベ、風評が立つ。現に、カカリスクでも、某中尉の殺害が報せられている。兵隊が二十ペソ、下士官が三十ペソ、將校を殺せば五十ペソという風に、

、で、一層の、少人数で、別個に行動すること、検討されるようになった。群集生活では何かと不都合を生じる。当面の敵の感知を最小限に喰い止める方策として、なるべく個々に、あるいは少人数で、自活の道を選ぶという分散問題が、益々論ぜられるようになった。七月も下旬に入った頃だ。

ある午後、射しいやにまじい日であった。下士官以上を集め、中隊長

が、分散問題に關する諮問をしたのである。

各方面からの見地、立場からして、適宜判断し、忌憚のない意見を、出して、くれ、たとえ、編成を出ても、離隊逃亡の四訓則の該當は受けないだ。中隊長の心境も、終に事々に至ったのだ。事實、他部隊では、離隊逃亡の罪を問わぬという条件を付して、すでに分散している例が多くあった。しかし、このような大きなテーマを掲げて、私達の意見を聞くとする中隊長の心のうち

を推測すると、流石に流石なものである。

独立混成第三十一旅団第三五五中隊長として内地港灣門司を出港（昭和十九年五月十三日、うすい丸）した島本敏男中隊長は、すでに四分の三以上の部下を失っている。いなか分散問題で我々に意見を求めている。切齒扼腕、中隊長の胸のうすを思うと、心が疼く。

しかし、この問題に關しては、我々こそ、輕々に意見を出すべきではない。各分隊で、その問題の兵士の真情を把握すべきであらう。

結論の出ぬままに、最終決定は次機へと持ち越された。

数日後、中隊長は、私たち指揮班所屬の兵士に、由提命し、これの解決を迫るのであった。否か、心か、もはや私は迷わなかった。

心の中には、最初から、ただ一本の道が続いていた。

私自身には、伴侶を共にする兵はいない。いなか分散すると、肝胆相照らす程の同志で、あるいは体力に自信のある者同志で、二人、三人と、中隊を離れてゆくのだ。そうすれば、患者や体力のない者は、いなくなるのだ。誰か弱者に組する者はいないだろう。弱肉強食の世界が現出するのだ。中隊長はいなくなるだろう。徳少尉が同道するだろうか。当番がついて行くことになるだろうか。いなかことを想定するだけで、惨めだ。苛酷なフィナーレではないか。苦しみ、耐え、悩みに耐えて来た、お互い同志だ。一体何うために重ね

て来た苦痛の連続だったのか。中隊は主孤な功績を上げて来た。敗れたと云え死力を尽きて闘つて来たんだ。これは中隊団結の業績なのだ。

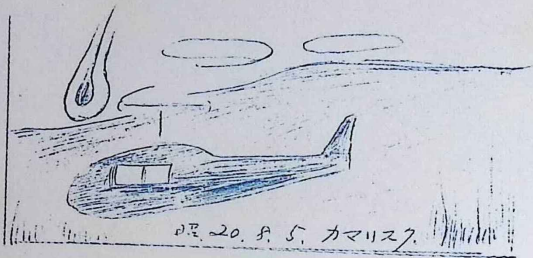
島本隊員として奮い奮げてきた多くの業績へ誇りを持つべきだ。戦死していった同僚も中隊にプライドとなつたことを抱いているだろう。みんな一緒にいればいい。一緒に行動するのだ。たとえ生きても死んでもいい。私の決意は一条の烽火となつて、これから先々遭遇するであろう苦難の途を照らし出そうとしていた。

結核中隊の意志統一がなされた。誰しも私の考えっている様に思っていたのだ。

三十五 アドルファスの花

2081

何とはなしに物憂い数日が続いた。かゝる間、重爆機による爆弾投下がなされるようになって来た。友軍機は最近ついそとを見ることがない。ホイーグ、グラマン、ノースアメリカを押し寄せる今が最高潮であろう。次は次々と寄せては返していく。近傍の十軒家が全壊し、カマリスク南台地が叩かれた。北台地はミサツへの攻撃を受けたりしい。バゴ河上流大沢付近はコンソリー機に西牧場付近はグラマン機からの機関銃掃射の洗礼を受けたようだ。しほや残るは私達の棲んでいるこの中央凹地だけになっている。



照 20. 8. 5. カマリスク

夕陽が西に沈んでいながら、俺の位置がつかぬ頃、指揮班のバライの二前を運ぶ数人の兵士たちが、しう、このあたりも危険だ。気を付けろよ。などと話し合っていたが、警戒を促す彼等の予言が的中する日が近づきつつあったのだ。

翌朝、早い時刻からカマリスク一帯を偵察にきた小型観測機が、三機も入念に中央凹地を旋回した。

バリンブルーとグライダのような低空で私達の棲んでいるバライの屋根上を掠め、は上昇していく。あたかも自動車でも運転しているかの気易さで、その小水三組の塔乗者たちは、左へ左へと顔を向けては話し合っているようだ。時おり腕を伸ばしてあちこちを指さしている。

この様子を見れば、指揮班のあぐら屋から覗いていた私が、いまましい奴らだ。おい田村、小銃で走ってるだろう。殺してやれ。と云ったが、田村は歯をきりし上をならみ握えているだけであった。

バリンブルーと、まるで小鳥が飛んでいるかの軽快さでエンジンの音は午前中聞こえていた。

229
しう成すべく仕事は完了したのか午後に入ると一機もやっ来なかった。ただ日没の二前には十三機編隊の重爆機が三組も東方から飛んで行った。

多分、レイテがミンダオあたりへ行ったのである。
 日が暮れると、いつも抜かれたばりな思いになる。カマリスノでは、夜間爆雷がな
 かった。床下で草を燃して蚊遣り火をたくのが日課の一つになっている。草を
 火の中へ投げてみながら嫌な予感につき纏われてならなかった。
 「中隊長殿、明日は危いすよ、何とかしなさいよ」と、処置を訴えると、
 「そうだとあれば、綿密に調べていたからなあ、あしたは草原へ待避させ
 よう」と、中隊長も胸中、穏やかではなかったらしい。
 一夜が明けた昭和三十年八月六日、ネグロス清水の上空をグライダーの様な
 変な形状のものが旋回していた。すでに中隊長の指示に従って草原に待避
 しているはずの一隊を返って、指揮班の人員も出発した。
 中隊長、長田軍曹、私、山口兵長、田村、赤瀬、小野各一等兵は歩を進め
 ていた。草原にさしかかった時、遙か遠空から異様な爆音が南へ入ってきた。
 と、見や、山頂のその上空に朝の光を返してくつきりと浮かんでいる大編隊は
 四発機だった。
 「あ、コンソリッドだ。見よ、その堂々たる二十四機の編隊は、お化けの様に
 白色透明にさへ見える。機体を線々と浮かべてこちらへ迫ってくるではないか。
 しかし、軸線は大丈夫でしょう。私の大声に、島の中隊長は、
 「さうだ、少し左へ振っているらしい」と、応じる。

やや安心して、完熟したマيس烟の横に出た。けれども威圧せんばかりの編隊の軸線
 になおし神経を尖らせているその時、いつとなく現われたのである。赤茶
 色の観測機が頭上に静止しているではないか。
 「あ、しまった。観測機は更に恐るべき発煙筒を打ち上げたのだ。彈着地真
 を指示された。應の大編隊は左斜の軸線を右に変え、私達の正面向へと

「走れ、中隊長の怒号に、我々七名は遂に」と来た草原を走り、走るのだ
 った。一刻を容れず、この危急の場合、足許の草原は茂りに茂っているのだ。
 仰ぐ天空は紺青、ひとひらの雲のない頭上の空へ、発煙筒は長く尾を曳いて

くつきりと浮いている。編隊は進む二十四機だ。ときおり編隊を仰ぐ私の視野
 へ入るもの、機体から流れ落ちる。投下爆弾だ。次々と落下してくる。
 爆弾落下だ。山口、命令の続く限り逃げろ。爆弾だ。次々と落下してくる。
 直前も走っている山口正八兵長に私が叫んだ。殺那、サア、サアとスコールの注

ぐようなさめめきが起った。爆弾落下の空中摩擦音だ。もう駄目だ。
 「みんな伏せろ。耳をふさいだ。」
 山口兵長と私が同時に伏せた。車輪然たる地軸を裂くかの音響と共に、全身

か空中にほうり出される。バラバラと降りかかる土塊、無念、二十三日八月。
 あとの人生に、詮めをつけて、全身を草に叩きつけられていた私は、

「藤松軍曹、藤松軍曹」と呼ばれる中隊長の声を聞いていたのだ。あつ、誰か殺された。不吉な予感を背脊筋に思いながら、声のあつた方角へ突っ走っていった。中隊長の膝元に、隊長当番の田村善市が倒れて、額へ皺を聚め、痛い、痛い、痛い、と喚び立てた。痛い、焼けそうなんです、痛い、と、苦しみを訴える。心配するな、俺が診てやる。田村の軍袴（ズボン）の紐を解き下へまくり下げると、痺は鮮血で真赤になつてゐる。それを外すと、恥部が真っ白く隆起して、見るからに痛ましい。おさえてみると、創部は浅く、堅い手ごたえがある。丹波栗の实大の破片がそこに喰いついてゐるのだ。班長殿、いなくなか焼くそうなんです。田村が、伊予こぼで叫ぶ。「頑張れ、男の泣く奴があるか、直してやるぞ。カ一杯叫んで私も元氣付けたが、あのコンソリテッドB三九の投下爆弾、その灼熱の破片がジューツとばかりに焼き付いてゐるのだ。痛くて涙が出た。恥すべきことではない。横から見てゐる中隊長が、大丈夫かと聞くのに、対して、大丈夫です。と田村の手前答えたものの、氣になる一つの事があった。最も運が悪いことに、陰茎の根部の損傷である。それは尿道の排出路と精液の射出路を兼ねてい

る部位への損傷のあるなしの問題だ。しかし、いらない。「ええ、助かるかい。」はあ、命には別条ないと考えますが、部位が部位だけに「尿道損傷、うんぬんは、こゝで決断出来ません。かなり可能性はもつてゐます。田村の両耳を固くふさいで、私は、どうするか、せつかちな中隊長に、と、かく擧出はしてみますが、兵舎へ帰らねばだめです。い、う、言、つ、た、と、き、ま、た、も、車、輪、々、と、聞、入、て、来、る、爆、音、重、爆、音、です。い、う、う、う、い、い、田、村、を、ど、う、す、る、と、い、う、し、ま、し、よ、う、と、こゝへ残そう。担架も輸送人員もいない。事実、い、う、通、り、で、あ、る、付、近、の、草、を、お、し、り、木、の、枝、を、折、つ、て、田、村、に、か、ぶ、せ、た、立、ち、上、か、り、お、ま、空、を、仰、ぐ、と、今、度、は、十、三、機、編、隊、だ、四、十、八、の、エ、ン、ジ、ン、を、と、ど、ろ、か、せ、威、大、高、に、突、き、進、ん、で、来、る、ま、た、軸、線、だ、あ、ち、へ、行、こ、う、と、怒、鳴、り、散、ら、し、た、中、隊、長、が、右、手、を、上、げ、た、その指先は、マイス、煙、を、さ、し、て、い、る、私、た、ち、は、一、目、散、で、マイス、煙、へ、馳、け、つ、け、た、その時、右、手、か、り、誰、か、が、駈、け、て、く、る、誰、だ、ろ、う、あ、っ、富、本、軍、曹、だ、彼、は、息、せ、き、切、つ、て、中、隊、長、の、腕、を、握、り、こ、っ、ち、は、軸、線、で、す、と、叫、ぶ、の、だ、つ、た、中、隊、長、は、か、つ、と、眼、を、見、開、き、軸、線、は、あ、つ、た、と、怒、鳴、る、何、か、喧、嘩、で、し、よ、う、な、つ、て、い、る、姿、で、あ、る、中、隊、長、は、な、お、し、言、う、

いい入らうです。いやあつた。と主張し合っている間に、鷹の編隊は一片の雲さえないネグロス晴れの天空を載ってぐんぐん迫ってくる。飛えた機能を誇る憎むべき敵の空軍主力B二十九が。一秒一刻、頭上へ迫った十三機編隊は、今當に軸線上に位置しているのだ。編隊の高度はかなりある、人なまに走り逃れようとして、やはり軸線内だ、よし死んでいい運命だ、この足が踏みしめて、この位置から一歩だに動きはしない。

厳肅な死に直面して動せず空を仰いだ。いまあの編隊から黒緑な影のいかに黒いのか流れ落ちる水は死ぬのだ。一片の肉塊さえ止めず木々葉葉微塵に砕け散るのだ。私は不動の姿勢をとった。両手を堅く握りしめて瞑目した。一秒二秒三秒四秒五秒……と死を待っている心の中は苦悶も怒りもなげきも死生観よろしく冷静を保っている自分自身なのだ。しかしどうしたのだ上空に走るリズムカルなエンジン音以外に聞こえてこない。俄雨のような摩擦音も聞こえて来ないばかりか身邊に何の変化もし起らないではないか。パツと眼を開いて静かに空を仰いだ。編隊はすでに頭上を過ぎて飛翔を続けていたのだ。危機は去った。みんな生きて、強烈な決意による全身の硬直を解いて、その後にくる一抹の寂しさと毒びとのまじり合った顔とみせ合ひながら私達は大きな溜息をついたのであった。

四発音の群水が去った後は、ネグロス晴れの空を載って雄大なカンラオンが流れ黄金のマイス畑と深い緑の草原が遙かな山麓まで続き静寂そのものであった。

田村を護送して丘合まで引き揚げて行く、この時の被害者は田村二人ではなかった。松崎良一は軽傷であったが、小西軍曹、黒石一等兵、田中一等兵の重症が待っていた。特に田中萬治の破片創は致命的であった。しかし、私の手元には、こんな重症を処置する器械、薬物など皆無である。

まず手近な田村から処置にかかった。局部の剃毛は器用な小野豊太郎に依頼した。切開するに、麻酔薬もない。

田村、我慢するんだぞ、いきなり田村の眼を切った。創部の脱脂綿が早くも紅に染まる。鑷子で創口に深く喰い込む。ガシツと金属性の音がして手応えがある。しかし抵抗はかなり強い。頭張りと怒鳴りさま右手に力をこめて手前へ引くと、田村は全身をびくつかせて苦しんだ。破片は固く局部へ焼けつき組織へ完全に密着しているのだ。もう一度更に力を加えて、やっとの思いで摘出した。田村は私に汗びっしょりだ。田村に見せた破片は丹波栗の皮大のものだった。原野に消滅はしたか、血漬は特許合わせていない。原野は損傷を受けようとして、やかてそのうすに破認出来る苦だ。次に

小西軍曹の小屋に入った。右大腿軟部爆弾破片創、兼右足背穿透性爆弾破片創であった。彼は私をしげしげ見ながら、

「藤松よ、俺の将来がおもしろくないようだったらあつさり言ってくれ。皆に迷惑をかけるのは嫌だから自決するつもりだ」と言つた。うかつだった。精悍そのもので通して来た元氣者の小西軍曹とは思えなかった。私は適当に大丈夫すぐよくなりますよ」と云いつくろつたが、すでに彼の右大腿には瓦斯その徴候が見えていたのだ。

植田少佐の田中萬治を診にゆく時、重傷と聞いていただけに早くも私は心に動搖を感じていた。生来の蒼白な顔面を一層蒼白くして、食血に喘いでいた。両腕、両下腿の骨折があり、右下腿は胫骨腓骨共々完全に挫滅してゐるのだ。もはや打つべき術はない。

「田中、甚しいか。彼の右手を握るとフルスは乱れ、そして細かった。

「班長殿、甚しい。」

「そう訴える萬治に『おおそうだろうと』と心も寄せる私であったが、

私の甚しい心痛さは彼以上だったかも知れない。

この重症にしてこの食血、凝視する萬治の額に幾つかの皺が、寄せられ私の胸をかきまわするのだった。

彼の心臓部に手をふいて、この男を救いたいと切実に祈つたところで何の支えになるだろう。切斷も出来なければ輸血器具とてないのだ。

明日の命、いや今日の命、一分後の自分の生死さえ予測出来ない激しい闘いの中に生きて来た。この一寸の寸の長さにも思ひ入る。

あの緑の草原を疾走するロコモーション（機関車）に身をゆだねて行ったマダハン。その夜か、田中萬治と二人、間隙を求めた思い出のひとときだった。二本柳子の訣別、脇天神での雨合、すべて過去となった一連の事象が、いま交錯胸の中に去来する。萬治の若さ、もう一度聞きたい。私の思いを一言彼に伝えたい。

私はもう一度彼の腕に注射針を通した。これが彼になし得る最善の行為であつた。胸に迫り込み上げてくるものを支え得ず、

「田中、俺だ。萬治、今からか」と耳元で叫ぶ若し、うる人であった。と、切水の長い細い眼をわずかに見開いて、声のありかを探して當てた田中の顔全体にかすかなまぶしの色を漂い、そして唇が動いた。「班長……と減らすぞ、一言、」

「ああ、萬治、わかつたか俺が……」遂にこうえ切れず、むせび泣く私であつたが、萬治は口を固く閉して、雨は若は雨けなかった。

感応的な了解を以て、最後に互いの心を結合させ、死生苦楽の戦友、田中萬治は、昭和二十年八月十六日十六時四十分、心優しい数人の友にみとられながら、はやく帰らぬ旅の人となつてしまった。

萬治の死去は、ヤサカ私に大きな衝動をあたへて、ききとつた。胸の上へ組み合わせた雨の掌に止め度もなく私の涙が、ふりかたつた。

その翌日 近藤勇、後田勝安一等兵に依頼して、田中の体を死守つて貰った。
 か私は一日中、放心状態であった。夜が更け、夜のはりかおろされた。上絨の月
 が冷ややかに光っていた。中隊長の等になるものであらうか。達等で
 故陸軍兵長田中萬治の墓と黒い痕も解やかにしたためられた立派な墓
 標が光りの中に浮き出している。いつもはなにこの墓場の斜面に東を三す
 ずくれている足元で南国の花、アズルアスが微風に揺れている。
 萬治は私に何かを求めているように思える。
 「萬治、詩を聞かせようか。」地下の萬治が、うん、班長とだしかに言ったように思える。
 「い、い、い、Karl Busse のう、あなただぞ」

Über den Bergen, weit zu wandern,
 sagen die Leute, wohnt das Glück
 Ach, und ich ging im Schwärme de
 Andern kam mit verweinten Augen zurück.
 Über den Bergen, weit weit drüber,
 sagen die Leute, wohnt das Glück -
 (山のかなたの空遠く さあ、棲むと人言ひ、ああ我人も尋めゆきて)
 涙をこぼみ帰り来ぬ、山の彼方なほ遠く さあ、棲むと人言ひ、うー

その声は、月を返して光る草原斜面の夜露に濡れて、遂にはカンラオンの山の彼
 方へ消え入ってしまったのだ。

三十六 国 山 朋 る

翌八月七日、小西信一軍曹は瓦斯壕を併死して死んでしまった。黒石の
 治癒も見込みが立たず、軽傷であった松崎良吉も、ひどい脚気兼栄養失
 調のため手当ては施したが好転しなかった。もはや人体自然の良能が失なわ
 れていたのである。

中隊長当番の田村は、尿道損傷を伴っていた。尿量増加による膀胱の充満
 は創部へ刺激もしたらすうだ。創口へ尿素尿酸が残水にじみからである。
 苦しみを覚えぬか何ともしない。陰茎から膀胱へと尿を導くために挿入する
 尿道カテーテルが、お水は救われるのだが、お水もない。あらかじめ瘻りをつけて
 中隊長と協議の上、山口部隊の軍医に治療を依頼する、とにした。
 山口部隊の現在地、大川下流への輸送は一大難事である。途中に大谷の
 絶壁が、お水、お水地にはひどい泥濘が、続く地域がある。山と谷、唾み合、う地、
 が長く続いている。
 患者田村は勿論輸送者にも、この苦難苦行には耐えられねばならない。練
 獄が待ち受けているのだ。

中隊で生ね者中、割合に体力のある下村直伍長、山中政夫、曾根六一、鈴木巧
各上等兵、藤川言一、杉村孫一、渡辺勝安、各一等兵たり。合計八名（名不明）
を以て輸送者に任じ、近藤勇、西村六郎を付き添ひ、勤務者とした。

上巻の「輸送」にあつては、實に疾く、まじい責任感と、戦友愛の発揮がなされた。
 さもなくば、恐らく、この（きよ）は、目的を達し得なかつたであらう。

大下流で田村を衣領したところ、
得なかつたであらう。

何の連絡もなく大火も焚火で暖を取ったため、この部隊の指揮班長から
凄く叱言を聞かされた。ヨサツへの出役が急を告げる現役階なのだ。連絡を通さ
なかった私が悪い。彼等の逆鱗にふくすることは当然なのだ。私は平身低頭して
謝罪した。

次朝輸送隊ハ名を伴つての帰途
 小唄の海老原軍曹に出会ったが
 昨夜

「そう怒りなんな、水牛を撃ちに行くとくには連続させるから」と冗談に紛らして断り後は談笑したが、この事件は山口部隊さかなりまじつかせたようである。台地を下って大川上流で水浴をした。苦難の汗と痰も洗い落として、その場で休息している。高千穂部隊（飯室隊）の将校が通りかかった。軍医だった。胸に付いている緑のM型がその事を証明している。

この時彼によって、日本の無条件降伏に關わるリーフレット（宣伝じう）投下された。

事實を知らされた。山部外隊經理付伊本軍曹と篠原一等兵の件につ

真相を隠わしめる力だった。
八月十六日だった。

爆薬で引いたか、真実だろう。日本内地で引きつけ作戦の度が過ぎ、
 天皇陛下にいた頃、あは四月上旬だったか、空中から機銃掃射を受けたとき
 見ると、華夷の刻印が何と1938と打っていたんだ。奴さんたちいま
 七年前の弾丸をこめてるんだ。仕方ない。
 無念であったか、えな。解釈をしているうちに、私の心に敗戦に關する確信が
 固まつて来たようだった。

カリスクへ歸つて行つたが中隊で、この導^{うさぎ}で持ち切りであつた。

「班長殿、今後自分たちはとうなるでしょう、どうすればよいですか。」
と、兵隊たちは、誠意が、偽わらずに不安をぶちつける自分自身への心理補償であらう。
事實だ。とすると、全面的無条件降伏だから、何処かの連合軍管下の

收容所に閉じ込められたらう。プリズナーオブウォーだ。口惜しいない。
 「何です、その何とかわォーというのば。」
 「つまり Prisoner of War は戦争の捕虜だ。いわゆる POW だよ。」
 「しかし俺は自決しようかと考えている。」
 「かともとはどういう含みですか。彼等は私を詰問するのだ。」
 「まず当面の指揮官、兵団の河野閣下の指令を待つんだ。それによって中隊長
 命令が出さるよう。中隊長の自決命令が出れば俺と一しょに死のうよ。いすれ
 にせよ命令に逆らわないで全員統一行動をとりたいたいな。みんなしっかし
 統一行動だよ。しかし悲劇だよな。あー、私は統一行動の言葉を繰
 り返して兵隊たちに念を押したつもりであった。私は統一行動の言葉を繰
 捕まれば綿作りだといっていましたよ。それとモ濠州ですか。」
 「いじやあな、綿作りならカリフォルニアだ。広大なアメリカが見られて。
 オーストラリアだとさしあたり鉱山掘りだな。しかし、彼等奴さんか
 我々をどのようにに処置し、どんな待遇をするか、想像はつかんではないか。
 中隊長だって、俺が言ったようにしか言わないじゃないか。あー。
 兵隊たちは誰かが脇におさぬけな顔をして引き揚げていった。
 問もなく、前方で敗走が出現してあり、やがて攻車もかけて来そうだと
 という情報が入った。

さて、兵器も弾薬も格別のものは無い。今になってヨサツペなかに殺される
 のも愚の骨頂だ。三八銃や一式歩兵銃はともし立ち討ち出来ない。
 相手は精巧な自働小銃が余るほどあるし、信子弾を上げれば重爆
 だつてあんさと集ってくる。三十六計逃ぐるに如かずだ。私達は大谷伝
 いに上った十軒家のあたりまで難を避けて行った。
 少し前頃まで十軒のバライ(小屋)が、このあたりに立ち並んでいたの
 ら、名前が付けられている。が、数日前の重爆B三十八によって影も形も止
 めぬほどにやられていた。
 奥まった山峽の草群らに入ると古い草葺きの無人小屋が残されていた。
 私たちはここに入った。途中で傷ついた右足背の激痛に堪えられず
 思い余って襦も引き裂き、それで手当てをしていると、軽機の連続点
 射が近くで聞える。無気味な寂びしさか襲ってくる。
 この小屋の中で貰った毛氈で私しかなり苦勞したものだ。
 「兵団まで連絡をとりに行ってくる。」と言って、当番の山崎哲弘上等兵、
 を伴って出て行った徳久少尉はなかなか戻って来ない。
 そう美しい月が見えている。私は自分自身の心を癒め上げることが
 出来ない。この事態に對して、私は自分自身の心を癒め上げることが
 出来ない。如何に処すべきかを悩むのだった。

「ヨサッへに勝り殺されるの嫌だ。もし単独行動をとる場合には、多くの戦友の眠る、ネグロスの土民と化して、山奥深く、天上天下唯我独尊の生活で送ろうか。などと考えたりにいると、あたったと徳久少尉が戻って来た。『おい、本當だ。』」
 「八月十五日、無条件降伏。『えっ、やっぱり無条件。』」
 「『そうぞや、条件なしぞや。』で、友軍は、日本軍はどうなる人です。」「兵団から指示はどうですか。」「たまたまかけるように聞いたです。私達に、その後の事は適時に兵団側から指示があるぞうだ。と言いつつ、北月を向けてしまふ。徳久少尉、若くして重任を担がされる彼の北月中も、じつと見ながら私もつらかった。」「
 「さう、それから後の言葉は、何も続けられず、また聞きたくもなかった。なお割り切れぬ心のまま、空を仰ぐと月が光っている。祖国の人たちもみなこの同じ月を眺めているのさうか。月と地球とグローバル（丸い）の、なぜ人間だけが醜い闘争を繰り返しているのさうか。」「
 「祖国は敗北した。国が崩れ去ったのだ。犠牲者はどうなる。凄まじく、中島、小泉、運田、田中たち中將の戦死者たちよ。そして数千、数万の犠牲者たちの

その霊は何によって慰められ安らぎを得るのさうか。我々の苦難の数々は、何のためへの犠牲として受け入れられるのであろうか。

天神山で、そして地獄谷で、カマラスクで、あゝあるいと、太即山での霊魂は、やがて来るべき将来においては、最高の価値ある犠牲として許され。そして我々によって、祖国の人々によって、いや私によって、無上の価値も、
 「さうさ小なけ小はならないのだ。」「
 「谷合いの木立ちはかなり明るくなったが、私の心はなお閉ざれたままであった。空の月は流れている。月を仰いでいる私の両手は、堅く握られたままであり、止め度なく流れる涙は、頬を伝い胸にまで流れてくるのだった。私は誰しもない草原のさへへん人入って行った。」「

国山崩る哀しき草原に

草刈りをすれば 月上り見ゆ。

三十七 その後

無条件降伏に關するリリースメントを見た兵団長河野中将は、その真偽真相を確認すべきである。憲兵隊一箇分隊へ通訳山下兵長（彼はよく話したことがある。高島易断に關係があると聞いていた）を付け、連合軍のバコロド松本へ派遣した。彼等は途中でヨサツペによって捕えられ丸裸にされ、お袋叩きに会ったと言ふ。通りかかった巡警隊（警察官）に救われ、目的の本部への誘導を受けただけである。一行は好い待遇を受け、被服糧秣ラジオ等と世間の受け（二航連の中尉の名を出しセツトせよとの命令）戻つて来たのであった。

果たして降伏・終戦は正直正銘偽らざる事実として確認された。その後参謀渡辺中佐を軍使として、日本軍人の処置・待遇・投降日時・場所・服装・所持品に、至るまでの協定がなされ、兵団長命令の下達がなされた。八月二十六日、命令受領者の持ち帰った命令・会報・指示は事ここまじかだった。兵団は前面の米軍に投降せんとす。いぬんに始まり、その日時（八月三十日）場所ならびに建制順序、自決禁止に至るまで細心の注意を払ったものであった。かくしてネグロス島西ネグロス地域に於ける日本軍人ならびに軍属は昭和二十一年八月三十日、バコロド收容所に收容されることになるのだった。

下山の途中、松岡正喜一等兵が隊列を離れたのは惜しまれる。

彼には別の思いがあり、それへの対策を考えたかも知れない。用意した行くといつて列を離れたようだが、暫くの間、同輩が探索したか、前に見出せなかったと河野君雄一等兵から報告があった様である。返す返すも残念だ。惜しまれるが、再び出発命令のため、中隊生有者はその場所を去つたのである。

私達も山を下り切ろうとする付近に数人の若い米兵が立っていた。カラバイン小銃を持って監視しているのだった。

中隊長が隊列の先頭に立ち、私がその小銃に銃いていた。ところが米兵の一人が中隊長の傍でいる軍刀を取り上げようとするのだ。私は叫んだ。

「ヘイ、ユーノウナッシング・エス・ヒーズ・ア・ミーリチュエナント・ユー・キャン・ド・コンフィス・ケイ・ジョン・ヒズ・セイバ・ゲラウエイ。」

「おい、お前は何か知らんのか。彼は陸軍中尉だぞ。お前にその軍刀を没収させてやるものか。引き退かれと自分でも敬遠く程、腹していた。が、大衆が怒鳴ることによって胸のすくような思いであった。

下山の際、将校の帯刀は特に赦されている事と私は知っていたからだ。

九月九日にレイテ島に渡り、タクロバン郊外アボラの第一收容所に移された。私は同僚たちと食糧の梱包を小づいて、木箱の上には詰め変えた作業の使役に使わされた。誰の口添えがあったのか、收容所内の事務所の用務を言い付けられ、言葉が理解出来ること、英文タイプライターの使用の事が理由になつて、日本人でただ二人の事務所に出勤した。

アメリカ英語はスラング（訛り）も

発言もかなり風変わりで馴染めなかったが数日で理解出来

ようになった。

所長や事務員たちが米人と対等な扱いをしてくれたが、私の運入兵に白人同等の言葉を使ったり物を直接渡す等の言動をすると眉をしかめるのだ。アメリカの運入問題は、こんな戦いの場でもさう差別が存在しているのだ。後半、こゝでの業務は日本軍人と従軍看護婦の正面、側面、手直しと指紋カードの整理が多くあった。同胞の一枚一枚の手直しの心も疼きを感じるが、仕事は早く仕上げたい。心が完成せねば、次の便の乗船名簿に登録されない。九月十月と過す、二十四才の誕生日も収容所長室で勤務した（十月十四日）。私は所長と数週間生活を共にしたか決してサー（敬語）の言葉は承えなかった。これは亡き戦友と自分自身のフライドのためだと心に抱えていたからだ。十一月十八日私達を乗せたエドワードイブリッチはスクランを離れ船首を北から北北東に向ける。祖国に近づいていった。

追記

昭和二十年

十一月二十八日 浦賀入港 横須賀署
十二月一日 復員

高知県福祉生活部世話課

に保管されていた私の軍歴は

（完）

昭和十八年七月十日以降は空白になっていた。昭和五十五年九月に軍歴を申し立て書をしたため提出した。同課証明書の末尾には昭和二十年十二月一日 予備役編入と記載されている。